
2Kの君

miz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2Kの君

【Nコード】

N6552J

【作者名】

miz

【あらすじ】

汚部屋はキャリアウーマンの勲章かもしれない——偏った持論を持つ、いち汚部屋住人——高宮凜子二十六歳2Kの城主——と、どこかの世界の誰かさんの部屋が、扉一枚で繋がってしまった所から始まるおはなし。 保険としてR15と残酷描写有りのタグを追加いたしました。

珍しく終電に間に合ったものの、よくよく考えると間に合わなかった方が良かったのかもしれない。

金曜日の終電の混み具合と云ったら！

呼吸もままならない密室空間。

くわえて季節は盛夏。

誰のものともわからぬ、湿った肌と密着していた事をふと思い出し、凜子は半目になりながら、高いヒールを玄関で脱ぎ捨てる。靴は揃えるものという概念は、疲弊しきった彼女には最早なく、さらに玄関口でストッキングまでもを脱ぐと、そのままそこに放置して、壁のスイッチへと手を伸ばした。

蛍光灯の白い光が、明滅したのち、パチンという音をさせ、消える。刹那浮かび上がった廊下はいつも通りだったのだが、彼女は盛大に溜息を吐いた。右手に持つコンビ二の袋が、がさりとむなしい音を立てる。足元の障害物になるべく避けるように探り探り前へ進むと、ややしてリビングへと続くドアへとたどり着いた。

リビングといっても大した物では無い。八畳程の広さをした部屋が縦に並んでいる為、手前の部屋にテレビやらソファやらを置いてリビング風に使用しているだけだ。

正確に言くと1LDKではなく2Kが彼女の住む城となる。

二つの部屋にキッチン。浴室とトイレ。学生時代に住んでいたワンルームの部屋に、毛が生えた程度の余裕があるレベルの部屋。それが二十六歳となった彼女の居城である。

風にあおられて揺れるカーテンの外は闇色をしている。慌しく出勤した朝方から、この部屋の主であるところの彼女が帰宅する今まで、ベッドルームとして使用している部屋の窓は、無用心なことに開けっぱなしだったらしい。小さく肩を竦めて凜子は壁面を指先で探り、スイッチを押す。

しかし一向に室内に明かりは点らない。リモコンで操作したんだっけ？ とローテーブルへと手を伸ばす。ばさばさと腕に引っかかって落ちたのは、積み上げられている書類だろう。然程気にする事なく、目的のものを探り当てると、気持ち天井にそれを向けた。ピ―と言う軽い電子音を立て、室内は刹那のうちに煩雑な日常を照らし……

そして、パチンという音をさせ、暗転した。

「もー！ なんだっつーの」

疲労が倍に増したような気がする。

凜子はぼやく様な声を上げてそのまま底に座り込んだ。確か、家電製品が壊れるのは重なると聞くけれど。

珈琲メーカーが壊れたのは一週間前で、エアコンは昨日。冷蔵庫もなんとなくやばいような。つらつらと思いつかべながらも、いや違っただろ、と首を振った。

照明がつかないのは、蛍光灯が切れた所為だ。新しいものを買ってくればそれで済む。しかし、ここところコンビニエンスストアや飲み屋以外の店舗が開いている時間に帰宅した記憶が無い。一人暮らしの超絶多忙なお姉さんの買い物は、専らネットショッピング頼りだった。

「コンビニに蛍光灯って売っていたっけ……。また外にでるのは、さすがに面倒」

もう一度だけ、疲れたような溜息を吐いて、ビニールの袋へと手を伸ばす。指先が冷たい金属に触れ、彼女は迷うことなくそれを取り出した。プルトップを引き上げ、ああ。単純なことに、喉の奥で弾ける炭酸が、一日の疲労を洗い流してくれるような錯覚に陥る。一気にそれを飲み干すと、彼女は気合を入れるように立ち上がり、リビングから続く三畳ほどのキッチンへと向かった。信じられない事にキッチンの明かりも弾けるような音を立てたのち消えてしまった。そして二本目の缶ビールを求めて開けた冷蔵庫も、動作していない。

「うわ、停電？」

なんとなく嫌な予感を覚えて冷凍室を空けると、ひんやりとした冷気が降りてくる。買い溜めであるロック氷は、まだ溶けていない。電気が落ちたのだとしたら、それほど時間が経っていないことを指し示している。

「さーいーあーくー」

ぶつぶつとつぶやきながら再び冷蔵庫をあけ、凜子はそのままそこに座り込んで、まだ十分に冷えている缶ビールを飲み干した。

ハワイ旅行をした際に、お土産として配布する為に大量購入したキャンドルが、テーブルの上に並べられている。ゆらめく炎の光が室内に大小の影を落としこむ。

ソファの影。ダストボックスの影。転がっているカバンの影。何かの空箱の影。いすに引っかけられたワンピースの影。ゴミのつまったコンビニ袋の影。なぜか、トイレトペーパーが二つ転がっている。その近くの生成りをしたカーペットが茶色い染みを作っていることから、あれを拭こうとしたのかもしれない。と胡乱にそれを眺めながら彼女は考えた。

クッションの間には、失くした！ とこの前から探していたメガネが挟まっている。救出されたメガネはフレームが微妙に歪んでいたが、凜子は構わず目に付くところに置いた。こうして改めて見ると

「きつたない部屋」

二十代後半に突入した女性の部屋とは思えない。

たかみやりんこ

高宮凜子二十六歳——これでも女性向けファッション雑誌編集者

——は、失笑すると手近にあったクッションを引き寄せ、ごろんと転がった。因みに働くお姉さんの戦闘服はとっくの昔に脱いでおり、いまはノーブラにキャミソール、下はパンツ一枚。誰にも見せられない格好だが、ここ2Kの城では彼女が主である。ちなみに恋人は社会人になってから居ない。つまり唐突な夜中の訪問に怯える事無く、好きな格好で好きなだけ弛緩している事が可能だ。

偏った持論だが、汚部屋はキャリアウーマンの勲章だと思う。芋虫のように寝転がりながら、スナック菓子をつまみ、三缶目のビールを開けた。だらしが無い事、この上ないのだが、明日は久しぶりの休日だった。うっかり夜更かしをしても徹夜になることはなく、それどころか朝寝を存分に楽しめる。平日半休を土日出勤の代わりに当ててきたこの四カ月の中では、非常に魅力的な単語がずらずらと脳裏に浮かぶ。

週末。休日。朝寝。

昼からビール。

涼しくなったら買い物。

あ、蛍光灯買わなきゃ。

エアコンの修理もか。

それに――掃除？

いやいやそれは日曜日でも良いや。

明日ぐらい一日怠惰に過ごそう。

それにしても電気はいつになったら復旧するのだろうか。

ごろんと体の向きを変えて、カバンの中から携帯電話を取り出す。キャンドルの炎と比べ物にならない無機質な明りになんとなく安心して、凜子は液晶を撫でた。時刻はまもなく午前二時。帰宅してそろそろ一時間は経つ。なんとなしに顔をあげた先が捉えたのは、玄関へと続く暗い廊下に突如差し込む眩い光だった。

やっとかよ、と内心で毒づきつつ、次の瞬間には違和感を感じ、凜子は勢いよく起き上がった。妙な、気配。廊下を照らす光はこの部屋のものではなく、玄関の向こうから室内へと漏れてきている。そして、何かの影。凜子は息を殺しクッションを抱きかかえると、影へと目を凝らす。

強盗か、それとも。

数日前ニュースで流れた、集合住宅における性犯罪が脳裏を過ぎる。忽ちのうちに嫌な汗が浮かぶ。玄関付近で足を止めていた影がドアが閉まるのと同時に動き出す。探るようにとゆっくり歩を進める影に、凜子は金縛りにあってしまったかのように固まる体を震わせる。

そして、影が、廊下とこのリビングの境界を踏んだ瞬間、勇気を振り絞って飲みかけの缶ビールを投げつけた。が、すぐさま体が引き倒され瞬く間のうちに、腕をねじり上げられる。何が起こったのか一瞬理解できなかった彼女の視界に飛び込んできたのは、侵入者——美しい顔立ちをした男だった。

「とんだ侵入者だな。イスラルの手の者か？」

「なっ！？ なにすんのっ！？」

「こういった場面で『何をするのか』と問われたのは初めてだ」

薄く笑った男が、凜子の顔の横に何かを突き立てる。視界の端が捕らえた炎のあかりに反射して揺れる銀色に、背筋が凍りつく。

「動くな」

低い男の声に、注意は引き戻され、凜子はえも知らぬ恐怖に身を震わせた。

「さて……」

額づくように凜子に顔を寄せた男の亜麻色の髪が落ちる。酷薄そうな笑みを浮かべていた唇が開き、それからどういった理由か固ま

った。青灰色に彩られた瞳は数度瞬きを繰り返し、凜子から視線を外す。そして僅かに身を起こした男は、自身に問いかけるでもなく、言葉を紡ぐ。

「ここは……どこだ」

形勢逆転といった感じで、男の拘束から逃れた凜子は、まくし立てた。

「どこつて、わたしの部屋なんですけどっ！ 勝手に入ってきたのそっちじゃない！！」

怖かったんだから！ と涙目になりながら凜子は侵入者を睨み付ける。

「ちょっと待て、ここは俺の寝所の筈だが」

「はあああああ？」

しばし呆然としていた男が判らないと首を振りながら、完全に身を起こす。

「続き間がなぜ塵溜めのようになっているのだ」

「ご、ゴミ溜めって失礼ね！ 明後日くらいには掃除しようと思っ
ていたんだから！」

「掃除は毎日している筈だろう？」

「わるいけど毎日終電逃してるし、そんな余裕ないわよ！ 夜中に掃除機なんかかけたらご近所迷惑になるしっ！」

「いやお前ではなく——お前は……」

ようやく視線の合った男は、まじまじといった風に凜子を上から下まで眺め、眉を顰めて一言。

「服を着ろ」

短く言われた言葉に、興奮したように喚いていた凜子はぴたりと動きをとめ、慌てふためいたようにソファの上に雑然と積みあがっていた布切れを手繰り寄せた。

「な、な、な、な、なんなの――――あんだ！」

恐怖と羞恥と混乱で思考が追いつかない。

突然の侵入者に押し倒され、ナイフをちらつかせ脅されたかと思ったら、自分の部屋が塵溜めだ（実際そうなのだが）掃除しろと言われ、確かにルームウェアにしては無防備かもしれないが、不愉快そうな顔で服を着ると言われ。

男は大きく息を吐いて、亜麻色の長い髪を煩わしそうに掻き揚げると考え込むように額に手をあてる。凜子から外された視線はローテーブルへと向けられ、炎の明りが青灰色の瞳の中にうつりこむ。男が纏う白い長衣の襞はいくつもの影を作っている。投げ出された長い足は裸足だ。

妙だ。

この汚部屋に自分以外の人間が居るというこの状況も妙だが、もっと妙なのは男の格好だ。

「……へんた、い？」

凜子が漏らした一言は思いの他大きく響き、男は視線を流す。

「なるほどな」

しかし男は気を悪くした様子もなく、肩を竦めさらには口の端を

やや持ち上げた。

「ラストウィリアの言っていた“誰にも知られぬ誰も知らぬ願えば開かず願わずとも開く”」

「……え？ らす、らすとー？」

「こつちの話だ。——女、名はなんという？」

「凜子……」

「——リン？」

「高宮凜子だけどさつきから——」

「タカミヤリンダケカラ？ 奇妙な音節だな。リンでいいだろう。リン」

「なんなんですか？ 偉そー……」

「ヴェイル・シェイル・ガーランド・エレ・ラ・アゼリアスだ」

「ヴ、ヴえ」

「シェイルでいい。さて、リン」

男は腕を組むと、人の悪そうな笑みを浮かべ、厚顔不遜に言い放った。

「掃除をしろ」

「言っておくがな。暫く俺もお前も此処から出られないと思うぞ。まあお前は不幸にも巻き込まれたわけだが」

振り返るシェイルの髪先に目を奪われていた凜子は、むっとしたように唇を引き結んだ。

「いいからとつと開けてよ」

「そう急くな」

笑いをかみ殺すように肩を揺らしたシェイルが、玄関の扉を開く。そうして向こう側にひろがる空間に、凜子はあんぐりと開けた口を暫く閉じる事ができなかった。

「な、なにこれ——」

一歩踏み出して、足を止める。

一体いつ、だが、どうやって。

石造りの広い空間。四隅に備え付けられた金属製のトーチから燃え上がる炎が、その空間を明るく照らしている。飴色に磨きこまれた大小のチェストが左壁に並び、窓にかかるカーテンは濃藍。正面には作り付けの暖炉。右手に両開きの大きな扉、部屋——部屋と言ってもいいのだろうか——の中央に敷かれた紋様の織り込まれた深紅の絨毯の上には、ゆるやかなカーブを描く飴色をしたテーブルと、長椅子。

この冬の特集として取り上げようと思っていた古城ホテルの一室のようではないか。

「「こごと」よ……」

「俺の部屋だ」

「ちよつとまって、だつて」

背後を振り返る。見慣れた灰色のドアは無く、複雑な彫りが絡みあう木製の扉がある。飛びつくように開くと、脱ぎ散らかされた自分の靴が見え、差し込まれた光によって照らされた埃が舞い上がった。

「ええ、なん」

自分の部屋と古城ホテルのような居室を繰り返し見、凜子は、扉に片手をかけて面白そうに細められた青灰色の瞳を見上げる。

「この扉ひとつを隔てて、俺の世界とお前の世界は繋がっていると
いう訳だ」

「——訳だ。って……なんで!？」

「“誰にも知られぬ誰も知らぬ願えば開かず願わずとも開く”
という術が施されていたのだろう。この扉の紋様に。“願わず”——
無意識に力を注ぎ込むのが発動条件のひとつか」

「ぜんぜん言ってることが判んない」

「俺も判らないが心当たりはある」

堂々巡りになりそうな問答に、凜子はぼかんとしたままの顔でシエイルを一瞥し、視線を落とすと、脱ぎ散らかされていた靴を揃え自分の城へ入り、ドアを閉めた。

「おい！」

ついでに鍵を閉める。

「寝よう」

酔っ払っているのかもしれない。350ミリリットルを三缶。6%のアルコール分で酔えるかどうかは自信ないが、おかしいことが起こっているのには間違いない。先へと広がる暗闇に向かってペタペタ歩き出すと、開錠の音と共に、勢いよくドアが開かれた。薄暗かった廊下が忽ちのうちに照らされ、まるでホラー映画のような巨大な影が落とされる。

「いやああああああ！ かぎ閉めたのに！！」

両腕で自分を抱きしめ首だけで振り返ると、少々慌てた形相をした男。亜麻色の長い髪。襷が多く取られている白く長い衣を身に纏っている夢の世界の住人がずかずかとこちらに向かってくる。

「こ、来ないでよっ！」

「本来なら此処は俺の寝所だ」

「知らないよそんな事！ だってわたしの部屋だもん！」

逃げるようにリビングに飛び込むと、床に突き立てられたままの短剣が鈍色の光を反射させる。

「こんな狭い場所が部屋なものか」

「狭いって、し、失礼ね！ 一人暮らしで2Kもありや充分でしょ！
っていうかその物騒なもの持って帰ってよ！」

「にーけー？ ああ、忘れていた」

シェイルは凜子の言葉に、首を傾げながらも、驚いていた。護身の剣の存在を完全に失念していたからだ。いずれにせよラストウーリヤには、報告する羽目になるのだろうが、予定調和を超える出来事に遭遇した自分は、やはり冷静さを欠いているのかもしれない。改めて訪問した荒れ果てた空間をぐるりと見回し、シェイルは遠慮なく腰を下ろす。

「あああ、あんたちよつとカバンの上に座らないでよつ」

自分を押しつける女というのも初めてだった。頬を膨らませカバンを抱きこんだ女を見る。ずいぶんと変わっている。この小汚い空間の主らしい。両腕はむき出しで、衣は膝丈より少し短い。裸に近い格好をしているのにも関わらず、娼婦のような隠微さは欠片もない。ゆるく巻かれた濃い茶の髪は肩よりも少し長く、瞳は恐らく漆黒。カバンを抱えたまま落ち着き無くうろつろとしていた女が、諦めたようにぺたんとその場に座りこむのを、遠慮なく観察する。

「リイン」

ものを投げつける女というのも初めてだ。

「喉が渴いた。さっき、なにか液体の入ったものを投げつけただろう？ 衣も少し濡れてしまったから着替えも欲しい」

その言葉に、これでもかというくらい目を丸くさせて凜子は首を傾げる。

「な——ずうずうしい！ 自分の部屋帰ればいいでしょ！ っていうか帰って！」

「あちらに帰っても侍女を呼ぶ事も出来ぬ。そもそも寢酒は寢所に用意させるものだしな」

「はああああ？ 意味、ほんとーに判んない！ あっち、あんたの家でしょ！」

「あちらは居室。こちらは寢所」

「ああいえばこう言うつて、どんな育て方されたのかしらねっ！」

「それはお前にも問いたいな。例えば、このような狭い空間で塵芥に塗れた——」

「うるさい！」

忙しいんだから。ぶつぶつ呟きながら部屋を横ぎり、戸棚のような場所から何かを取り出すと、押し付けるようにシェイルに渡す。複雑な印字がされてある硬質の筒を指先でなぞってシェイルは複雑そつな表情を浮かべた。

「これは？」

「ビール、お酒」

シェイルが軽く振ると水音がする。

「ああああ、何振ってるのよ！ ばかじゃないの！ もう」

凜子は呆れたようにシェイルの手元から缶をとりあげ、代わりに自分が持っていたものを手渡した。

「どうやって飲むのだ」

その言葉に凜子は頂垂れる。

「なんかあんと話すの疲れる……やっぱり夢。それとも疲労からくる幻覚と幻視……ストレスかも……」

「夢ではないと思うが……これは冷たいし」

片手で缶を握りこんだシェイルは、あいている方の手を凜子に伸ばし、華奢な肩を抱き寄せた。

「お前は、暖かい」

一瞬の間のうち、叫ばれた単語は、シェイルに理解できないものだった。

いわく、セクハラ。

1 - 4 (後書き)

一般的に“居室”は寝室も含まれますが、あちらの世界の方々に
とっては“居間”のみを指しています。

「はあ」

何度目になるか判らない溜息を吐いた凜子に、ベッドに寝転がっていたシェイルは「そろそろ現実を認めろ」と鷹揚に言った。

床に落ちていたと云うか、埋め尽くされていた要らないものを片すと、それなりの空間が広がる。職業がら溜まっていく一方の雑誌はひとまず目に付くところに積み上げて置く。それ以外の明らかに塵と分類されるものについては、東京都推奨の半透明の袋に突っ込んだ。殆どが紙ゴミと空き缶にペットボトル。実に五袋にもなってしまったそれらの置き場としてひとまずベランダを選んだのだが、その際に、凜子とはんでもない事実気がついた。

まず今の季節は夏だ。しかも夏真っ盛り。気象観測史上という言葉葉は、今年も例に漏れず気象予報士たちが、馬鹿の一つ覚えみたいに繰り返している。それにも関わらず、薄ら寒い空気。むき出しの二の腕を擦りながら見下ろした世界は、しっとりとした靄に包まれている。何も見えない。夜空も見えなければ、街明りもない。まるでこの部屋だけ切り取られてしまったかのように、外には何も無いのだ。

じゃあ向こうの部屋は？

あの古びていて豪華な、あの部屋の向こうは？

ようやくそこに思いが至ったがいなや、凜子はシェイルの居室だという部屋に飛び込んで濃藍のカーテンを徐に払う。透明なガラスの向こうは、同じような靄に包まれていて視界が不明瞭だ。今度

は騒々しくもう一つの扉へと向かう。両開きの重い扉を開くと、黒くしっとりとした夜気のような靄に包まれている。戸惑いながらも爪先を出してみると、得体のしれない何かが絡みつくような感覚に陥り、慌てて扉を閉じた。

「なんで？」

一連の確認作業を終えた凜子は疲れたように、床に敷いた客用布団の上に座り込んだ。なぜこの部屋の主である自分が、布団なのかといえば、シエイルが床で寝るのを断固拒否したからだ。凜子としては別にどちらでもいいのだが。というか、別に自分の部屋で寝なくとも、あちらの豪華な長椅子で寝ればいいじゃないか。

「先ほども言っただろうが。この扉ひとつを隔てて、俺の世界とお前の世界は繋がった」

「ああ……言ってたっけ……。でもなんで？」

「“誰にも知られぬ誰も知らぬ願えば開かず願わずとも開く”——俺たちの部屋を繋ぐ扉に隔離結界の術式が彫られているのだと思う」

「……術式ねえ。魔法とか言っちゃったりする？」

「少し違うが似たようなものだな。魔法は自然界を構成する要素に基づくもので、紋様術を含む魔術は、人が潜在的に有している真力と自然界に置ける五大要素を融合してより効果的に発動させるための計算式を明文化した——」

「うう、許容できる理解を超えたよ……」

「そうなのか？ 理がちがうだけだろう」

「理ねえ……。科学みたいなものかなー」

「かがく？ お前が先ほどから弄くっているそれか？」

「そう」

凜子はタッチパネル式の携帯電話を胡乱に見る。科学技術の結晶

とも言えよう。液晶が示す時刻は午前五時。夏の夜が明けるのは早い。しかし太陽が姿を現す気配は無い。そうして、嫌でも目に飛び込む“圏外”の文字に、凜子は諦観せざるを得なかったのだ。

「それが白い光を放っている原理は俺も判らないが、お前の世界では当然のことなのだろう?」

「まあそうだけどさ」

ごろんと横になって、布団をひっぱりあげると、肩肘をたてた体制で、こちらを見下ろしているシェイルと目が合う。

「その術とかでちゃっちゃと元に戻らないの?」

「俺が構成した計算式ではないからな。解析するのに少々時間が必要」

「……あんたの部屋と繋がっちゃったって現実……認めるよ」

こうなったらとことん現実的になってやるけど。

凜子はシェイルから、見慣れた天井へと視線を移す。気持ちだけでも、体を休ませておいた方がいい。とんだ週末になりそうだ。水道、ガス、電気。ライフラインは絶望的な現実。ついでに、食料もだ。何が悲しくて住み慣れた自分の部屋でサバイバルを意識しなければいけないのだろうか。現実ってヤツは小説か何かのように、気を失って、おしまい。という訳にはいかないらしい。

「認めるけど……この貸しは大きく付くからね!」

凜子の言葉に、シェイルは刹那だけ瞠目し、吹き出す。

「何がおかしいのよ」

「いや……。そうだな。必ず借りは返そう。ヴェイル・シェイル・ガールランド・エレ・ラ・アゼリアスの名に於いて、空間の共有者リインに約束する」

間の抜けた表情を返す女にシェイルは、またひとつ笑いを落とし、瞳を閉じる。

狭い空間。安っぽい寝具の感触。すぐそこに感じられる、見知らぬ存在の呼吸。

だがしかし、不思議と不快ではない。

希代の術師によって創り上げられたこのどこにも属さぬ狭間が、暫しの休息を自分に齎すであろう予感さえある。

こうして、彼女にとって憂慮に塗れた週末の始まり——彼にとっては強制的に与えられた休暇の始まりが告げられた。

食欲をそそる匂いに誘われるよう、シェイルは扉の紋様を紙に写し取る手を休める。思い出したように空腹を覚える自分に苦笑を漏らす。振り返ると暖炉の前に座り込んで作業をしていた凜子が立ち上がるのが見えた。朝食は訓練中に支給される携帯食料に似たような粗末なものだったが、この分だと昼食は期待できそうだった。

「人間やればできるのねえ」

凜子は、自分の成果に満足したようにテーブルの上を眺める。といっても大した物ではない。スライスチーズを適当にちぎって混ぜたスクランブルエッグに、買い置きしていたものの存在を忘れていたソーセージ。奇しくも冷凍庫に入れていたのだが、不慮の事故によって解凍されてしまった食パンと冷凍野菜の代表格であるほうれん草もフライパンで軽く炒めてみた。

調理器具に調味料とお情け程度の食材は残っていたし、ガスがなくとも火はある。些か乱暴だけれど薄く油を引いたフライパンを暖炉に突っ込んでみたところ、うまくいった。柄の部分が多少焦げてしまったが、特別問題があるわけでもない。一人暮らしの凜子は多聞にもれず自炊を久しくした記憶が無かった。

水はペットボトル一本しかなかった為、先日ネット通販でダース購入した安いワイン——ランブルスコ——である。アルコール分も通常のものより低く、凜子にとってはジュース代わりだ。重厚なテーブルに似合ぬ安っぽい食器ではあるが、いくつかの彩りを盛り付け並べると、それなりに見える。

「ほう、なかなかだな」

自分の隣に座ったシェイルに「でしょう」と得意げに胸を逸らし、食パンを手にとするとバターを塗った。

「見たことある食べ物ある？」

「ああ、どれも見たことがあるな。これは日頃食べないが」

シェイルはソーセージを口に運びながら答える。

「ふーん、食文化は似ているのかな。それソーセージね。たぶん豚のどこか」

「ベレーの味に近いな。これはザラサイに似ている」

次に示されたほうれん草に凜子は微妙に笑った。

「そう言われると違う味を思い出しちゃう」

いわずもがな、ザラサイである。

「で、解析ってヤツの調子はどうなの？」

「ラストウーリヤの術式の意地の悪さを改めて思い知る良い機会になった」

「らすとーりや。人の名前？」

「叡智の塔主、天文官、黒き賢者、ラストウーリヤ・ハルス・ウル・シート」

「長つ。全部名前？」

「叡智の塔主と天文官は同じ意味だな。天文官は役職で、叡智の塔内に執務室がある。黒き賢者は二つ名みたいなものか。ラストウーリヤ・ハルス・ウル・シートが名前になる」

「それにしても長いよ。……シャルだっけ？ あんたの世界の人ってみんなそんな感じ？」

「シェイルだ。まあ、シャルでもいいか。新たに名付けられるというのも、新鮮なものだなリン」

シェイルは小さく笑いを漏らす。

「高宮凜子」

「ターミリン」

「違うよ“凜子”が名前」

「リン——リンで良い」

「なにそれ」

「お前は俺をシャルと名付けた。俺はお前をリンと名付けた。空間を共有する同志の絆のようじゃないか」

名案だという顔つきでシェイルは凜子の頭を撫でる。

「なんだか良くわかんないからそれでいいよ……」

何が面白いのかシェイルはくつくつと笑いを深くする。

「お前と話していると実に新鮮だ。それも理が違っからなのか」

「さあ……わたしは凄く疲れるんだけどね」

「ラストウーリヤにはある意味で感謝しないとな」

肩を落とす凜子の横で、シェイルは機嫌よさそうにグラスを掲げ、透明な液体を揺らした後、杯を空にした。

薪が時折爆ぜるあちらの部屋に居ると、尋常では無い出来事に巻き込まれたと実感できるのだが、2Kの自室に戻ると、途端に現実へ引き戻される。

たった一歩で、現と夢を行き来する。

すらりとした長躯の美人。男性を指して美人と言うのに違和感を感じさせない美。

わりと癖の無い亜麻色の髪は背中の中ほどまである。髪紐は無いかと聞かれたため、シュシュを渡しておいた。黒地にピンク色のドット。ポリエステル100%である。

三色ボールペンに感嘆し、ノートの紙に驚愕し、勿体無いとつぶやきながら、今は玄関口に座り込んで、扉に掘り込まれている細やかな紋様を写し取っている。真剣にその模様を見る瞳は青灰。胡坐の形に組まれた足は長く、長衣の襷はだいぶ崩れ皺がよってしまった。着替えを求められたのだが180センチメートルを優に越す男に合うような衣服は生憎持ち合わせていない。凜子が寝巻きとして使用していたTシャツが、彼女の持つもつとも大きなサイズの衣服で、シエイルは不満げにしながらも、仕方なしにそれを身に着けている。

つまり今は、ぴっちりとした黒い綿のTシャツとロングスカートのようにして身に着けている長衣と云う格好。違和感たっぷりな組み合わせを思い出して、凜子は少しだけ笑った。

堀の深い顔に引き締まった唇。
瞳の色は青灰色。

美醜の判断をする機会が、一般よりも多い彼女の目から見てもそれらは、美しい配色、美しい比率をもって、その人を構成している。

ボールペンの構造について質問を繰り返し、シュシユで髪を束ね、Tシャツのタグの意味を問う。と書くとき頭の螺子が飛んでしまった人物を思い浮かべてしまうが、彼は異邦人。

否、異邦人どころではない。世界の理が違うといていた。異世界の存在なのかもしれない。宇宙人云々、平行世界云々は数多の人間によって議論されてきたが、その存在証明となりえるかもしれない物がそこに在る。

昨日の夜は、日曜日に掃除でもしようかと思っていたのだが、凜子の日常であった混沌とした室内は、既にあっさりするほど片付いていた。床にゴミは落ちていないし、行方不明になっていたHDDレコーダーのリモコンも見つかった。ソファの上に脱ぎ散らかされていた服もクローゼットに押し込まれ、後であちらの部屋に運ぼうと思っていた食材や調理器具が一箇所に纏められてある。ローテーブルの上に並ぶキャンドルは数を減らしたが、歩くのに困らない程度の控えめな明るさを、この部屋に与えている。

ベッドに腰掛けて窓外を眺める。相変わらず薄暗い靄が立ち込めていて、先は見えない。幹線道路を走る車のテールランプも。駅前には立っただけのタワーマンションも。火が燃えているということ、この空間に空気は存在しているのだろうか。昨晚窓辺でカーテンが揺れていたのを思い出し、凜子はベランダへとでる。季節感のないひんやりとした空気。靄に手を伸ばすと黒霧が指先を隠した。一寸先は闇という単語をそのまま表現しているような光景に、しばし放心する。

ここは自分の世界では無い。そしてシェイルの居た世界でもないと言う。

ならばここはどこなのだろうか。日常から弾き飛ばされてしまった世界と世界の狭間。

「おい、あんまりそれに触れるな」

掠れた声と共に指先が握りこまれる。背中に暖かな体温を感じて、凜子はなぜか安堵する。振り返ると青灰の瞳が心配げに細められていた。

「なんで？」

「得体が知れぬものだから」

なるほど正論だ。例えば毒々しい色を放っている茸。奇妙な殻で柔らかな肉を守っている貝類。自分の理解の範疇外のものに不用意に触れると碌な結果を残さない。シェイルはどこか遠い目をしたまま、凜子の指先を握り締めている。妙な居心地の悪さに振り払おうとすると、バランスを崩してシェイルの腕の中に自ら飛び込んでしまった。

したたかに打った鼻が痛い。また例の人の悪そうな笑みを浮かべて笑っているのだろう。上下する胸の筋肉にむっとして顔をあげると、大丈夫か？ と覗き込まれた。

*

「リイン」

自分と呼ぶ声だ。

暖炉の前で転がっていた凜子は、手にしたまどろみを放すまいと半目を開けて声の主を見やる。シェイルが呆れたような表情で、自分の横に腰を下ろした。ばさりとお腹の辺りにかけられたものは、膝かけだ。冬場オフィスで使っていたもののだが、春にクリーニングに出し、夏の今はクローゼットの隅で存在を忘れられていた。

週末の掃除に、衣類の出し入れまでは予定していなかったのだが、調節の難しい室温に羽織るものを求めて収納ケースを漁った結果だった。凜子の部屋はエアコンの必要ない過ごしやすい温度でどちらかというと涼しい位だ。反してシェイルの居室は暖炉の暖かさが違和感無いほどの室温だった。

凜子が暖炉の前を陣取って寝転がっていたのは、単純に暖炉が目新しいもので憧れにも似た気持ちを感じたから。そして、彼女の主な作業には暖炉の炎が必要不可欠だったからだ。

調理然り、読書然り。

凜子の部屋よりか、こちらの部屋の方が断然に明るい。

どういった原理か不明だが、石造りの壁面に作りつけられているトーチの炎も一昼夜経とうとしている今になっても、消える気配が無い。凜子が探し当てた華型キャンドルは、既にそのかわいらしい形を崩し、短くなった芯が辛うじて残っているというのに。

「お前には慎みが無いのか」

はしたない。と存外に言われ、凜子はオヤジ——。と心の中で答える。

枕にしていたクッションにあごを載せ、足をばたばたさせると、

ひざ掛けがめくりあがりむき出しの足が姿をみせる。凜子のルームウェアはローウエストのホットパンツ。上がロングTシャツ。暑かったり涼しすぎたりする為調節が難しい。履いていたもここのソックスは転寝している最中に脱いだようだ。自分にとっては当たり前前の部屋着でも異世界人から見ると「露出狂」になるらしい。

出会ったときに至ってはキャミソールにパンツ姿。今更騒ぎ立てるものでも無いのに。因みにお風呂に入れなかったお陰で、髪の毛は適当に纏め、前髪はヘアピンで留めている。メイク落として化粧を拭き取ってしまったからすっぴん。ついでにフレームの少し曲がった眼鏡。オプションとしてはノーブラ。

「だって、自分の部屋だし。せつかくの休みなんだからリラックスしたいじゃない」

「ここに俺が居るということを忘れるな」

「ときどきしちゃったりする？ 年頃の異性が近くに居ると」

からかうような問いにシェイルは言葉を詰まらせるが、むっとしたように「子供には興味ない」と答える。

「子供？ わたしが？ そいえばシャルって何歳？」

「先月十八になった」

単純な疑問への答えに、凜子は声を失う。

「……ええと、「冗談言ってるわけじゃないよね？」

小さく頷かれ、ずり落ちた眼鏡を掛けなおした。

「同じくらいだろ？」

「いや……」

「まさか年上とか」

それこそ冗談だろうと言われ、思わず何歳に見えるのか聞いてみた。

「十七、八」

「へえええええ。そういう年齢に見えるんだ」

一般的にアジアンはコーカシアンらに比べて、若く見えるらしい。大学時代に留学していた友人が、いちいちIDを見せなければ煙草もお酒も売ってくれないと言っていた。シェイルが何人かは判らないけれど、外見的にはコーカシアンと呼ばれる人種に近い。

「あのね、二十六です。つまりシャル君より八歳お姉さんって事になるね」

今度はシェイルが言葉を失う番だった。まじまじと凜子を眺め、ぽつりと「信じられない……」と呟いた。

「わたしの方こそ同じくらいかと思ってたよ」

「リインの周囲では一般的なのか？ ええとその」

「こういう外見？」

「ああ」

「一般的だと思うよ。特別な事なんにもしてないし」

基礎化粧品は二十五歳を超えてから、ワンランク上のものに変えたけれど。凜子の言葉に何故か肩を落とすシェイルを慰めるかのよう
に、ばんばんと亜麻色の頭を叩く。

「これが本当の異文化コミュニケーションってやつだねえ。驚くと一杯だよ」

「本当に……二十六なのか？」

「こんな所でサバ読んでも意味ないじゃないの。っていうかそこ溜息吐くな」

「こっこののが一般的な世界か……」

「なんか、なんとなくムカツクんだけど」

凜子がむつと睨み付けると、シェイルは漸く納得したかのように「本当にあらゆる意味で理が違っんだな」と顔をあげた。

本日の作業はどうやら終わりらしい。携帯で時間を確かめると、間もなく日曜日へと日付が変わる頃だった。

「順調？」

結局、暖炉の前に座り込んでしまった美丈夫に声を掛けると、ノートをばらばらと捲っていた手が止まる。大きな手にボールペンという組み合わせは、なかなか良い組み合わせだな、と、尋ねたものの凜子はどうでもいい事を考える。けれど十八歳と言っていた。もっと、健康的なもの。野球のバットとか。ちよつと違う。バスケットボールはどうだろうか。いや、車のハンドルを握る手なんか良いかもしれない。

「判った事がいくつかある」

書き写された紋様の一部分をボールペンで示す。凜子にはどこが術式なのかさっぱり判らないが、シェイルはボールペンを赤インクに切り替えるとぐるぐるとマークをつけた。

「例えば俺とリインが会話できる理由」

「ああ！」

言われてみると。

「シャルル、日本語話してるよ」

「にほんご、というのがリインの世界言語か？」

「世界言語って、良く判らないんだけど……わたしの世界にある言

語で、わたしの国の言語。わたしが話している言語」

「という事は他にも？」

「いくつあるのかわからない位あるよ。なんせ世界190力国超えているんだから。古語とかいれたらえらい数」

「190？ 多いな」

「そっちの世界には、いくつくらいあるの？」

「俺の国がある大陸に五力国。山脈を越えた西側は小さな部族がいくつあると聞いているが正確な数までは不明だ。蒼海の向こうにある大陸の三力国とは交流しているが、それより向こうも判らないな。把握している範囲で言うと、各国で使用される古語を足しても両手を少し超えるくらいで、殆どの国が大陸共通語を話す」

二十世紀に入って飛躍的に発達した科学技術によって、凜子の世界は近くなった。修学旅行で近場の海外に行くのも珍しくないし、繁忙期に国外脱出を計る者も少なくない。日本の裏側にある国とも電話は通じるし、インターネットを利用すればその電話だって大した料金がからない。

「この式に、俺が扉を繋げた際、扉の向こう側——今で言うとりインの世界を構成している理の基幹となる物を分けてもらえるように書かれてある」

「うーん、それが言語？」

「基礎だからじゃないだろうか。言葉の通じない相手と意思疎通を図るのは難しい」

「そういうもんかね」

「そういう物だ」

「でもさ、偶然シャルの部屋の向こうにわたしの部屋があったんでしよう？ いきなり砂漠とか迷宮とかだったらどうするの？ 野垂れ死ぬじゃない」

「それは、ここに書かれてある」

先ほどマークした箇所の右下あたりに赤丸が描きこまれる。

「最低限の衣食住の確保。身の安全の確保。現状、衣食住はどうにかなっているし、リンになら寝こみを襲われ命を落とす心配は無い。ごろごろ寝転がって酒を飲んでいるぐらいで無害だ」

からかうように視線を流され、凜子は頬を膨らませる。

「今は休みだからいいの！ 普段は超絶多忙なんだから」

「二十六歳だしな。結婚は？」

「さりと失礼なことというよね！。自分は青春謳歌しちゃってるからって」

「あの部屋の様子だと、していないだろうな」

「していません。わたしの世界ではね、二十六歳で結婚しちゃうと、割かし早いねって言われるんだから。会社の姉さん達だって、三十超えて独身の人ごろごろいるし」

「女がそんなに働いてどうする？ 連れ合いをもって子供を成した方が幸せなんじゃないか？」

「それ男尊女卑的発想。やりたくて仕事しているんだからいいの」
「そんなに働きたかったのか？」

「やりたいことやってお金稼いで、そのお金で美味しいお酒を飲める。最高じゃない」

「最高、か」

「シャルは将来何になりたいの？ なんか夢とかあるでしょ？」
「夢……考えた事もないな」

「無いの？ ああ、わたしも学生時代は遊ぶのに夢中で就活はじめてからだっけ……うーん、そっちはどんな職業あるんだろう……賢者がいるなら学者とか？ あと魔法魔法。魔術師とか？」

「魔術師ならすでになっっている。俺は魔術も使うから」

思いつくまま適当に言葉を重ねていた凜子は、シェイルの返事に思わず反応する。

「使えるの？ やってみて！」

「試したが、此処には殆ど要素がないらしい」

「わーん残念」

「そんな落ち込むほど魅力的な物か？」

「だって、さっぱり検討つかないんだもん。あの扉の模様に、変な仕掛けが施されててさ。で、シャルはそれを解析？して、どういう作用を起こすかが判るんでしょ？」

「俺からすれば、リンのよく弄っている時を刻む四角い板切れが便利そうでひとつ欲しい。簡易照明にもなるし」

携帯電話を示され、凜子はなんとなく納得した。

「隣の芝生は青く見える、ね。本当に異文化だわ。携帯を板切れ。そついや日本語話せているのにビールは知らなかったしな」

「びーる。リンの水だな。麦の酒」

「……もしかしたらシャルの世界に無いものは、通じないのかもねえ」

聞き返された単語を頭の中で並べてみる。

にーけー、せくはら、かがく、にほんご。凜子という名前も無いのだろう。

「本当に不思議だね。面白いけど」

笑いかけられた当人は、一刹那だけ声を詰まらせる。

「……こんな事が無ければ出会わなかっただろうな――」

「ん？」

「独り言だ」

シエイルは何かを誤魔化すように、無防備な格好で首を傾げる凜子の頭を、掻き糺_{ただ}ぜた。

不意に揺れた空気に、凜子は誘われるように覚醒した。

時刻を確認すると、午前三時。暖炉の前でだらだらと話しているうちに、いつの間にか眠ってしまつたようだ。薄闇の室内は凜子の部屋の物で、客用布団の中に、自分がしっかりと丸まっているのを理解する。シェイルが律儀にも運んでくれたのだろう。その運んでくれた主が、凜子が日頃使用しているベッドで、寝返りを打つ。こちらを向いたシェイルの寝顔が、なんとなく苦しげに見え、凜子はそつと起き上がった。

引き結ばれた唇。眉根はぎゅつと寄せられている。未成年に飲ませすぎたか。それとも環境の多大なる変化に体がついていかず、熱でもだしたかもしれない。なんとなく、自分の喉も痛いような気がする。その額に手を伸ばしたのは、無意識だった。

が、シェイルの肌に指先が触れたかと思つた瞬間。衝撃を受ける。何が起こつたのか理解出来ず、すぐそこにある青灰の瞳をぼんやりと見つめた。

「……リン」

ややして落とされた声に、止まっていた息を吐き出した。

「びつくり、した」

シェイルによって、引き摺り上げられた体は妙な体制で、それを自覚した途端遅れて痛みがやってきた。

「いたたた」

「……悪い」

覆いかぶさるようになっていたシェイルがゆっくりと体をずらすと、空間が生まれ、凜子は自分の背中の下敷きになっていた手を動かす。

「大丈夫？」

心配そうに見やると、小さく頷く。すっかり起き上がったシェイルは片手で目を覆い、浅く呼吸を繰り返している。

「ほんとに？ 体調悪かったらいいよね。薬とかあるよ？」

顔色は伺えないが、具合は相当悪そうだ。よくよく考えると何の助けにもならないのだが、凜子はシェイルの背中をゆっくりと摩る。少年では無いがまだ十八歳。人生経験からいえば、凜子の方が長い奇妙な状況下に陥っているのはお互い様だが、ライフラインが断絶しているとはいえ、こうやって目を覚まして、まったく見知らぬ物に囲まれているわけではなく、凜子の日常を証明する切片はそこかしこに在る。

「夢を……」

双眸を覆っていた手をシェイルが下ろす。

「見ていた」

凜子は言葉の続きを待つ。

「此処は、平和すぎて……ああ、だからか」

立てた肩膝に肘をつく、掌に自身の額を納めるように押し付ける。

「誰にも知られぬ——流石に、知りようが無い。探知も無理だ。想像を超えている。くくく」

呟きながら、肩を揺すって笑い始める。

声をかけるタイミングを失い、なんとなく見ていた男の掌が、ぐっと握りこまれ「——くそ」とマットレスに叩きつけられた。振動が伝わる。

「……シャール？」

躊躇われるが、名前を呼ばずにはいらなかった。凜子の声に、シエイルが頭を動かす。亜麻色の髪が頬にかかる。笑いを止めた青灰の瞳が眇められる。たった数秒交差した視線は、シエイルによって外された。ぽつり、ぽつりと言葉が落ちる。

「二つ上の兄、が居るんだ。……同い年の弟、と……妹が生まれたばかりで……十八歳も離れていると、流石に妹と云う実感はないがそれから父と、母」

「五人家族だね」

「家族……そうだな五人。——一人暮らしをしていると言っていたがリインは？」

「四人家族。九歳上のお兄ちゃんがいる。血は繋がっていないんだけどね」

「血が繋がっていない？」

「うん、うちの両親って再婚カップルだからさ。わたしは父親の連

れ子で、お兄ちゃんは義母さんの連れ子なの。わたしが五歳の時だったからあんまり覚えてないんだけど。普通に仲良いよ」

「……そうか」

「兄弟仲悪いの？」

「いや……どちらかと言うと良い、と思う」

随分と歯切れの悪い言い回しだ。

「俺も、兄弟と母が違う。妹もだな」

「やっぱり再婚カップル？」

シェイルは首を横に振る。

「父には三人の妻が居るんだ。兄弟の母親になった人。妹の母親になった人。それから俺の母親」

「あ！もしかして一夫多妻？」

「そうだな……が、兄と弟の母も俺の母も亡くなって久しいし。今は妹の母が、父の妻になる。ああ、彼女はリインと同年だ」

「……えーっと、複雑な家庭環境だった……」

遠慮がちな凜子の口調に、シェイルが「そうだな」と、漸く小さな笑みを漏らす。

「義母は、最初の夫との間にも一人息子を設けていたのだが、嫁いで来る前に養子に出した。六歳になったか」

「う、こんがらがってきたよ」

「ま、そういう訳だ」

話は終わりだ、といった風に、シェイルは背中を壁に預ける。結局、話を有耶無耶にされてしまったような気がして、凜子は会話を

遡る。

「うっん、二十六歳のお義母さんかあ……」

自分と同じ年で、シエイルの様な子供の母親になるのは、どんな気分なのだろう。まったく想像ができない。

「子が欲しいのか？」

「もう、なんでそうなるかな。想像つかないなーって。そっちじゃ皆早いのか？ 出産。っていうかその前に結婚か」

「農村部では十代半ばで結婚したりもする。俺の父親は二十二の年に結婚したな」

「平均的に早そうな気がする。二十二って事はシャルもそろそろお嫁さん探しなのか」

「いや、俺は……しないさ」

「へ？」

「一生するつもりはない」

「……そーなの？」

ああ、と再び握り締められた拳に、凜子はそれ以上問うのをやめた。踏み込むな、と言われた気がしたからだ。

「楽しいか？」

「うん、綺麗だし。他にすることないし」

「あるだろ、掃除」

「観測史上初めて言って良いくらい片付いているから良いの」

「なんだそれ」

「こつちの話ー。動かさないでよ」

両手で頭を挟んで前を向かせると、集中できないという台詞が返ってきた。

シェイルは編みこまれた何本もの三つ編みを解す。

「男の髪は、編まない」

「そういう決まり？」

「そんな決まりは無い」

「機嫌悪いなあ」

「夢見が悪かったんだ」

反対に背中に回られ、髪を一つに纏めていたコンコルドピンを取られる。

「汚いよ、洗ってないんだから」

「それを言うなら俺のも同じだろう」

手櫛で髪を梳かれると、気持ちが良い。昼食を食べたばかりという事もあり、途端に眠気が押し寄せてくる。傾いた体は重力のまま

後ろに倒れこんだ。

「しつれいしました」

「食べて直ぐ寝ると太るぞ」

言いながらも髪を梳く手は止まらない。

「似ているな……」

「何が？」

身を擦ろうとすると「動かすな」と同じ台詞が返ってきた。正面をむいた視界に写るのは、暖炉の炎。フライパンが横に転がっている。この部屋に似つかわしくない段ボール箱の中にあるのは、かき集めた食材だ。残っているのはスナック菓子とビールとワイン。

「昔懐いていた犬も、首の辺りを掻いてやると満足そうにしていた」

「犬！ 似ているって——」

「動かすなと言っただろう」

最後まで言うことを許されず、がっちりと頭を抑えられる。シェイルに完全に寄りかかっている体制だ。硬い筋肉が、凜子の体を支えている。膝枕ならぬ人間座椅子。懔然として頬を膨らませると「子供だな」と小突かれた。

ああ、でも。

「良いな。シャルミみたいな弟が居たら」

「……弟？」

「わたし妹だし。自分より下に弟か妹欲しかったな」

ちょっと生意気で、軽い口喧嘩出来る相手。凜子は義兄に懐いていたが、年齢が離れすぎていた所為か、兄妹喧嘩をした記憶が無い。

「……リンみたいな姉は要らない」

「わあ、爽やかに言われるとむかつく」

「そうか？」

覗き込む瞳は、してやったりといった風に笑みを滲ませる。

「これ以上兄弟が増えるとややこしくなる」

無骨な指が、濃茶の毛先を弄ぶ。一束そつと掴むと「綺麗な色だな」と呟いた。

「染めているけどね。元々真つ黒」

「黒いのか、ラストウィリヤが喜びそうだな」

「扉の人が？」

「あいつの色だから」

捻られた束が開放されると、はらはらと首元にかかりくすぐったい。同じ動きをなんとか繰り返し、シェイルは己の手の中にある髪の毛に唇を寄せる。特別甘い雰囲気だった訳ではない。

凜子にしてみれば、体温がすぐそこに在る事で、この切り取られた空間に一人ぼっちで閉じ込められたのでは無いと実感できていたし、シェイルもまた、膝に在る暖かな物に郷愁の念を覚えつつも、届きようも無い距離を脳裏から消し去るために、つらつらと思いつくままの言葉を零していただけた。

伏せられた瞳を飾る睫の長さに気がつき、凜子はあんどりと口をあけ固まった。顎が外れそうだった。

「……はじめて、見た」

沈黙を破る声に、シェイルは僅か首を傾げ、視線を受け止める。囚われていた凜子の髪が大きな掌からはらはら落ちる。

「自然に、そういう事する人。うわあうわあ」

責めているのではなく、映画のワンシーンを飾る優雅な動きが、すぐ目の前で行われていると言う現実を直視し、若干ひいている。

「そういう事？」

「髪にキス。居るんだー居るんだー、そういう人。もしかしてそっちでは普通？」

正答を待つ凜子の、引き攣らせた頬にまつわる濃茶の髪をシェイルは親指で払う。

「普通はしない」

その言葉に「じゃあシャルの趣味？」と好奇心を含む問いを返され、目じりを細めた。凜子の髪の中に手を差し入れると、指先が細い首筋に触れる。

「するなら、唇の方がいいな」

そのまま引き寄せた体は、見かけどおりやはり華奢で暖かい。啄ばむ様に、角度を変え、そして深く。息苦しさを覚えた凜子が、小さな抗いを見せるまで何度も。腰に回された腕の感触に、現状に気がついた凜子が騒ぎ始める。ゆるく抱き寄せているのにも関わらず、腕の中で騒ぐ女は檻から逃れられない。ややして諦めたように、こ

とんと胸に押し当てられた額に、シェイルは乱れた髪を手櫛で整えてやった。

「特に、意味はない」

そんな言葉をかけると、凜子の石化が融解する。

「なんとなくなつて、やつだよね」

「ああ……」

「……吊り橋理論、ストックホルムシンドロームの方かな」
「すつとつく？」

凜子の言葉は、時々自分に通じない事がある。凜子の推察によると、自分の世界に無い単語は、“自動翻訳”されないのでは無いだろうか、との事だった。出会いこそは最低だったが、この女はそこから辺にいる浅慮な“女”とは違う。少なくとも己の人生のうちで、初めて会った種類の人間だ。実際、いくつもの偶然が重なり扉が繋がらなければ会う事もなかったのだが。真っ直ぐ自分を見つめ、はつきりと物を言い、けれども感情の機微に聴く、他人の心に土足で踏みあがらず、踏みあがらせず。適度な関係性を保つこの女と、もつと話をしていたかった。

「前者は一時的な緊張状態における錯覚で、後者は閉鎖空間における非日常的体験の共有から生まれる無意識の友愛」

「この状況を的確に表しているな」

——けれども。

「継続的には発展しないらしいけどね。元に戻れば……って、明日月曜日だよ！　うわー仕事どうなるんだろ。ついでに、食料もやば

「いんだよね」

場を和ませるかのような口調に、シェイルは強く凜子の体を抱きこんだ。

「二昼夜」

「な――」

「――二昼夜、だ。扉が繋がって作り上げられた空間が保つ時間は、二昼夜」

「え……じゃあ……」

「半日も経てば、戻る。お互いの現に」

沈黙が降りる。

凜子はシェイルの胸に手をついて顔をあげると、正体不明の感情が渦巻き交ぜになっている青灰の瞳に微笑んだ。

「……なら、最後の晩餐にとっておきの非常食を振舞ってあげよう」

二昼夜はいつたいいつまでなのか。

異邦人が扉をあけた瞬間は何時だったろう。

凜子があの時確認した時刻は、確か丑三つ時近かった気がする。
おぼろげな記憶を辿る。

日付を超え、月曜日がやってくるまでは、あと数時間という頃。
一組の男女は向かい合わせで座っている。

暖炉の炎でミネラルウォーターをなんとか沸かし、カップラーメンにお湯を注ぐ。やかんは予想どおり、下半分が真っ黒焦げになってしまった。三分時間を計り紙製の蓋を剥がす。湯気と共に漂う香りは、とても良い。ジャンクフードに、まともな食事という字面は似つかわしくないが、スープを一口飲んで、凜子は満足したように頷いた。

「乾燥させた麺に、乾燥させた野菜、乾燥させた肉と卵。粉末の粉がスープの元」

躊躇していたシェイルがフォークで掻き混ぜていた容器を口に運ぶ。それから一言「美味しいな」と神妙に漏らされた声音に、凜子は噴出してしまった。

玄関先でカップラーメンをすする光景は、傍から見ると珍妙極まらない。

どのタイミングで空間が切り離されるかまでは判らないため、万端を帰して、凜子とシェイルはそれぞれ自分の部屋側に扉を境に座り込んでいる。

乾杯は、ラーメンに合いそうなスペイン産のすつきりとした白ワインだ。ラーメンにワインを合わせるのもどうかと思うが。もう一本のとおっておきは、去年のバレンタインに購入したヴィラジェンマなので、デザート用。チョコレートが無いのが残念だが、焼いたマシユマロにココアパウダーをまぶせば、あの辛口の濃厚な赤ワインが、さらに引き立つような気がする。

要は、気分が大事なのだ。

殺風景な玄関口も、白いシーツを敷いてしまえば、それだけで硬質さを無くす。凜子の見る世界は、異国の——異世界の王子様然としたシェイルが典雅な所作でグラスを傾けていて、眼福である。酒のつまみには贅沢すぎるかもしれない。

さきほど思い描いていたスウィーツを手早く作り、二本目のワインを空ける。

「リインの世界の話をして欲しい」と請われ、まったく同様の意見を持っていた二人は、一つのお題に対し、お互い自分の知る限りの知識を披露することになった。確実にやってくるであろう、終わりの時に向けた時間つぶし。

「義務教育期間が九年か」

「だいたいがその上の高等学校に進学して、さらに大学で専門を学ぶよ。わたしの学生生活は義務教育に高校三年大学四年を足して十六年」

凜子の言葉にシェイルは一瞬絶句したようだった。

「教育制度が整っているんだな」

「そうだねえ。文化かもな。日本の識字率って世界一だし。読み書

きできない人のほうが珍しいよ」

「兵役とかはないのか？」

「無いよ」

即答される答えに、シェイルは更に目を白黒させる。

「うちの国、戦争放棄してるの。六十年ちよい前に大きな戦争があったさ、大負けしてそれ以来」

「無いって、攻め込まれたらどうするんだ」

「そこは一応、軍に似た組織の自衛隊ってヤツが自衛する筈。法律上では“放棄”しているから、自分たちからは仕掛けないってこと」「暢気なのか、それだけ平和なのか」

「平和……と言っちゃあ平和かも。犯罪がまったく無いわけでは無いけど、そこら辺歩いていて身の危険は、あんまり感じたこと無いなあ。でも世界中ではいつもどこかで戦争が起こってるし、また動乱の世の中になる可能性は皆無じゃないと思うけど、想像つかない」

壁に寄りかかって、足を伸ばす肌は傷一つなく、陶器のように滑らかだ。凜子の話す社会的背景の中で生まれ育てば、このように伸びやかに育つと、その肌一つとっても証明している。シェイルは憧れにも似た気持ちを抱き、友好的に微笑む女を見る。

「俺の世界は、今少しごたついていて……だからこの扉がリインの世界へと繋がったんだろう」

「戦争中？」

「まだ、そこまでは行ってないが、下手したら国を巻き込む争いに発展するかもしれない」

「何かから、逃げてたの？」

思い付きだった。魔されていた顔をふと思い出す。

侵入者と言っていた。

悪夢を見たと言っていた。

複雑な家庭環境。

“衣食住の確保と身の安全の確保”された“誰にも知られぬ誰も知らぬ”異空間。

まるで危険が過ぎ去るまで身を潜めるためのシエルターのよう。

凜子の言葉に、シエイルは少しかり驚いたように目を見開き「
聡いな」と言う。

「侍女とか言ってたでしょ？ シャールって良いとこのお坊ちゃん
なんじゃないの。お家騒動に巻き込まれて——遺産相続とか。ああ
でもそれじゃ国家間の紛争まではいかないか」

「リイン」

そう呼ばれるのにも、違和感がなくなっているのに。

「これを」

首から下げられていた鎖についている、銀色のチャームを手渡された。

かなり凝った意匠である。

「なにこれ」

シエイルは肩を竦めただけで、答えない。
青灰の瞳が揺れる。

凜子はじっとその色を見つめる。
視線をはずしたのはシエイルの方だった。落ちていた沈黙が破られる。

「お前に持っていて欲しい」

チャームを隠すように、シエイルの手が凜子の手をまるごと包み込む。

骨ばった長い指と、あらゆる感情を隠してしまった瞳に視線を行き来させる。

「そろそろ時間切れ、なの、かな」

ワインはまだ半分しか空けていない。飲みきらないと酸味が増してしまう。

凜子の言葉にシエイルは口の端をやや持ち上げる。

「そうだな」

「もう会う事も、ない……よね」
「ああ」

掴んでいた凜子の手が開放される。

体温が離れ、凜子は思ったことを素直に告げた。

「ちょっと、寂しいかも」

「——俺もだ」

遅れて届いた言葉。

それが、最後だ。

ばたん、とあっさり過ぎるほどあっさりと扉はしまった。

無機質の灰色に伸ばしかけた指先を刹那で止め、それから凜子は立ち上がるとドアノブをまわした。

もったりとした生暖かい空気。まとわりつくそれらは、懐かしいものだ。

人口の明かり、非常灯の緑。レンガ色をした壁面。規則正しく並び、向かいの建物の窓。階下を流れる車が残すオレンジ。

凜子は凜子の世界を存分に視界にとらえ、呼吸する。

予測もせぬ間に始まり、唐突に遮断された。
不可思議な週末は、終わったのだ。

ひどく曖昧な感情の残滓を残して。

1 - 1 1 (後書き)

閑話を二つ挟みます

ここまで改稿済(2011・07・30)

或る日の会話

「あれは藁束を煩惱に見立てて打ち払ってるんだな」

「額に浮かぶ汗は青春そのものだね、ふふふ」

執務室の窓から、奥庭を見下ろしくつくつと笑いあう二人の男に、この部屋の主、ラストウーリヤ・ハルス・ウル・シータ——その漆黒に流れる黒髪を由来とした二つ名をして、黒き賢者と言う——「貴方がたは邪魔をしに来たのですか！」と青筋を立てたが、すぐさま後悔した。

アゼリアス聖王国は、リアス神を唯一神として祀るリアス聖教を国教と定める、緑豊かな古き王国である。大陸の北東に位置し、東を蒼海、北と西は大陸を縦断するゼリアス山脈を国境とし、唯一南国境線に面しているのが、商人達の特別自由都市ゼイレン。ゼイレンの向こうには中堅国で牧歌的な大地が広がるトゥリローゼ王国が控えている。

近年、両国の関係は極めて良好。鉱物資源豊富なアゼリアスと、農業を主たる産業とするトゥリローゼは、貿易面でも交流が盛んだ。またこの大陸に住まう多くの民が信仰しているリアス聖教の聖地は、アゼリアス聖王国の北壁、ゼリアス山頂に位置している為、ひとびとは、アゼリアス王国を“神に抱かれた聖なる庭”と敬意を込めて呼ぶ。

立太子を望まれていたアゼリアス王国第二王子が、突然の失踪から帰ってきたのは一月ほど前になる。

繊細な時期に二月も行方を晦ませていたのだが、当事者は完全黙秘を貫いていた。

これは緘口令がしかれている話だが、行方不明者は彼を含め三名にのぼる。

跡継ぎ騒動の中心に祭り上げられそうになっていた第一王子、第三王子もまた同様に行方不明となっていたのだ。時刻こそはずれていたが、三人がひょっこりと戻ってきたのは同じ日であった。

第一王子は

「あまりの寒さに南下する隊商に紛れ込み、大陸の最南端に位置するエジンドレラス皇国のさらに南にある、星珊瑚諸島の名も無き無人島で、ついうっかり昼寝をしすぎた」らしく、

第三王子は

「更なる高みを目指そうと、神々の声を聞くために、アゼリアス山頂付近で瞑想していたが、突然の吹雪で迷子になって渓谷へ落ち一時的に記憶を失ってしまい、気がついた時には名も知らぬ寒村でベレーの乳を搾っていた」らしく、

忠臣たちは嘘くせー……と内心で思ったものの、追求する事も叶わず、結局真相は不明だ。

彼らの父王は、三人の王位継承権をまるっと剥奪し「生まれたばかりの第一王女を皇太子に据える！」と、大激怒したが、正妃となつたばかりの妻に「稚けなき赤子にそのような重責を……だいたい陛下は女性の方に少々だらしが無いから……よよよ」と嘘泣きされ、三人の王子達は王族だけがかかる謎の流感で生死の境を彷徨ってい

た、というかなり苦しい言い訳を口にしなければいけなかった。

「で、ラエル兄上は結局何処に居たの？」

「私が無人島に居たのは本当だ。赤ん坊ほどもある大きな鳥の巣に落ちてしまったらしく、甲斐甲斐しく色々運んできてくれるのだが、役立ちそうなものは皆無。空腹に耐えかねて一瞬焼き鳥にしてしまおうかと考えたのだが、翌日その鳥が卵を産んでな……殺してしまうのは可哀想じゃないか。生まれてくる子供に悪気は無いのだから仕方なしに飲まず食わずのまま、鳥と一緒に卵を温めていたよ。嗚呼、実に貴重な経験をさせて貰った」

にっこりと微笑む第一王子は、叡智の塔主へ視線を流す。

「兄上の懐の深さに、鳥も感銘して空から落ちてしまっただろうね」

空から落ちるのは、不吉である。

「そんなディエルは何処に飛ばされたんだ？」

「残念ながら、僕の方も極寒の地に居たのは本当なんだ。気がついて何かも氷で出来ている室で。寝台も氷なら、卓も椅子も氷器や杯までも氷で出来ていてね。完全に氷りついた毛髪は、武器にもなるという事を始めて知ったよ。相棒は毛深い男でね。ちよつと貞操の危機にあったりもして、ある意味冒険だったかな。親切な誰かのおかげで僕もまた、模索していた将来の道を切り開けたけれど」

第一王子とそっくりな顔つきで、第三王子もまた叡智の塔主へ微笑みかける。

「ディエルの美しさは、やはり同性の心までも掴むか。聖王庁は危

険じゃないのか？ 男の花園と揶揄されているらしいぞ」

それは、知らなかった。

「大丈夫だよ兄上。僕は男色家じゃないし“ 蔦薔薇の麗しの君” を見ても惚けたりしないさ」

“ 蔦薔薇の麗しの君” は、少女とよく間違えられていた少年時代のラストウーリヤの渾名である。

前側妃を母とする二人の兄弟は、双子と見紛うばかりに似ている。青碧の瞳に、白銀色の癖の無い髪が、やわらかな陽光を受け煌いている。

前正妃の子である第二王子もまた瞳と髪の色合いが違うだけで、アゼリアスの珠玉達は非常に良く似た風貌をしていた。

前正妃と前側妃が姉妹だったのは有名な話である。十二代聖王ゲイル・ベレイル・ガーランド・エレ・ラ・アゼリアスを頭に前王妃と前側妃、それから三人の王子達は、平和に今代王家という単位を結んでいた。

しかし、ほんの小さな綻びを切欠として、本人達が例え意図せずとも、争いは起こってしまう。

ここで現王妃曰く「だいたい陛下は女性の方に少々だらしが無いから…… よよよ」に話は戻る。

姉王妃よりも先に妹側妃が第一王子を出産した。

そして次に姉王妃と妹側妃は一日違いで第二王子、第三王子を出産したのだ。連なる血縁はいずれも申し分が無い。王は順当に生まれた順に王位継承権をふり帝王教育を施したのだが、安穩な彼らに

横槍を入れるよう、幼い少年王子たちの兄弟仲を引き裂こうと一部の奸臣やらが画策した。皇太子はやはり正妃の第二王子が良いだろう、いや第一王子の方が相応しい、はたまた神童の誉れ高い第三王子こそ。と静謐だった水面を、わざわざ波立たせ為、彼らはちよつとした人間不信に陥ってしまった。

ここに陰謀めいたものは特別無かったのだが、第一王子が成人する年、つまり立太子する年に、王妃と側妃姉妹は揃って流行り病にかかり、亡くなってしまう。立太子式は喪に服するため延期された。運気の悪さは連鎖するのか、愛する妻たちを亡くしてしまった傷心の王が、たまたま療養していた温泉地サルスエの別邸で、あるところか二回り近く年の離れた未亡人と恋に落ちる。

ここまで来ると吟遊詩人に物語られそうな壮大な話が、平和な国アゼリアス聖王国を舞台に出来る。

そして今年、第二王子が成人する年、相も変わらずじわりじわりと水面下で繰り広げられていた、当人たちの与り知らぬ跡目争いが、大きく動きを見せる。

続く暗殺者らをどうにかしてくれ、と言ってきたのは他ならぬ三人の王子たちだったでは無いか。

“ 薦薔薇の麗しの君 ” という単語に、ぴくりと眉をあげたラストウーリヤは、何かを言いかけてやめた。

豪胆さで名高い第一王子も、神童の誉れ高い第三王子も、腸は真っ黒なのだ。

それが二人束になってかかってこられると、舌戦で勝てる自信は余り無い。どちらかというと純粹で熱血だった第二王子も、少年から大人になる頃には、腹に一物抱えるようになった。つまり、捻くれたのだ。浅慮な者達の意図と反し、三人の王子達は結束を深め、

笑顔で毒を吐き出す。政治の舞台では非常に有効的な所作を自然と身に着けた。

しかし……乳兄弟である自分にまでそれを向けなくても良いではないか。二ヶ月も帰ってこなかったのは計算外だったが。本来ならお咎め、どころでは済まされない。しかし、騒ぎの当事者たる三人の王子達は、ラストウーリヤに真実を告白することを許さなかった。

「ところでトゥーリヤ、シェイルは私たちにも、仔細を教えてくださいないのだが、どうしたものか」

第一王子ジョイル・ラエル・ガーランド・エレ・ラ・アゼリアスの言葉を引き継ぐように、第三王子セレイル・ディエル・ガーランド・エレ・ラ・アゼリアスが「理由もなく、はいそうですか、と『立太子もしたくない』と頑なになっているアレの言い分をそのまま飲む訳にもいかないしねえ」と続ける。

「私たちの共通認識としては『自分には相応しくないから是非とも他の者に（嫌なものは嫌）』になるな。かと言って『父上の決めた相手と政略結婚なんかないんだからああ！』とこっ恥ずかしい台詞は吐けぬが」

因みにシェイルはそんな乙女的発言はしていない。

「うーん、でもさ、トゥリローゼのシェリル姫はラエル兄上の好みにぴったりだと思うけれど。向こうも乗り気みたいだし、僕はもうちょっとお若い方がっていうのが本音」

話題のシェリル姫はディエルとシェイルより四歳年上。ラエルの二歳年上である。

「年上の女性もなかなか良いぞディエル」

外野から横槍を入れるまでも無く、次の王座を押し付けあっているのは、この三人だった。

「僕は狭量だから……トウーリヤ」

「仰りたいことは、判りました……」

時折混ざる自分の名に、内心びくびくしていた黒き賢者は、第二王子を売ることに決めた。——少しばかり理不尽だが、自分が脅かされる事も無く安寧に、研究を続けられているのも、王子達が真実を言わないお陰でもある。

扉の前で、崩れるようにしていた男の頬を伝っているのが涙だと知っているのは、ラストーリヤのみ。

だったのだが。

「『はつこひ』！ シェイルが恋煩い！！」

面白いものを見つけた、とディエルは頬を高潮させた。

「そうか、あいつも卒業か。いや、本当の意味で大人になったのだ

な——なに？　そのような間違いは起こらなかったと？　据え膳

食わぬは騎士の風上にも置けないじゃないか！」

「と言うか、僕、気がついちゃったんだけどさ……なんでシェイルばかり、美味しい思いしているのかなトウーリヤ」

「確かに、私たちとの扱いにかなりの差があるな……」

「年上の女性とのめくるめく二昼夜」

「揺れる感情」

「触れ合う体温」

「欲望をおさえこむ葛藤」

「予測される残酷な結末」

「そして、涙の別離」

「……………」

「……………」

「「次の扉は、もっと正確な座標を刻めるよう、励むように」」

結局、煩悶と剣を日々振るい続けるばかりである弟の『はつこひ』が決して実らぬ事を知る長兄は寛大な心を持って、自らに皇太子と云う名の枷をかける。第三王子は、この機会に、長兄と次兄を裏方から支えると宣言し、政治の表舞台から消える為、隠居先を正式に聖王庁聖王院へ正式に定める。

余談だが、第二王子が寝込んでいたのは流感ではなく淫魔に魅入られ精気を吸い取られてしまったからだ、と王城内で実しやかに囁かれ始めたのは、第一王子が立太子した翌日からである。

或る日の疑問

「にいさまにいさま！ シエルにいさまっ！」

悲嘆の色を翡翠の双眸に滲ませ、少女が喧騒を引き連れてぱたぱたと駆け寄ってくる。

「わたくし……しえるにいさまの、恋人になれないって、本当？」

胸に飛び込んできた妹姫は、小動物のようにぐいぐいと頭を押し付ける。

「唐突にどうした？」

「だって、シエルにいさまはエリザに魅了されたままだから、絶対に無理だってディルにいさまが」

「……」

まだ、ディエルのヤツはそんな事を言っているのか。

シエルは大きく息を吐いて、ぼろぼろっと大粒の涙で濡れる頬を、拭った。

「あんな大魔王のような男の話をまともに受けるなよ。そのように泣くな。特に弱みを握られたくない相手の前ではな」

「わたくし、にいさま達になら弱みを握られても平気よ」

顔を顰めて上を向き、涙が零れぬ様努力する小さな淑女に、敬意を表して、その目元にキスを落とした。

「ねえ『はつこひ』って塩辛いの？ 涙の味がするってにいさま達
が言っただけだわ。涙って塩辛いよね」

機嫌よく、焼き菓子を実付けていた妹姫が、頬に手を当て思い出したように言う。今日のお題は「恋」なのか。どう答えたものか、とシェイルは内心で腕組みする。下手な知識を与えると、また予測のつかない珍事を引き起こしかねない。

年の離れた妹姫に視線をやる。

淡茶の巻き毛に極上の翡翠を思わせる瞳。幼子から少女へと突入した天真爛漫な娘は、ぷくぷくとした幼児体系を気にする様子をみせたり、レースで装飾されたドレスよりも、侍女たちが身に着けているスッキリとした服装に焦がれたり、と、いつかは成るであろう“大人”へ向け、着実に歩みを前に進めている。シェイルの頭を嬉しいような寂しいような思いが過ぎる。あの時生まれたばかりの稚けき子だった少女が、こうして年を重ねていくという事は、同じだけ自分も——年を重ねているという現実を突きつけられる。——こうして、何も出来ぬまま。

シェイルの時間は、夢の中でだけ、たびたび、あの稀有な体験をした二昼夜に引き戻されるのだが、ただそれだけだった。見せられる夢の中での自分は、ただの傍観者で観察者である。扉が音をたてて閉まり、ぼんやりと彫り込まれた紋様を眺めている所で、記憶は強制的に遮断される。嫌がらせのような夢の内容は、改変されることもなく、単純に“事実”だけを忠実に辿るのだ。

しかし、こうして改めて考えられると言うのは、良い傾向のよう

な気がしていた。年月が経てば鮮やかな色も、褪せる。煩雑な日常にまぎれて。あの時の感情をなんと表現していいのか、シェイルには判らない。自分は物語を吟じる詩人のような感性を持ち合わせていないし、どちらかというと帰結されたものの起因は何かと分析する方が得意な現実主義者である。正体不明の感傷は、幾重にも鎖にかけ、記憶の海に沈みこめてしまった方がいい。そろそろそういう時期なのだろう。

妹姫が八歳へと成長し、自分は二十六歳になったのだから。

「そうだな、どちらかと云えば『苦い涙味』だな」

風がたおやかに流れる。

翡翠の瞳をきよんとさせていた少女は納得したのか「ふうん」
と答え、微笑んだ。

あくる日、妹姫からの報告を受けた二人の王子は、密談の巢となつてゐる叡智の塔のとある部屋で「どんだけ詩人なんだ!!」笑い転げ、第二王子を評する噂がひそやかに流れ出す。

いわく、愛しき記憶を編ませれば、かの愛の狩人・吟遊詩人セレノイユとアゼリアス聖王国第二王子ヴェイル・シェイル・ガーラン

ド・エレ・ラ・アゼリアスに並ぶ者は居ないだろう、と。

どこかの世界のどこかの国。

彼らを真綿で包む日常は、変わらず平和である。

「凜子さん。見本誌あがりましたよ」

デスクに置かれた雑誌を、凜子は手に取る。
確認の為ぱらぱらとページを捲っていた手が止まった。

「あー、この号か」

企画が正式に通ったのは夏の終わりだ。そして年が明けて暦は一月末。世の中にごまんと居る学生たちが、長い春休みに突入するこの時期の発売に合わせるのが妥当、と言う意見から十二ページ分の特集が組まれた。

見開きページの写真に指を滑らせる。
いつかどこかで見た配色。

「古城ホテルに泊まりたい……ねえ」

あの、不可思議な体験。久しぶりの二連休を、一緒に過ごした男の顔を思い出す。携帯のストラップ代わりに揺れる銀色のチャームは、百合の紋章と十字架を合わせた様な意匠で、なかなか凝った創りをしている。人差し指で、それを弾いて溜息一つ。

「元気にしているかな」

答えを待つ言葉では無い。凜子は、携帯をカバンに投げ込むと立ち上がる。そろそろ出ないと打ち合わせに遅れてしまう。ホワイトボードに行き先を書き込み、少しだけ考えた後、矢印を引っ張ると

“直帰”の二文字を書き加えた。

街中はバレンタイン商戦の真っ只中である。先方への手土産として洋菓子店の生チョココレートを一箱購入した。それから、小ぶりのサイズの物を自分用に。そういえば、チョココレートに一番合うと話題のワイン、ヴィラジェンマは、最後の晩餐の際に空けてしまった。去年もチョココレート売り場で購入したのだから、どこかに有りそうだ。混みあう通路を縫いながら目的のものを、難なく見つけ、どんな乙女なのだ。と自分に突っ込みを入れる。恐らく、複雑な思いで編集していた特集ページを先ほど見たばかりだからだ。

携帯につけているチャームは、彼女にとって既にそこに在るのが当たり前であり、紋章を見たからと言ってあの週末に思いを馳せる事は無い。しかし、立て続けに彼の記憶をなぞる様なキーワードに触れて、感傷的な気分になっている感否めない。偶然は重なるもので、奇しくも明日、明後日は久しぶりの二連休である。

折りしも大寒波が押し寄せてきていて、冷たい雨は今にも雪に変わりそうだ。週末は引き籠もってゆっくり過ごさうか。ああ、そろそろ掃除もしないといけない。売り場を抜けて、私鉄の改札へと向かう。「雪まじりになってきたね!」と、すれ違った学生があげた声に、凜子はなんとなくストールに首をうずめ、パスケースを探ろうとカバンを持ち直そうとした時だった。

立ちくらみにも似た感覚。

ぐらりと揺れた視界が真っ白になる。

.....

どのくらい、茫然としていたのか判らない。

目の前に広がる光景は、白、白、白。

うなる風がコート裾を翻す。頬を絶え間なく濡らす氷の結晶。

横殴りに降る——降ると言う表現が正しいのかは判らないが——雪

をみるのは、初めてである。

行きかう人は、みな一様に雪嵐から逃れるよう体を縮こませている。誰かの体がぶつかり、凜子はふらつく。視線の合った人物は、謝るように小さく頭を下げた。気にするな、と微笑もうとしたのだが、寒さで強張った表情はうまく動かせない。それでも最初の一步を踏み出すと、石畳にブーツのヒールがひっかかり、凜子は妙な体制で動きを止めた。

—石疊。

足元は駅構内の無機質な床ではない。ぎくしゃくと左右を確認すると、判然としない視界の中で、三角屋根が可愛らしいビクトリア風の建物が並んでいるのが見える。こんな悪天候にも関わらず、だぼつとした防寒着を身に着けた人通りは急ぎ足だがそこそこある。がらがらと横を通り過ぎる荷馬車の音に驚いた凜子は、慌てて道を譲る。先へ行く馬車を目で追うと、一瞬だけ弱まった風の中、白灰色の空へと突き抜ける尖塔が見えた。

高らかに鳴り響く鐘の音に続いて、切りつける突風。

「ええええええええええええええええ」

そうして凜子はようやく、驚愕をのせた声をあげた。

とりあえず寒い。寒いなんて生易しい物じゃない。冷えた空気は肌を切りつけるような痛みをもたらす。

此処が何処なのかは判らないが、つい先ほどまで自分が居た駅では無いことだけは確かである。何が起こった？……までを考える余裕は無く、吹雪く世界に向け凜子はともかく歩き出した。

石畳に積もりゆく雪で、足元はかなり不安定だ。二度ほどすっころんでしまった。たまりかねて近くにあった建物に飛び込み、凜子はそっと溜息を吐く。皮製のブーツの爪先は濡れてしまったように冷たい。室温で解けた雪がぽたぽたと雫になる。店内で何かの作業をしていた女と目が合い、凜子は曖昧に微笑む。何か話しかけられたのだが、言葉が判らなかった。返事をせず愛想笑いを浮かべている凜子に、多少の警戒の色を見せながら、女が近づいてくる。

また何かを話しかけられ、凜子は観念したように「すみません」と頭を下げた。

もしかしたら――、と心のどこかで思いながら、凜子は、女が手渡してくれたブランデーに似た香りをさせるホットミルクのような物に口を付ける。

じんわりと伝う暖かさは夢ではなく、極度の寒さで凍ってしまった思考がゆっくりと溶け出す。薪ストーブの炎を眺め、凜子は顔をあげた。どうやら飲食店のようなどころらしい。古い、けれども清潔な板張りの床に素朴な風合いのテーブルと椅子が何組か置かれてあり、カウンター後ろの壁面には見たことの無いような色形をした瓶が並んでいる。

作業をしていた女……女主人は、カランと来客を告げる鐘の音に顔をあげ、にこやかに笑った。凜子は横目でそれを見る。カウンタ―越しの足の長い丸いすに腰掛た客人は、雪避けのフードがついた防寒服を脱いで横に置くと、女主人に何かを告げた。覗かせた青錆色の髪に凜子は目を見張る。男が出されたゴブレットに口付ける様子から、やはり飲食店なのだ、と凜子は結論付けた。

青錆色の髪が物珍しく、聞き覚えの無い言葉で会話する二人にチラチラ視線をやっていると、揃って自分に視線を返した為、凜子は傍目にも判るほどはつきりと体を揺らす。同様に視線の合った青錆色の髪をした男も、少しだけ驚いたような顔をしたが、すぐに親しげに微笑んだ。

こちらへと向かってくる男は、想像よりも若い。寝癖なのか、それともファッションなのか、癖毛風のやや長めの髪は顎あたりまである。虹彩は茶色で若干垂れ目気味。こげ茶の衣は膝丈で、腰にゆるくベルトが巻かれている。上着よりやや薄めのパンツに濃灰色の

編み上げ靴。地味な色重ねだが、貧乏臭く見えないのは、動作が綺麗だからだろうか。姿勢が良い。

男は、椅子を引いて凜子の向かいに座る。にこにこ笑いながら、声を掛けて来るが、やはりひとつとして理解できない。カップを両手で握りこんで、凜子は「ううう、何言ってるのかわからない……」と唸る。その声に、男は一瞬だけ警戒の色を浮かべ凜子を見るがほとんどなくして緊張を解くと、首を傾げながら何かを言った。だめだ降参だ。意思疎通がまったくはかれない。諦めて首を横に降る凜子に、男は一言二言女主人に告げ、それから凜子に右手を差し出した。握手を求められているのかと思いのろのろと応じると、男は満足したように頷いた。

得体の知れぬ女に対して、どんな興味を抱いたのか、男は凜子に再び話しかける。だから判らないんだよと冷や汗を流しながら、諦めることなく話し続ける男に、凜子は愛想笑いを返す。状況的に悪いかの判断さえつかないのだ、困り果てている凜子の助けとなるべく、木の椀が二つことりと置かれた。女主人が、何か言いながらスプーンを口に運ぶ仕草をする。ボディランゲージは共通らしく「食べる」もしくは「飲め」と言っているようだ。そして女主人が続けた言葉の中で、なんとなくひっきりのある単語に凜子は、はっと顔をあげた。

「べれ？」

突然言葉を発した凜子に、女主人はやや目を見開いたが、大きく頷くと「べれの煮込みだよ、体が暖まるからお食べ」と答える。当然、細かな内容は通じないのだが、凜子は椀を指差してもう一度「べれー？」と聞いた。女主人は肯定するように頷くと、気の毒そうに男に言う。

「おかしな娘さんだね。奇妙ななりをしているけれど、持ち物も上質そうだし。……やっぱり厄介ごとにでも巻き込まれたかねえエイゼル」

エイゼルと呼ばれた男は、腕の中身を口に運び「わ……ソーセージだ……。確か……豚がベレーだっけ？　ベレー」と感動したように繰り返す娘を観察する。

「ベレー、ベレー、ってよっぽどお腹がすいていたのか、もつと早く出してやれば良かったよ」と、女主人はいまや同情的な態度で凜子の頭を撫でる。頭を撫でられた凜子は一瞬だけきょとんと顔をあげ、もう一度確認するように「ベレー？」と破顔した。女主人はついに泣き出しそうな顔で、前掛けを覗までひっぱりあげ何度も頷いた。

それほど空腹では無かったのに、凜子は腕の中身を平らげてしまった。ミネストローネのような風味のスープだ。ベレーを原材料とするらしきソーセージと一緒に煮込まれているのは根菜類。たったひとつの単語が、答えを導き出す。ここは、自分の知らない、けれど話は聞いたことのある世界なのだ。

異なる世界。異なる理にある世界。その大陸には五つの国があって、魔法やら魔術やらがあって、

「あ……あぜえらす？」

幼子が始めて口にする言葉のようなたどしい発音だった。色持ちの娘を観察していた男——エイゼルは、娘の言葉を訂正す

るように、ゆつくりと発音する。

「アゼリアスだよ。ここはアゼリアス聖王国」

「あぜいらす！」

「……………」

微妙に違うのだが、どうやら娘は心当たりがあるらしい。驚くことに、続けて告げられた「しゃーる？」はイリス神の眷属が振う剣に嵌めこまれた珠のひとつ。蒼水晶の古語“シャル”だろう。娘はこちらを伺うようにして「あぜいらす、しゃーる、べれー……ざ……ざらさい」何故か最後は夏野菜で言葉を締めくくる。それしか物をしらないように再び四つの単語を並べ、シュロス亭の女主人の「ザラサイが好きなのかい？　今は冬場だからねえ」という呟きに、納得したように「ざらさい」と返し、神妙な顔つきをした。

「うーん、困ったな。どこから来たんだろ」

「最初は耳が不自由なのかと思っただよ。身なりの良い娘さんだし。ここは王都の貴族様もお忍びで療養に来るだろう？」

国名はあやふやな割りに、庶民が触れる機会のない古語をあげ、貴族の娘が好んで口にしなさそうな市井の食べ物——ベレーの腸詰煮込みを味わう姿は、実に奇妙である。女主人が「事情ありそんな色持ちの娘が飛び込んで来てね」と示した娘は、見事な黒髪と漆黒の瞳をしていた。エイゼルの問いに答えず、口を噤み困惑したように微笑む娘が、呪いにもかけられたのかと探ってみたのだが、真力に擦れは無い。

「名前、なんていうの？　名前」

訊ねられて、娘は困ったように首を傾げる。

「僕は、エイゼル。エイゼル・アンレイ」

とんとん、親指で胸を示す。

合点が言ったのか、奇妙な娘は同じ仕草で自分を指し

「リン」

そう答えた。

硫黄に似た匂いの中、凜子は緊張を解きほぐすよう、うん、と背中を伸ばし、頭を浴槽のふちに預ける。

雪嵐はおさまったようで、大きく切り取られた窓外には静かな夜が広がっている。忍び込む雪あかりは、想像以上に明るい。半分露天になっているような浴場は四畳ほどの広さで、裏庭に面している。立ち上がって背を伸ばさない限り、目隠しも兼ねている防風の立ち木向こうからは、伺えないだろう。

寒さに震え飛び込んだ建物は、酒場と宿屋を兼ねているようだった。女主人——リラと、青錆色の髪をした男——エイゼルとの、会話ともいえない会話から、自分がいったい何処にいるのかを確信した。

アゼリアス。

繋がった扉によつて、あの週末だけルームシェアした男が、ぽつぽつと語った母国についての話。魔法があつて魔術があつて、賢者が居て、戦争もおこるかもしれない、凜子の世界と理の違う、異世界。

まさか自分が、世界を跨いでしまうなんて。しかも運がいいのか、エイゼルという男はシャルルを知っているらしい。とりあえずシャルルに会って相談してみよう。と、この時の凜子はあくまでも暢気に考えていた。

十分に体を暖め湯からあがる。鏡に映る頬は上気している。この世界にあつても変わらない自分の顔に安堵する。麻に似た材質の布で髪の水気を拭き取り、脱いだ衣服を手にする。少しだけ考えて、

浴室で下着を洗ってしまうと、布に包んだ。一日もあれば乾きそう
だ。浴場から母屋へと続く飛び石を渡り、途中で足を止める。横殴
りに吹き付けていた雪は、風がやんだおかげで、今は静かにただ、
しんしんと降り積もる。雪の街に、三角屋根の家並みが、影を落と
し、ひとつひとつで誰かが生活しているのかと思うと、不思議な感
覚がする。

“ 誰にも知られぬ誰も知らぬ ”

そう、この世界は凜子を誰も知らない場所なのだ。そして話でし
か知る術が無かった場所だ。そんな夢の世界に自身の足で立ち、雪
の感触を確かめ、冷たい大気を吸い込んでいる。広がる光景を目に
焼き付けるようにながめると、凜子は小さな声をあげて笑った。

「リイン」

廊下の奥から声を掛けられ階段を上がりかけていた凜子が振り返
ると、エイゼルが手招きしている。さそわれるように、近づくと「
サケ？」と悪戯っぽく微笑まれる。単純にもパアアと喜色満面の
笑みを浮かべてしまった凜子はふと我にかえた。もしかしたら自
分はアル中に近いのではないだろうか。このようなところに来てま
で、風呂上りにアルコールを求めるなんて。しかし風呂上りの体は
素直なもので、水分に飢えていた。何かで喉を潤したい。できれば
ビール。なければスパークリングワイン。凜子が思い浮かべたのは
どちらにせよアルコールだった。

エイゼルがカウンターの椅子を引く。店内はそれほど混んでいる

わけではない。夕飯の時刻には遅いようで、エイゼルにた格好をした何人かが、ゴブレットを片手に談笑している。旅人、だろうか。テーブルの横に立てかけてある大剣に冒険者かもしれない、と少女時代に読んだ物語の中から、単語を拾い上げる。賢者がいるなら冒険者がいてもおかしくない。古今東西に語り継がれるファンタジー物語の、代名詞だ。

「よく飲むねえ」

四杯目のゴブレットを凜子に渡し、リラは呆れたような顔をする。

「チエザレ酒だよ」

エイゼルの言葉に、凜子は琥珀色の液体をぺろりと舐める。まろやかな風味で、鼻に残る香ばしいかおりは、醸造酒のそれに似ている。アルコール分は先ほど飲んだ醗酵酒系の“ズアッヘン”よりもやや強い。ウイスキー系かな、と凜子は頭の辞書に単語を付け加えた。

「おいしい」

凜子は満足そうな顔をして、次の瓶を指差しながら首を傾げた。

実は先ほどエイゼルが言った「サケ」という言葉は日本語の「酒」である。カウンター裏に並ぶ瓶を指して、何度もあれってお酒？とリラに訊ね、とまどう女主人が中身を少しだけ小皿に落として凜子に渡した事が、切欠だった。エイゼルが飲んでいた物も酒の種類で「ラエム」凜子が最初に渡されたミルクに入っていた物は「ルツカラ」というブランデー系。利き酒のように、並んでいる瓶の中身を確認し、凜子はこの世界の単語をいくつか覚えた

——凡て酒の名前だが。

因みに何を飲んでも「わああこれもお酒だー」と喜んでいた凜子に、エイゼルが「サケ？」と問い、ワールドワイドを超えた呑ミニケーションが成立したのである。

明けて翌朝。

パンとスープと卵料理の朝食を済ませると、エイゼルは女主人に何かを告げる。店の奥にひっこんだリラが足首まである防寒着を持ってき、それを凜子に着付ける。促されるまま店の外へ出ると、エイゼルが凜子の頭にフードを被せた。

はらはら舞い散る雪は止む気配が無い。

街の光景は物珍しく、凜子は興味深げに左右に視線を配る。石畳が続き、木造の家々が路の両側に立ち並んでいる。この付近は商家が多いのか、看板に何の商いをしているかを指す、イラストのような物が彫られてある。お世話になっている宿は、酒瓶と杯らしきものが描かれている看板が下がっていた。剣と盾。鍵モチーフの意匠。コインが二つ並んでいる物。酒瓶だけが描かれている物と、あの宿のものとの違いは不明だ。

隣を歩いていたエイゼルが前を指し示す。昨日も見えた尖塔である。近づくると三つの尖塔をもつカテドラルのような建物が、開けた広場に面していた。街の木造家屋とは違い、石造りの重厚な建造物で、左右対称に配置されてある尖塔の間に聖堂らしき建造物があり、裏手に一際高い尖塔が聳えている。石段をあがり両開きの扉を押して中に入ると、中央奥には祭壇がある。高い天井の両脇と祭壇後部にはステンドグラスが配置され、神聖かつ静謐な静けさが広がっていた。

両側に配置されてある長椅子はまばらに人が座っている。手を組み祈っている姿は、あちらの世界と差異が無い。中央の通路を歩き祭壇へと近寄る。司祭らしき人物は居らず、右手を天に向かって伸

ばしている白い石造が祭壇の後ろに設置されてある。白い神像の左手に、狼に似た黒い獣の像。口には剣をくわえており、利口そうな顔つきで神像を見上げていた。

獣の像の方に近寄り、エイゼルが剣の柄あたりを指差した。五つの石がはめ込まれている。上からトパーズ、真珠、サファイヤ、エメラルド、オニキスといった具合で、なかなか高価そうだ。そのうち真ん中の青を指しながら「シャル」と言う。

「シャル？」

「そう、この事でしょう？ 蒼水晶は古語でシャルというから」

「ん？ シャール？」

「そう、シャル」

エイゼルは青い石を指差しながら頷く。

「えっと……もしかして……それをシャルって言うの、かな……？」

嫌な予感を覚えながら疑問を口にすると、エイゼルは「そうだよ」とでも言うように、またシャルと繰り返した。

「うわああああ……どうしよううつうつ……」

思わず頭を抱えてしゃがみ込む。

よくよく考えるとありえない話じゃない。凜子の凜ひとつとつても、発音だけなら意味が分かれる。凜としたの凜。風鈴の鈴。隣人の隣。竜胆の竜。それを前提とすると、ここでのシャルも名前とは限らない。恐らくサファイヤに似た石をシャルというのだ。シャルに会えばどうにかなる、と考えていたのだが、会ったところの

話ではない。言葉も通じない異世界で、シャルを探す事なんて出来るのだろうか。一気に途方にくれ、凜子は絶望を背負う。

「シャル、シャル……シャ……シユール？ 違うな……シエリ
ー……はお酒だし……しゅりえる……しゅれいる……駄目だ忘れた
……。長いんだもん名前！」

酷く落ち込み、考え込み始めてしまった様子の凜子を礼拝堂の長椅子に残し、エイゼルは回廊を進む。少し心配だったが、リアス聖教会の敷地内で不埒な事をする輩はいないだろう。本来の目的を済ませてしまおうと、目当ての扉をノックすると返事が返る前に室内に体を滑り込ませた。

「お久しぶりですサーシャ様」

サーシャと呼ばれた男——サルスエ司教区の長は、書類に落としていた顔をあげ、微笑笑する。

「おや、何だか面倒な空気を纏っているね？」

「ロマーヌとイズラルの国境付近が何やらきな臭いですよ。エンジン
ドラレスに動きはありませんが、ロマーヌは国境線の砦がやや慌しい
ようです」

短い報告を受けてサーシャは眉を顰める。

「昨年ロマーヌからイズラルに第二公女が嫁いだらうに」

「噂によるとロマーヌ公王が病に倒れたとか」

「第一公女は降嫁しているし、第一公子は確か御年十二……」

イスラル帝国はアゼリ阿斯山脈の西にある新興帝国である。始祖は騎馬を操る少数民族とする。ここ五十年でイスラル平原を次々と平定し、エジンドラレス皇国につぐ大国を築き上げた。飲み込まれた国は、四つ。ローマヌ公国を配下におさめれば大陸の西半分の利権を得ることになる。

ローマヌ公国は大陸の西南にある中堅国家だ。アゼリ阿斯聖王国の南、特別自由都市ゼイレンと国境を面するトゥリローゼ王国の同盟国でもある。十三年前にトゥリローゼから第四王女がアゼリ阿斯に嫁いでいる事もあり、アゼリ阿斯とローマヌはトゥリローゼを挟んで、割り無い仲では無いといえなくも無い。また、工業が盛んなローマヌと鉱山を有するアゼリ阿斯は商業的な面でも利害が一致する。

「火の粉がかからない、という訳では無さそうだね」

「動向は張っておいた方がいいでしょうね」

エイゼルの報告を受け、サーシャは書類に文字を足す。

サーシャの作業を見守っていたエイゼルだが、懷をさぐると目当ての物を取り出した。

「これは関係あるかは判りませんが、ゼイレンでこんな物を」

「これは？」

机に置かれた黒い置物をサーシャは取り上げる。

不純物の混じる粘土を固めて焼いたものなのか、作りが少々荒い。大きさは親指ほどだ。

「終末信仰らしいです」

「ほう、珍しいね」

この大陸では、寄せ集め国家のイスラルを別として、リアス神を祀るリアス聖教を信仰するものが多い。と言ってもアゼリアス聖王国内でさえ、何を信仰しても異端と弾劾されることはないが、創造神として語り継がれるリアス神信仰は民俗学的見地から言っても古く、民衆の心に深く日常のそれとして根付いている。

「世界の創世はリアス神によるものではなく、その眷属によるもの。黒く貴き獣こそが唯一神であって、祈れば久遠の安寧を約束してくれる」

「そこまで“終末”を予感させるような神では無さそうだけど」

解釈の仕方によって、信仰は対象も教義も形を変える。蒼海を隔てた先の大陸では、白き天の女神と黒き地の女神が火、水、土、風を捏ね、この世界を創世したという神話がある。

「ええ、この話には続きがあつて、貴き獣は人の“欲望”“腐敗”を嫌うらしいんですよ。“腐敗”を生むのは“豊かさ”——つまり財産です。現世での滓を捨て来世へ。久遠の安寧は来世にあるんです」

「そうになると、随分俗な話になる」

「ゼイレんに、その像を持ち込んだ男はローマーヌの商人でして」

サーシャは片眉をあげた。

「ローマーヌでは、年があけてからじわじわ塩の値段が上がっているそうですよ。市井の生活を逼迫させるような影響はまだ見えないそうですね」

エイゼルは役人では無い、かといって教会に属する人間でもない。在野の魔法師である。諸国を漫遊し、腕を研鑽する……と言うと聞こえが良いが、大した物ではない。組織に縛られるのが面倒なだけである。青錆色の髪が示す通り、潜在真力が一般人に比べると高かったのだが、中央にいけば平均値だ。

間諜の真似事を始めたのは何年前だろうか。貴族の生まれとは云え三男坊である自分は所領を継ぐ事も無い。家を飛び出し、荒事に興じ、その日暮らしの怠惰な生活をしていた所、当時クアルツ司教を務めていた、薄墨色の髪をした男——現サルスエ司教サーシャ・レイヌ・ウル・ダツカと出会った。出会ったというか、喧嘩を売って負けたのだ。

その時のツケを支払うために、サーシャの手伝いをするようになったのだが、そこにサーシャと同じく、聖王庁に身をおく兄マリセル・ルーサ・ウル・ローイの口添えがあったのは、うすうす気がついている。優秀な兄の日陰で捻くれた弟としては、すべて自分を更正させる為に仕組まれた事と公に認めるのは、なかなか難しい。だが、しかしエイゼルは心のうちでは感謝している。世界を見て回るのは面白いし、時折思いがけない事象に行き会ったりもする。

「なんとなく気になる話だね」

さらに別紙へといくつかの文字を書付、サーシャは封蠟を施しエイゼルに渡した。私的な書簡——いわゆる手紙である。

表向きに、宗教と政治は一線を画している。しかし教会は国内の至るところに在り、またアゼリアス聖王国のみならず、リアス聖教会は他国にも通ずる独自の伝手を持つため、自然と集まってくる情報が多い。眉唾ものの噂話から、誰その恋愛譚まで様々である。所領を統治している領主とはまた違った角度から領民たちを見守る

事もできる。数多の情報のうちから、有益なもののみを、あくまでも“噂話”程度として中央に伝えるのだ。アゼリアス聖王国の政治を裏方から支える駒の一つである。

「ああ、それからもうひとつ」

薄墨色の髪を見ていたエイゼルが口を開く。

「不思議な娘と出会いました——」

凜子はエイゼルに手を引かれ、礼拝堂の裏手にある回廊を抜け、聳え立つ尖塔の階段を登っていた。螺旋を描くように巡らされている石段の足元をみているだけで眩暈がしそうだ。日頃、どれだけ運動不足なのかを思い知らされる。建物を二階分ほど登った時点で息があがっていた。

エイゼルが促した先では部屋の主が、佇んでいた。ぼやけた薄墨色の髪はアッシュの入ったカラーリングをしているような風合いだ。男性にしては長めの髪に、こちらでは長い方が一般的なのかも、と思う。

「これは見事な色持ちだね」

やや目を瞠ってサーシャが口にした。凜子をしばらく見つめてから、頭に手を乗せる。

エイゼルに連れられてきた部屋は、ここが執務室だとしても主張しているかのように、書棚を両側に配置し、中央奥にどっしりとした机が置かれてある。机上には、書類が雑然と重ねられており、凜子は何となく会社のデスクを思い出した。

「拾ったって？」

「違いますよ！ 困っているっぽいし、なんか放っておけないじゃないですか！」

表情を僅か崩し、人の悪そうな顔つきをした主に、エイゼルは少々慌てる。確かに今より少し若い頃は、睦言に関しても旺盛だった

潜在魔力——学術的には真力と呼ばれている——の高さは、体の一部分に“色”を持つて現れる。

多くは髪と瞳だ。青錆色の髪をしたエイゼルは水の要素と呼応する真力が強い。風は白、土は翠といった具合に。その三つに光と闇を足した五つの要素で世界は成り立ち、また、真力の根源ともなっている。光はその性質から、対象に見せ与える物で、闇はその反対の性質を持つ。端的に云うと前者は動の力、後者は静の力を得手としている。“黒”の色持ちに紋様術を操る術師が多いのには、基本性質からくるものだ。黒き賢者と名高い叡智の塔主もまた、稀代の紋様術師である。

魔法師であるエイゼルは魔術師達の脳内構造がいまいち理解できない。机上で書物を紐解き思索するより、自然にある要素を借り受け、そのまま力として振るう方が気持ちが良いのに。しかしだからこそ、いまだに転送術を使いこなせず、転送門の世話にならなきゃいけないのだという事を思い出し、小さく肩を竦めた。

「——エイゼルの言う通り、捻れは無いね。でも真力が、とても弱い。髪も目も見事な色をしているのに……何か、遮られる様な……封じの術具を付けているわけでも無さそうだし」

「こういう事ってあるんでしょうか？」

「世界は広いからね。そういう人間が居る可能性が皆無だと、言い切れないよ」

「言葉がまったく通じないかと思えば、いくつかの単語は知っているんですよ。“シャル”なんて古語も知っているみたいですし。知能が足りないという訳でも無さそうだし……凄い酒飲みっぽいから、未成年って訳でも」

「もう、飲ませたのかい？」

「だから違いますって！……そういえば彼女の言葉で“酒”を“サケ”というらしいですよ。手がかりにならないでしょうか？」
「共通語には無い響きだね」

サーシャの手から開放され、凜子は目を瞬かせる。一瞬だけ、ぞわぞわした感触が体を抜けた。いったい何をしたんだと聞こうにも、言葉を知らない。凜子の異世界語録はかなり偏っており、昨晚の酒の種類にプラスして、朝食だったいくつかの食べ物単語と「美味しい」。それから先ほどの青い石が「シャル」だという事くらいだ。九割が食に関する言葉で、人間の三大欲求は、どこにいても貪欲だなあと、妙に感心する。サケやらベレーやらシャルの単語を織り交ぜ、二人の男は会話している。

エイゼルは悪い人ではなさそうな気がする。それから薄墨色の髪をした優しい男も。どうやらここは教会らしき場所だし、執務室の主は聖職者だろうか。シャルはアゼリアスの国教は一神教だと言っていた。礼拝堂で見た白い像が、創造神かもしれない。

魔法があつて、魔術があつて、賢者がいて、戦争が起こるかもしれない。

ベレー、ザラサイ、シャル、ズアツヘン、チェザレ、ラエム、ルツカラ……ら……ら……。扉の人はなんて名前だったっけ。長ったらしくて舌が纏れてしまいそう。

「ら……らすとー、らすとーら、らすとーりゃ？」

ふと割り込んだ自信無さそうな凜子の声に、闇の魔術師と水の魔法師は顔を見合わせた。

瓶詰めの果実。繊細なガラス細工に、真鍮の小物類。面白そうな物を横目に、来た道を引き返す。

先ほどの教会で一体どんな話が交わされたのかは判らないが、結果として何も解決はしていないようだ――程度の理解力はある。物思いに沈み込みそんな気持ちを叱咤し、凜子は顔をあげる。途端に色鮮やかな反物に目を奪われ、布地の間に見覚えのあるものを見つけた彼女は小さな驚愕を漏らした。

「あ、シュシュ」

太陽は高い位置にあり、空は穏やかな天藍色を成している。

すっかり雪の止んだ路肩に、露天商が商品を並べはじめていた。

温泉地サルスエはアゼリアスの南西に位置し、特別自由都市ゼイレんに程近い。職人の街ゼイレンで商品を仕入れ関税のすくないアゼリアスで商売する隊商は、サルスエ、リイラン、クアルツを経て王都ガーラントを目指すのが常だ。

「お嬢さんにはこちらの色が似合いそうだね」

そう、銀朱色をしたものを店主に押し付けられ、凜子は一気に困惑へと表情を変える。

「そう思わないかい？」

にこにこ同意を求める店主の掌にエイゼルは苦笑ひとつ、銅貨を落とす。

「えーっと……ありがとうね。エイゼル」

恐縮そうな顔で頭を下げた凜子に、彼は気にするなと片手をあげた。

それにしても――

ラストウィリア。叡智の塔主の名前を口にしたときもまた、驚いた。

彼の人も非常に綺麗な漆黒の髪をしている。もしかしたら、彼の人に連なる人物なのかもしれない。サーシャの見立てによると、少なくとも危険な因子は無いとの事だ。もちろん、凜子が故意に能力を隠し、このアゼリアスに害成す者である可能性も、無きにしも非ず。とりあえずは、叡智の塔主に見分けてもらった方が良さそうだろう。今の所、稀代の魔術師である黒き賢者の右に出る者はこの大陸に居ないのだから。殺気の欠片も無い、無防備なだけの娘を見て、なんとなく後ろめたくなるが、疑心を持つのは職業柄である。

雪嵐が収まったのは僥倖。下手したら二三日サルスエに足留めをくらうと予想していたのだが、この調子だと転送門は問題なく使えるだろう。常宿にしているシュロス亭の味も素朴で馴染み深いが、今晚は、数ヶ月ぶりに王都の洗練された食事を味わえそうだ。

「これから王都ガーラントに移動するよ」

通じないだろうが、気休めに告げると、娘は「ガーラント、ガーラント」と囁み締めるように繰り返していた。

宿に戻り女主人に預けていた荷を確認する。エイゼルの雑囊の横に、自分の持ち物が並べられ、凜子は何事か、と考える。エイゼルが宿代を支払いかけ、はっと顔をあげた。凜子の荷物は仕事用カバン一つと紙袋が一つ。それから傘。紙袋の中から、平たい装飾箱と大きな化粧箱を女主人に渡す。

女主人は、繊細な作りをしている小箱を驚いたように見、それから包み紙の感触を確かめ、驚きを深めた。凜子は箱を開けると仕草で伝える。恐る恐る女主人が開封すると、茶色い粉が塗された、親指の爪ほどの塊が並んでいる。凜子がそれをひとつ自分の口に放り込む。釣られるようにエイゼルと女主人が指を伸ばした。

「ピエヌの宝石？——に似ている」

エイゼルの呟きに、リラは「こんな高価な物、初めて口にしたよ……」と目を細めた。王都でも有名な練り菓子だ。貴族でも、年に数度口にするかしないかの嗜好品である。化粧箱からは、見慣れない文字が刻まれた瓶が出てきた。凜子の「サケ」という言葉にリラとエイゼルは笑い声を上げる。

「サケ。ヴィラジエンマ。おいしい」

三つの単語で、これが“ヴィラジエンマ”という名の“サケ”で“おいしい”のだと伝えているのだろう。

「宿代がないから、代わりなんじゃないかな」

地方では物々交換で代価を支払う事も珍しくない。

「エイゼルがリンの分も払ってくれたじゃないか……ピエヌの宝

石なんて」

受け取れないよと箱を返そうとする女主人を制し、凜子は首を横に振った。

「いつか絶対にお支払いしますから。本当にすいません」

役立つかは判らないが、凜子はカバンの中から名刺を取り出し、箱に添える。

一瞬だけエイゼルは掌ほどの大きさをした紙に書かれてある流麗な紋様に目を走らせる。

しかしやはりそれに、真力の欠片も感じられなかったのである。

ここ、大陸の北東に位置するアゼリアス聖王国は、華の季節へ移ろう前に、雪嵐が何度かやってくるのが特徴だ。整備された街道向こうに見えるゼリアス山脈へ続く森は、雪を冠にしながらも若木が芽を出し始めている。

国を縦断しパリエス湾へと流れ込む大河の一つ。昨秋に治水工事が完了した、王都ガールントと学術都市クアルツの間にある堤が緩んでいるとの報告を受け、シェイルは視察の為、足を運んでいた。鬱屈とした気分を晴らすための気晴らしとして。

春の訪れを予告する雪嵐は昨日のもので、三度目。かなりの降雪を齎したのち、ゆるやかにあがる気温に溶け出した雪は容を変え、川へと注ぎ込む。丁度支流が交差するゼレスの堤は細心の注意を払っていても、払いすぎるといふ事は無い。

聖王騎士団クアルツ支部隊長レイモン・ジゼイは、機嫌悪そうな男を一瞥すると、机上にはさばさと書類を並べていく。彼がこのような顔をしている時は、触らぬ神に祟りなしである。

「いちおう、こっち報告書だからさ。堤の補修工事には自警の方も借り出してから」

上官でもある男に対しての態度ではないが、付き合いは十年を超える。十四年前に突如、近衛から正騎士へと鞍替えすべく聖王騎士団の門を叩いた男は、家柄だけではなく実力でも抜きん出ていた。こんな化け物が王族にはごろごろいるのか、と王城の奥深くで大切

にされてきた第二王子が、最終的に自分を叩きのめした時——当時はレイモンが上官だった——彼は信心深くも無いのに、リアス神に感謝の祈りを思わず捧げたものだ。

執務室を気だるげな空気と共に占拠したその上官は、懽然と言った様子で書類にサインをしはじめた。執務椅子を乗っ取って半刻。ここまで完璧に無言である。最後の一枚にサインし終わると、男はぼいと羽ペンを放った。ぼたぼたと濃紺のインクが机に色を落とす。緩慢にそれを見やり、男は煩わしそうに髪をかきあげた。

これで若い娘のように癩癩でも起こそうものなら、それなりの対処の仕方もあるのだが……と思いながら、レイモンはついに姿勢を崩して、執務机前に設えてある長椅子へ腰を下ろす。

昨日、王城で春待ちの宴が開かれたのは知っている。しかし、レイモンは顔を出していない。天候の悪化は宮中行事の暦通りとはいかないし、明けまで続いた雪嵐のお陰でクアルツの街から出ることが叶わなかったからだ。平穏なこの時勢、聖王国軍の騎士達は、戦乱に身を投じる事も無く、各所領の統治を補佐している。

クアルツ寄りの堤は、春に緩みやすい為警備線を巡らせていたものの、案の定、気温の上昇した今朝方から水量が増加している。くわえて、昨晩は、積雪の重みに耐えかね、学舎講堂の屋根の一部が崩れた事もあって、レイモンは休む機会を失ったまま一昼夜働きづめである。

午後の陽光は気を抜くとたちまちのうちに眠気を誘う。上官の不機嫌の原因に、なんとなく想像を巡らせながら、目を閉じようとすると「なんだ寝るのか」と声がかかった。

「だって、何にも言わねーんだもん。坊ちゃん」

「坊ちゃんと、言っな」

「んじゃ殿下」

ぎろりと睨み付けられ、レイモンはいはいと答える。

「聖王騎士団 右將軍 ヴェイル・シェイル・ガーラント・エレ・ラ・アゼリアス閣下」

「長いな」

何を言っても駄目なようである。

「――夜会で何かあったか？」

レイモンの言葉に、シェイルは「ああ」と低い声を出す。

やっぱり話を聞いてもらいたかったんじゃないか、とレイモンは密かに笑うが、上官の名誉の為に何も言わなかった。不機嫌をそのまま顔に貼り付けている光雷の騎士は「坊ちゃん」と呼んでいた頃と大して変わりが無いように見え、懐かしかった。

どうやらレイモンの想像通りの饗宴が繰り広げられたらしい。アゼリアス聖王国の珠玉の一人、皇太子は隣国トゥリローゼの王女を妻とし、二人の間に皇太孫である第一皇子が目出度くも誕生したのは九年前。聖王庁の大司祭である第三王子はともかくとして、未だに独身を貫く第二王子の立場は、軍属である事も手伝い、なかなか難しいようだ。

国中の年頃の娘の憧れである聖王騎士ともなると、女の影が皆無という事はまずない。シェイルも、それなりに浮名を流してはいるが、噂になる相手はいつも後腐れの無い相手ばかりだ。一回りも上

の未亡人であったり、妓楼で名高い美姫であったり。

実は、本人の与り知らぬ所で、本命は“ 蔦薔薇の麗しの君 ” なのでは？ などという下手すると不敬罪になりかねない噂も流れている。と言うのも、シェイルのお相手はだいたい黒みがかった髪をしているからだ。

室内では亜麻色に色味を落とす髪は、光に透けると、純度の高い黄金色に輝く。光と対成す要素は闇。黒は闇を象徴する色だ。無意識のうちに、対なる魂を捜し求めているのかもしれない。

「そうだな……いつそのことお前の娘をくれ、レイモン。苦勞はさせないぞ」

「ちょ、うちのレイラちゃんは三歳だぞ！ 今度は幼女か！」

レイモンは愛娘の安全を確かめるように、視線を彷徨わせる。

……レイモンの娘は濃緑色の髪をしていて、角度によっては、黒にも見える。いやいやいやいや。そこまで想像して、だから有りえねー……と冷や汗を流す。そういえば、ここ最近、光雷の騎士さまの、浮いた話を聞いていなかった。

「冗談も通じないのか」

「んな、怖い顔で言われたら、思い詰めるあまりって想像しちまつてもおかしくねえだろうが！」

「いろいろ面倒だな……」

シェイルは背もたれに深く背中を預けた。

クアルツ支部隊の執務室を、本来の主に返したシェイルは、鍛錬

場を冷やかすと、そのまま奥の建物へ足を運ぶ。このまま王城に戻るのも面倒だな、と思いながら、半ばこじつけのような理由を探し、その扉を開く。室内は転送の術式が彫られた床石が並んでいる。目的の座標が示されている物の上に立った彼は、真力を注ぎ込んだ。

「やっぱ……！」

エイゼルは隣に在るべき姿が無いのに、青ざめる。

彼女の真力は弱い。その為、ある一定量の真力を有している鉱輝石で足りない真力を補わなければ、転送門は正確な位置へと導いてくれない。シュロス亭を出る前に渡そうと思っていた腕輪は、懷の中で眠ったままだ。

「うわー…… やっちゃったよ……」

会話が通じない相手との交流は、諜報以上に気をつかうものだった。それにしても迂闊過ぎる——と、自分にしては有りえない失態に、エイゼルは頭を抱え込む。残されたのは、彼女の荷物。紙製の袋と、黒く染色された皮で編み上げられた鞆。それから用途の判らない杖状の棒だった。

凜子は一変した景色に瞬きをする。踏みしめる大地の感触は柔らかな雪。

細かな模様が刻まれた石に立っていた筈なのだが、刹那のうちに移動したらしい。初めての魔術らしきものに触れ、感動していたのもつかの間。隣に立っていた男が居ない。広大な雪原の真ん中、動

く物はあたりになく、凜子は呆然と立ち尽くす。

裏切られたような感覚が遅れてやってきたのは、自分が広大な雪原のと真ん中に立ち尽くし、背後に低い鳴き声を聞いていると、自覚した時だ。

「ひいつ！」

振り返って確認した物に、声が裏返る。

犀に似た形の斑模様をした大型の動物が、群れをなしてのっしのっしと向かってくる。腰を抜かして雪原に転がった凜子は、何かから身を守るように目を閉じた。が、一向に衝撃がくる事も無く、記憶が途絶える事もない。

「あれ……」

恐る恐る目を開けた凜子の前を、斑の動物が横切っていた。左手に見える森の方から現われた動物の群れは、凜子の存在など意にも介さず、右手へと行く。その動物の回りを、小さな生物が体を弾ませるよう駆け巡っている様子は、

「……放牧？」

雪積もっているのに？

飛び込む光景に対する疑問を、そのまま口に出しながら、身を起こす。立ち上がった凜子に、利口そうな生物が駆け寄ってくる。友好的に尻尾を振っているのは長毛の「犬……だよね」

ともかく、と誘われるよう動物たちの後を追って、凜子は雪原を漕ぐように前にすすみはじめた。平原はゆるやかな斜面へと続いて

いた。木造の平屋が見える。屋根から伸びるのは石造りの煙突。煙が棚引いている。雪景色に似つかわしい風景ではあるが……。

適度な運動であがった体温は、心地よい。押し流された雲間から太陽が顔を覗かせる。雪面が反射してまぶしい。手を翳して空を見上げる。

とても遠くに、来てしまった。週末は、今日で終わりだというのに。帰れそうな気がまったくしなかった。……途方も無く壮大なスケールで、迷子になった自分。気を抜くと不安に押しつぶされそうになる。そんな自分を叱咤するよう、浮かべるのは営業スマイル。玄関から出てきた、老人に、凜子は勢い良く頭を下げた。

この部屋を訪れるたび、エイゼルはなんだか居た堪れない気分になる。サルスエ司教であるサーシャの部屋とも似た雰囲気だが、纏わりつく空気はもつと陰鬱で重たい。思案するように目を伏せている黒き賢者を伺っていると、静寂を破るよう朗らかな笑い声があがった。目を眇めたラストウーリヤと視線が合ってしまい、エイゼルは教師に叱られる様な学徒の気分を味わいながら背筋を正した。

「暇なら他所に行ってください」

冷たく言い放ち、ラストウーリヤは少々乱暴な手つきで筆を走らせる。

「幼馴染に随分冷たい言い方だと思わない？」

エイゼルの肩に手をかけ甘さを含んだ笑みを浮かべたのは、アゼリアス聖王国の第三王子。聖王庁——リアス聖教会の総本山——の長。大司祭セレイル・ディエル・ガーランド・エレ・ラ・アゼリアスだ。

「サーシャからの恋文は、僕も興味あるんだけどな」

「……申し訳ありません」

なぜ、自分が謝るのかは、いささか不明だが、エイゼルは素直に謝罪の言葉を口にする。サーシャからの書簡は、あくまでも私的なものであり、常にラストウーリヤ宛である。恐らく、黒き賢者が内容をとりまとめ、大司祭に話を持っていき、そこから政治分野の一端を担っている、彼の兄弟達へと伝わるのだろうが。と、もったいつけたような図式を頭に思い浮かべる。しかし宗教は政治に介入しないという体制を取るアゼリアス聖王国では、順当な経路だ。

「エイゼルが謝る必要ないじゃない。ただ僕もたまにはサーシャと文通したいなって」

名前を知っていたのか、とエイゼルは僅かに目を見張る。無言の問いを解したのか、ディエルは口の端をやや持ち上げる。

「サーシャの尻尾を切っちゃったのは後にも先にも君くらいだよ」

「そんな事まで……ご存知でしたか」

「あれは実に痛快だった！ 僕も気になっていたんだ。何故、一部分だけ髪が編まれているのか」

「理由までは、知りませんけど」

「トウーリヤには心当たりがあるみたいだよ」

とぞんざいに顎で示された黒き賢者は頬をひくつかせる。

「ですから、邪魔をするならお帰りください。のちほど“お話”しに参ります」

「その必要はないよ。丁度、お茶でもしようと思っていた所なんだ」

さつとディエルが左手をあげる。

それを合図に、控えていた侍女たちが、執務机の真後ろ、薔薇窓に面する位置に円卓を運び込むと、手早くセツティングしていく。

円卓持参のお茶会……。

すっかり氣の抜けたエイゼルは、何故自分がこの面子と膝を突き合わせているのかまで、考えが届かない。それでも彼が我に返つて「らすとーりゃ」の名を呼び、黒き賢者と同様に見事な漆黒色を持つ娘に関して、茶会の席でようやく話題が登った頃、

当人は、

べえ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ
べえ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ

「ベレーって、べれえええって鳴くからベレーなんだ……！　って
 つか豚じゃないんだ！」と感動しながら、犀に似た動物の乳を慣
 れない手つきで搾っていた。

「閣下」

通された来客に、サーシャは続けそうになった疑問の言葉を飲み込んだ。脳裏を過ぎるのは、幾度となく叡智の塔へ逃げ込むように足を運んでいた少年の姿。歓迎するように応接椅子に向かって手を差し出すと、長軀の男は鬱屈を巧みに隠す。

王都に程近い学術都市クアルツから、南国境寄りの観光の街サルスエに、サーシャが移動したのは今から三年程前だ。自ら望んだものでは無く、聖王庁が統括している各地の教区を、司教たちが順に回るのは慣例である。一所に腰を据えすぎて、物を見る目が偏らないように、という方針からでもある。

鉦輝石の嵌めこまれた作り付けの石台に純銀製のポットを置くと、ややして柔らかな湯気が立ち上がる。サーシャは久方ぶりに顔をあわせる男に、持て成しの茶を淹れてしまうと、カップを二つ卓に置き椅子をひいた。

「昨秋のリウケです」

リウケは沈静効果を齎す葉で、医療にも用いられる。天然温泉の沸きあがるサルスエが、観光都市のみならず療養地として挙げられるのは、こういった野草の多くがサルスエの西。ゼリアス山脈の麓付近の森でしか手に入らないというのも理由のひとつだ。

「昨秋は霜が例年より早く降りたが、熟成に足りないほどでは無かったのだな」

一口味わい、シェイルは答える。世間話をしに来たわけではなかったのだが。

聖域を流れる独特な空気に、責めたてられる様な気がしてシェイルは何か話題を探す。しかし、これといった事が思いつかず、結局「変わりないか」と続けた。

「そうですね……変わらず、平穩ですよ。雪嵐もあと一度訪れれば、華の季節になるでしょう」

「ああ、昨日のは凄かった。ここに来る前にエイネの堤を見てきたのだが、あれならなんとか持ちそうだな。ゼレスの方はクアルツ支部隊総出で作業中だ」

「ええ、こちらは夕刻にはおさまりましたよ。王都はやはり荒れましか」

昨晚を思い浮かべ、シェイルは苦々しい表情する。

「明け方まで。お陰で閉じ込められた。ようやく今抜け出せたって訳だ」

シェイルの言葉にサーシャは笑みを零す。王都から離れているとは云え、どこからともなく噂話は届くのだ。

確信に微妙に触れる話題だが、サーシャは先ほどまでここにいた娘の事を思い浮かべた。稀有な色を二つも身に纏う娘の事を。

直後、シェイルが弾かれたようにその部屋を飛び出したのは、言うまでも無い。

「似ていますね」

「へえ」

ラストウーリヤの答えを受け、ディエルが細長い物を摘み上げる。

「一度、見せてもらったことがあります」

「シエイルは、ほんととトゥーリヤに懐いてるねえ」

「単に、構造を研究しろという意味合いでしょう。新しい術式を思案するのは、私の趣味ですし。構成を描くのも好きですし」

叡智の塔主は書棚の中から、一冊の本を手にとると開く。

「これです。内側の筒に墨と油を混入させた物をいれ、圧力をかけることによって、微量のインクがペン先へ伝わります」

設計書らしき図が描かれているページに目を落とし、ディエルは「この理論だと、墨壺を袖にひっかけるといふ事故も起こらないだろうね。開発は？」とあっさり答える。因みにエイゼルに至っては、ラストウーリヤの言葉の半分も理解できていない。

「途中でシエイル様から、中止の意向を……学舎の稟議が通ったばかりで」

「ああ、リズエルが生まれた頃か……アレも馬鹿だねえ。で、片棒を担いだトゥーリヤは大人しく引き下がったってわけ」

「私も出すぎて打たれたくは有りませんからね。時期尚早だっただけですよ。そのうちに——と」

「なら、これを時期にしてもいいかもしれない。ね、エイゼル」
「ええっ！？ は、はい」

唐突に話をふられたのだが、エイゼルには彼らの話にまったくいていていない。凜子の持ち物から、なぜ皇太孫の名前が出てくるのか、はたまた学舎の話題になるのかが見当つかない。

机の上に並べられた物を、エイゼルは眺める。

紙袋に入っていたのは、先ほども目にした物より小ぶりな大きさの装飾箱。鞆に入っていたのが、こげ茶色の長財布。中身は見たことのない三種類の紙幣と硬貨が六種類。財布と同じ意匠のカヴァー類。透明な何かの間には恐ろしく上質な手触りの紙束。細長い赤い入れ物の中に細い棒状のものがいくつも納まっている。黒き賢者の言を借りると、筆記用具の類だろう。それから彩り鮮やかな書物。驚くべきことに、一枚一枚の紙は非常に薄く、風景をそのまま切り取って貼り付けたような、写実的な絵が散りばめられている。どことなく、彼女に似た雰囲気をした娘の姿絵も多く。用途は不明だ。

「ねえ僕はこれらの持ち主は“記憶の愛しの君”じゃないかと思うんだよねえ。ただの予感だけど」

並べられた道具が、呪いに関する物かどうか、ラストウィリヤと一通り確認し終えたディエルは、頬杖をつく。

「……………」

「そういえばシェイルの“扉”はどうしたの？」

「どうしたも……あれ以来封印されていますよ。痼癢を起こされて折られましたね。塔の保管庫に残骸ならあると思いますが」

「ふうん、何でだろう。書き換えたりはしてないんだよねえ。僕のも結局書き換えてくれなかったし」

「——嫌ですよ。今度は私が封印されてしまう」

「さてさて、慶兆を呼ぶものか災禍を呼ぶものか、どちらだろうね」

今度は第二王子の名前まで、飛び出した。

エイゼルは、ラストウーリヤとディエルの如何ともしがたい横顔に、なんとなく、面倒な事に片足を突っ込んでしまったかもと、ぼんやり思う。しかし事態は、エイゼルの予想を遥かに超えた広がりを見せていったのだ。

彼は、今でも時々思い出す。

彼女を巡る災厄と災難。

ひとがひとたるが故の、不完全さ。そして生きる意味。

それから、嫌がおうにも巻き込まれた自分。

だがしかし、あの時の邂逅を後悔はしていない。

と、思う。

……………たぶん。

冷たい寝台に身を横たえ、シエイルはまんじりともせず夜が明けるのを待っている。目を閉じると途端に色鮮やかな記憶が、しなだれかかるように甘やかな腕を伸ばしてくる。底無しの沼へ沈み込んでいきそうな思考と、遣る瀬無い思いが交じり合い、息苦しさから胸に手を押し当てた。

あの日、サルスエまで足を伸ばしたのは、気まぐれからだ。サーシャがサルスエ司教区に移動になってから、初めてのことだと思う。ゼリアス山脈からパリエス湾に注ぐ、もうひとつの大河。ゼレス同様に幾つかの支流が本流へと交差しているエィネの堤を視察し、なんとなく立ち寄ったのだ。

サルスエは療養地としても名高いが、自由都市ゼイレンからも程近い距離に立地している為、隊商の出入りが多い。間もなく社交の場にも顔を出す妹姫に何か目新しい物を、と、言い訳に言い訳を重ね訪れたのだ。だが、その羽安めは彼に安寧ではなく仄かな希望と曖昧な絶望を同時に与えた。

手が届いたのかと思った。

それなのに

記憶は、シエイルをあざ笑うかのように、掌からさりさと零れていく。崩れた姿は亡羊としていて、現とも夢ともつかない。揺らぐ視界の中、最後に見えたのは何だったのだろう。

冴え冴えとした月光の冷たさは、絶対的な支配を持って、王宮の奥深くまで忍び込んでいる。昨晚の宴の余韻はもはや跡形もなく掻

き消され、今はしんとした静寂が広がっている。今此処に暖かな体があれば、なんの躊躇いも無く抱き寄せていたはずだ。誰でもいい。孤独な闇を埋めてくれるのなら。

そこまで考え、彼は己を自嘲する。諫言に耳を傾けるな。そして甘言に。彼が、この国の王族として生を受けた時より、纏ろう運命と対峙すべく、学習した手段だ。保身では無く自身を保つために。そう、王族であるからこそ、権力を私欲のために動かしてはいけない。己の有する力は、民の為に在るべきものなのだ。

「今日はクアルツの街まで行くよ。クアルツからガーラントまでは、馬車で一日」

凜子がここ一週間ほど暮らしているのは、学術都市クアルツの東に広がる酪農地帯にある、とある家。

「馬車、ガーラント？ 行く？」

理解できたのは、エイゼルが言っていた“ガーラント”の単語と、ここで覚えた“馬車”や“行く”

「今日行くのはクアルツって所だよ。うちの義娘も一昨年から、あそこにある学舎に通ってるんだ」

「クアルツ？ 行く？」

「ニルが帰ってきたら、出かけよう。もう一杯お茶を淹れてくれる

かい？」

男の声に、凜子は目を瞬かせた後「はい、お茶、淹れる」と答え立ち上がった。

細かい模様が掘り込まれている石台の上に薬缶を置く。台に設置されてある板の手前には窪みがあり、そこに瑪瑙のような石を嵌めこむと、板は熱を持ったように熱くなる。恐らくこれも魔術というものなのだろう。凜子はほのかに温まった薬缶にそっと手を近づけ感嘆する。

一時はどうなる事やらと思っていたのだが、白い犬とベレーの群れに誘われてたどり着いた先は、酪農家のようなだった。どこことなく祖父を思い起こさせる老人——ロサと、少年——ニルの二人暮し。言葉も通じない自分を置いてくれ、あまつさえ一部屋を提供してくれた。

アゼリアスの治安がどれほどの物かは判らないのだが、最初に辿りついたリラの店にしても、あの街にしてもそれほど危険そうな雰囲気は無かった。平和な国——なのだろうか。といっても凜子の知るこの世界は、聞きかじった知識と、自分が見たものだけだ。

……エイゼルの例もあるのだから、そう簡単に心を預けない方が良いと思う。なにせ、結果的に、荷物を奪われ身一つで放り出された。

凜子の財産といえば、身に付けていた衣類と、コートのポケットに入れていた携帯電話のみ。どうせ役に立たないのだから、今は電源を落としている。最後に見た日付は土曜日だった。とっくに週明け。すっぱかした打ち合わせはどうなってしまったのだろうと、今

更ながらに思い出し青褪める。

二連休どころの話ではなかった。連続した無駄欠勤から家族に連絡が行っている事は間違いない。ゴミ部屋はいつもの事……だけれど、何らかの事件に巻き込まれて、失踪。なんて。都会ではよくありそうな構図ができあがる。

ただ、どうする事も出来ない。

ここは、自分の知るあの世界ではないのだ。

薬缶が柔らかな湯気をたてはじめたのを確認し、戸棚から茶葉の入った小瓶を取り出した。オレガノに似た形状の葉をティカップに折り入れ熱い湯を注ぐと、やがて薄紅色に染まる。随分変わった飲み方だとは思うが、ここではこれが当たり前。茶一つ淹れる事も出来なかった一週間前が信じられない程の手際の良さである。

少しずつ、こちらの——シャルルの居るであろう——世界に触れ始め、馴染みつつあるのもまた事実だった。この先どうなってしまうのかは全く想像がつかない。安寧、もしくは隠居。という単語がよく似合いそうな酪農家の老人と少年の厚意に甘え、仕事を手伝う言葉を少しずつ覚え、こちらの常識や風習を覚え、兎も角、シャルルにどうにかして会って、事情を説明し帰らなければ。と云っても手がかりを掴める気配は今のところなく。結局同じ答えに行き着いた。

今すぐどうにかなる問題じゃない。

「ただいまー！ お義父さん！ リイン！」

少年が騒々しく駆け込んでくる。

「おかえりなさい、ニル」

続けて飛び込んできた白い犬が室内をぐるりと回って、床に伏せる。

「ゼレスの堤もなんとかなったらしいって村の人たちが言ってたよ！ 予定通り今日街に行けるよね？」

「華宵祭の買出しもしておかないといけないしね。リインの物も必要だろう。いつまでもリリゼのお古じゃかわいそうだ」

「姉ちゃんにも会わせないと！ オレ着替えてくるー！」

ばたばたと自室に向かう小さな背中を見送って、凜子と老人は顔を見合わせて笑った。

どうやら今日も、平和な一日がはじまりそうだ。

いつもと違うのは、家事と家畜の世話を手伝うのではなく、クアルツという所に出掛ける。

“馬車”で行くに行っているのだから少なくとも“村”では無いのだろう。

それだけを理解し、凜子もまた外出する為に準備を始めた。

とろとろと進む荷馬車から見る光景は、牧歌的だ。白銀に覆われていた大地は、所々で融けだした雪の下から、新緑の緑を覗かせている。白と緑、それから空の青が織り成す色彩は、とても目に優しく穏やかなものだ。春が近づいているのかもしれない。荷馬車を操る少年に「クアルツが見えてきた！」と声を掛けられ、凜子は目を瞬かせる。

クアルツ。とは街のようだ。

黒茶色の煉瓦を積み上げられた外壁。楕円に大きくうがたれた外門は開放されており、凜子たちが乗っているような荷馬車が出入りにしている。門の右側に、群青色をした軍服のような制服を着た男たちが数人立っているが、特に何かを検閲している様子も無く、荷馬車はあっさりと街の中へと入る。

茶色の濃淡をした石で作り上げられた街並みは、独特な雰囲気漂わせていた。天気が良いことも相まって、行きかう人々の数はかなり多い。もちろん、凜子が数回訪れた“村”など、たとえば今通り過ぎた横長の建築物の中にすっぽりと入ってしまいそうだ。ところどころに、外門近くで見た制服を纏っている青年たちが居たり、揃いの灰色をした外套を身に纏っている少年少女らが歓談していたり、若い男女が連れ立って歩いていたり。

華やぎの中に、落ち着いた印象を覚えるのは、恐らく街を構成している色合いの所為だろう。

街中を進んでいた荷馬車が小さな建物に横付けされる。建物の後

ろには、大小の馬車が停留している。ロサ老人に促され凜子は馬車を降りた。石畳の足元に雪の欠片もない。クアルツへの道中、段々と景色の中に緑が増えたなとは思っていたが、街中にまったく積雪していないのも不思議な感じがする。キョロキョロと物珍しそうに辺りを見回す凜子の横で、少年と老人は何か会話を交わし、ロサ老人から片手ほどの袋を手渡された少年は得意げに「じゃあ正午の鐘が鳴る頃、姉ちゃんの所で合流な」と胸を張った。

ここから別行動になるのか、少年の頭をぽんぽんと叩き、凜子に微笑むと老人は馬車預かり所の横にある建物へ入っていく。凜子は二ルに手を引かれ、目抜き通りを進み始めた。

やがて、カーンカーンと石を打つ音が響いて来た。

目抜き道の最奥には、先日も見えた教会風の建築物がある。

少し違うのは、尖塔の数が四つに増えている事と、左手側に三階建ての高さを持つ大きな建物が延々続いている点だ。石を打ちつけている音はそこから聞こえていた。建物の外側の一部分に足場が組み立てられ、不安定な場所で修復の作業に励んでいる人達が見える。

「あそこが“学舎” 姉ちゃんはここで勉強してるんだ」

二ルの言葉を凜子は繰り返す。

「……“学舎”」

凜子の反応に、少年は暫し考え、本をぺらぺら捲る仕草をし生真面目な顔で、空中にペンを走らせた。

言葉が判らずとも単純に目に映るものの単語を覚えるのは、それほど難しくは無い。例えば室内にあるものの名詞。家具や食器、食べ物。生活する際に使用される最低限の挨拶や動詞。例えば“洗う” “座る” “絞る” “眠る”

しかし動詞や形容詞と名詞を組み合わせた物を、言葉を解さない人間に説明するのは、困難である。ニルが進んで行動を共にしてくれる事に凜子は感謝していた。子供は柔軟な思考を持っている。ニルの仕草で、なんとなくだが、凜子には“学舎”が何であるのか、理解できたからだ。

「学舎。行く？」

同じく生真面目な顔で問い返した凜子に、少年は満足そうに頷いた。

「お昼にね。姉ちゃん運悪く休日当番なんだってさ。せえーつかく祝祭週間入ったっていうのに。この前の雪嵐で屋根がぶっ飛んだから、講堂内の大掃除なんだって、ぐちぐち手紙に書いてあった。」

拾い上げられた単語は“雪”と“屋根”と“掃除”である。

「だから、それまでに“買い食い”——じゃなくって、“買い出し”」

心から嬉しそうに続ける少年が、言い直した言葉の意味を凜子が知るのには、もう少し後の話だ。

手際よく買い物を進めていくニルに、凜子はぴったりと付き添う。

「んじゃ、おっちゃん、これ預かり所の三十一番馬車まで宜しくな」

“買い出し”を始めて三件目になる香辛料店を出ると、人通りは

凜子たちがクアルツへ到着したときより多くなっていた。高い位置へあがるうとしている太陽を遮るような雲も無い快晴。気温も今朝家を出た時よりだいぶあがっている気がする。様々なスパイスが混ざり合った匂いから開放され、凜子はほっとして息を吐いた。ついでにコートのボタンを二つほど外す。冷気が心地良い。

「後は、小麦粉かな」

呟きながら歩き出した少年は、だが、ぴたりと足を止める。

小さな背中にぶつかりそうになって、凜子も慌ててそれに倣った。ニルが凝視している露天からは甘い香りが漂ってくる。刺激臭を存分に嗅いだ後である事も手伝って、そこに並んでいる蜂蜜色の焼き菓子は、より魅力的に見える。

ぐうと鳴ってしまったお腹を押さえると、振り返った少年が、うんうんと頷いた。

「おばちゃん二個……四個ちょうだい！」

「はいよ」

焼き菓子は、乾いた大振りの一枚葉にそれぞれ包まれていた。ニルに手渡された焼き菓子はまだ、ほんのりとした暖かさを保っている。そろそろ昼時という事も手伝って、凜子はそれに迷う事無く口に運んだ。予想を裏切らない素朴な風味。

「おいしい！」

感想を口にする、少年は得意げに胸を張り「よし。じゃあ次行こう」と、凜子の袖をひっぱる。

クアルツ市街のほぼ中央に位置する場所にはちょっとした広場が

ある。緩やかに弧を描く石畳と緑の区画が交互に並び、平生は憩いの場の役割を果たしていた。しかし休日である今日、その緑の絨毯部分に露天が所狭しと店を並べ、石畳を歩く人の数は尋常ではない。

威勢の良い呼び込み。店主と客のやり取り。雰囲気を楽しんでいるのか、買い物をする様子も無く、店を冷やかしていく者。客層は様々だ。

目抜き通りの人波も驚かされたが、いったいどこからこんなに人が集まってきているのだろう、と凜子は半ば感心したように辺りを観察する。すれ違う人に道を譲ろうとして、凜子と同じ方向に体を避けた婦人とたたらを踏み合い、微笑を交わす。喧騒の入り混じる区画は、心のうちに懐かしい感覚を呼び起こした。こういう場所を一日に一度は歩いていたのだ。――朝の駅構内。

凜子が自分より、頭一つ分小さな少年の背中を見失ったのに気がついたのは、色鮮やかな果実が並んでいる露天につかまっている時だった。暖色系の色合いに混ざる、毒々しい青色をした果実。いったいどんな味がするのだろうとしげしげ眺めていると、店主が凜子に向かって話しかけてくる。

「幾ら？」と、試しに店主に尋ねて見ると、矢継ぎ早に言葉を続けられ、言葉に詰まる。ニルにひつついて“買い出し”をしていたとは云え、一人で買い物できる程の会話能力が無い。少年に助けを求めようと、周囲を見回して、瞬間、ニルとはぐれたのだと理解した。店主に謝るよう愛想笑いを返し、凜子はニルの姿を探す。暫くの間その場に佇んでいたのだが、人の流れに押されてしまった。

こういう場合、はぐれた場所から動かないのが定石だ。遠方にいる誰かと通信する手段が無いのだから。ニルが故意に凜子を置き去

りにしたとは考えたくない。自分が迂闊だったのだ。相手はまだ子供で、この区画に入り込んだ後も、果実水やら練り飴やらを嬉々として買い、それらはすべて凜子の分——つまりきっちり二人分購入していた。練り飴をどうにか胃に収めた後、ハムの挟まった白パンを渡され、流石に「おなかいっぱい」と降参した。

新鮮な空気を求め少し背伸びをすると、空に向かう尖塔が視界に入る。いくら人が多いとは云え、街の規模は凜子の記憶にあるどの街よりもまだ小さい。だから大丈夫だよなと、言い聞かせるよう前を見据える。最悪“学舎”へ行けばどうにかなるだろう。一番最初に外側から案内された教会に隣接する修復中の建物。

どうにか露天市から抜け出すと、どっと疲れが出た。見知らぬ街での一人歩き。いや、見知らぬ世界での一人歩きか。目印の教会は正面にある。幅の広い道は、先ほども歩いた目抜き通りだ。ニルと買い物をした店の看板を確認し、通り過ぎ、その先にちらりと見えた青錆色に凜子の頭は瞬間的に沸騰した。

癖毛風の髪。すらりと伸びた背筋はすいすいと難なく人波を行く。その色を見失いそうになって、凜子は止まりかけた足を必死に動かす。

——エイゼル！

逆恨みのようにその後姿を睨み付ける。とっつかまえて、荷物を返してもらわねば。ついでに一回くらい殴ってもいいだろうか。物騒なことを考えながら、追いかける。都会を歩きなれているはずなのに、なかなか前に進めない。

剣呑な表情で通りを早歩きしていた凜子を、たまたま街の警備に

あたっていた騎士団の青年が訝しげに見やる。同僚達に何かを耳打ちし、細波のように静かに、けれども確実に任務が伝わっていく。

「お嬢さん」

不意に進行を邪魔された。反射的に睨みあげると、難しい顔をしていた青年に覗き込まれた。

「なに？」

「どちらへ行くのか？」

「はあ？」

っていうか邪魔しないでくれないかな！

窃盗犯追いかけてるの！

だがしかし、取るべき態度が間違っていたのか、瞬く間のうちに凜子は、群青の制服を身に着けた青年達に取り囲まれていた。

街の目抜き通りは外門から直線に伸び、一番奥にリアス聖教会が。その左手には庶民にも門戸の開かれた王立高等学舎がある。年に二回行われる入学試験を通過したものでなら誰でも、無償で教育を受けることが出来る。通年二期制で初等科一年中等科一年。二年間の一般教養課程を経て、はじめて専門課程へと進むことが可能だ。

それまで“教育”というものは一部の貴族間における嗜み程度の認識しか持たれていなかった為、市井の民の中からも優秀な人材を発掘し育成すると云うのは非常に画期的な試みだった。専門課程で学べるものは、天文学や薬草学といった魔術分野に含まれるものや、経済学や歴史学といった政治分野に含まれるものなどがある。

学舎による教育が始まって初めての卒業生を輩出したのが四年前。それまでも、軍隊内では叩き上がりで功を成し、準貴族階級へとあがる庶民が、居るには居た。しかし学問における分野では、特殊な例を除き皆無であった。高等学舎初の卒業生達の中でも庶民層である数名が、中央官吏職へと就いたのは、教育制度改革の礎を確実に築くという意味合いで快挙である。

以来、王都に一番近いと云う特色しか持たなかったクアルツに――学術都市と冠を付けるようになってからまだ数年である――英知の卵たちが集う。高等学舎への入学希望者向けとして、貴族の出資による私塾や家庭教師幹旋所なども増え、今やクアルツで学んでいる、と云うのはある種のステイタスでもある。

街に住まう人間の増加に比例するよう、経済面での需要も増え、その供給を助けるべく、街は確実に発展する。些細な犯罪などが増

えるのは残念ではあるが。

聖王騎士団クアルツ支部長を務めている男は“叡智の塔主から使わされて来た私的な客人”を迎え入れ、微妙な顔をした。友人の弟である。若い頃、それなりに暴れていたその男を、レイモンは、数度、正義と愛と友情の名の元に鉄槌を下したことがあった。いつからか、間諜紛いの事をしはじめ、小金を稼いでいるのは知っている。だが、それはあくまでも裏の仕事であり、表の世界の象徴とも云える騎士団とは一切関わりが無い。挨拶の口上を述べた後、思案するように身体を揺らしたその男を眺め、頬を掻く。

「お前……自分から軍部に顔出すってえ……面倒ごとにでも巻き込まれたか？」

「うつ……」

実能的確に自分の置かれている状況を表現しているその言葉に、エイゼルは言葉に詰まった。

祝祭週間に入る前までに、例の娘の足跡に関して、何らかの手掛かりを得ようと、サルスエから王都までの主要都市と主な地方都市を回り、手ぶらで王都に戻ったのが午前中。叡智の塔主に小言を言われるのを覚悟していたのだが、予想は裏切られ、黒き賢者にしては慌てた様子で、クアルツに向かえと命じられた。曰く「探索にひっかかったのは良いが、余計なことをしでかしたヤツがいるからどうにかしてこい。可能ならば軍に介入させるな。あくまでも私事なのだから」

「——これだろ」

ひらりと一枚の皮紙を寄越される。

公的文書ではなく、エイゼルがよく取り扱っている私的文書だ。

見覚えのある筆跡は、まさか縁付くとは思わなかったディエルの物に違いない。貴族たちの好みそうな美辞麗句の散らばる、その手紙を読み進めるうちに「わわわわわ。でも、何て説明すれ——ああああ」と、落ち着き無く首を横に振ったのち、がくりと肩を落とした。

きりきりと痛む胃を押さえながら、必死で言葉を探す。

元来、内政には興味がない。

報酬が良ければ危険な橋を渡らないことも無いが、兎も角目立つような事を進んでやろうという意識は無かった。中央は長兄次兄に任せれば良いし、所領に関してもいまだ豊饒としている父親が采配を振るっている。若さゆえの過ちへの悔恨は、国を裏方から支える一部分に力を貸していると云う自己満足で、少しは晴らされていた。

然しながら、この一週間で、エイゼルの環境はかなり変化した。

現皇太子の弟達——王位継承者でも高位に位置する光雷の騎士から、無言の恨みを伝えるように目を眇められる事や、大司祭猊下から直接言を賜り、更には特命を受ける様な未来予想図は、エイゼルの描いていた物とは、真逆をいつている。いずれは蓄えた財産で、可愛らしい娘を妻にし、市井の生活に紛れる——というささやかな夢とは。

「あのですね、閣下。これはだいぶ齟齬があるように……だいたいは捕縛しちや駄目……だと思っんです。正しくは“保護”という単語がこういう場合適切であって……何で猊下ワザと？ あの人やっぱり俺で遊んでいる？」

「まあお前みたいにイキが良いの猊下好きそうだしなあ。若さゆえにキリキリ尖がっちゃっている所なんて、猊下から見たら犬ころみ

たいで」

「それ、慰めになっていませんから！ とりあえずですね、この“お願い”って正式な物じゃないですし意識すると“見かけたら宜しくね”程度の物なんで、くれぐれも宜しくお願いします。俺ももう一度街中見てくるんで――」

外が騒がしい。バタバタと通路を走る足音が続き、執務室の扉が忙しなく叩かれる。

「いやあ、もう遅いかもしれん。うちの若いヤツら優秀だし。最近、やれ堤の修理だー。学舎講堂の修理だー。ばかりで、自警っぽい事さえしてなかったからなあ」

レイモンは、涙目になったエイゼルから視線を外し、両腕を頭の後ろで組んだ。

「なんだ〜？」

レイモンの間延びした声に相反する様、室内へと駆け込んできた新米騎士は緊張した面持ちで答える。

「は！ 先ほど件の娘を捕縛し、拘留いたしました！」

明瞭快活。その報告に、エイゼルは蒼白になって声を失う。

この時ほど“探索”に関して、もう少し魔術を研鑽しておけば良かったと、後悔したことは無い。

＊＊

確かに今すぐどうにかなる問題じゃなかった。

寒い、冷たい。――痛い。

凜子は、横倒しになった視界で胡乱に今朝の言葉を反芻する。

石を積み上げられてできた壁面はしつとりと濡れていて、どこから水が漏れているのだろうか。ぴちょんぴちょんと、規則的な音を空間に落とす。高い位置に一つある窓は掌サイズで、通気口だろう。凜子に恐怖と諦観を認識させているのは、この暗い空間唯一の出入り口が、太い鉄格子で出来ている事。その先の通路は闇で今は何の気配も無い。

人間不信になりそうだ。

つい先ほどまでどちらかというと、お気楽に異世界なる場所を彷徨ってきたが、御伽噺のようにうまく話がいくわけもなく。否、童話のように結末は残酷であるべきなのかもしれない。

重たい金属製の手枷で拘束された腕をみやり、ここ数日こなしてきた家事仕事や乳搾りといった肉体労働で、一つずつはがれていったジェルネイルの最後の一つが、地爪ごとはがれているのを確認した途端、凜子は痛みを思い出し顔を顰めた。

思い切り突き飛ばされた際に足首を捻ったのか、立ち上がるうと試みた瞬間に格子に背を向けるように転がり、それきり横たわったままだ。何かをしようとする気力がわいてこない。隔絶された空間はこれほどまで安易に絶望を人に与えるものなのか。

元々課せられた使命があるわけでもないし、好き好んでここに来

た訳じゃない。

ただ、偶々、自分は自分の知っている世界以外にも、所謂並行世界らしきものの存在があるという事を知っていた。そしてここが、以前、凜子の現実として現れた異世界の存在である彼の世界であるという事を知った。

ああ、あの時の隔絶された空間は、それでも——
居心地が良かった。

生理的なものか、感情的なものなのか、頬を伝う雫に苦笑して、凜子は思考することを放棄する。

やがて、精神的疲労と肉体的疲労によって、意識が沈みゆく。その抗いようも無い誘惑に、凜子は身を委ねた。

白い空間。

白い天井、白い壁、床石も滑らかな白色。

白い手が差し伸べられ、まどろみの中で、凜子はぼんやりと夢の続きかと思う。

慈しむように指先は額に触れ、髪に触れ、肩から腕をなぞり、傷ついた中指へとたどり着く。ほんわりとした暖かさを感じたが、その程度では完全なる覚醒に至らない。もう起きたくない。心がそう言っている。

ふわり、と花の香が流れてくる。

現実から逃避しかかっていた彼女は、だがしかし、次の瞬間強制的に覚醒させられた。

唇に触れる柔らかな感触。

視界を占領しているのはプラチナ。さらりと落ちる髪が頬を撫でる。

「『誰』って——シャル!？」

飛び起きた彼女は、目の前の男を凝視した。

凜子の射るような視線を受け止めた男は、ゆっくりと体を起こして、ゆるゆると口の端に微笑を湛える。

甘やかな雰囲気を漂わせる大人の男性だ。純白の長衣はきちんと襷がとられ、腰下あたりを淡い金色の飾り帯で締めている。くすくすとした忍び笑いは不愉快では無い。こんなに色気を纏わりつかせている男と面識があっただろうか。あったとしたら忘れていた筈が無いだろう。記憶を探り、それから首を横に振った。

記憶の中にある配色とは似ていて比なるもの。
彼ではない。

「おや、判る？」

「わかる……わからない」

「放浪の一週間で少しは言葉を覚えたのだね」

「ほうろ……わからない」

「ああ、良い。僕は急いでいないから」

「………わからない」

上品に微笑む男は、柔らかな声で続ける。

「お腹はすいているかな？」

「………」

「何か飲み物は？ お茶はどうだろう？」

問いながら男が片手をあげる。

それが合図だったのか、窓辺の円卓に、銀食器が並べられる。

こういった場面では、給仕をするのにメイドか何かが登場しそうだ、とぼんやり思っていた凜子の期待は裏切られ、こざつぱりとした白い巻頭衣姿の青年が二人、手際良く湯を沸かし、茶葉をカップに割り入れる。ほうじ茶に似た芳香は、こちらに来てから初めての物だ。

黙り込んでしまった凜子を眺めていた男は、自然な所作で女の背中に右手をあてて寝台から立ち上がらせた。左手は凜子の右手をとり、しっかりとエスコートの体制だ。流されるまま、円卓へと案内され、凜子は給仕の青年が無言で勧めた陶磁器のカップを手にする。

一口飲んで、ぶつと吹いてしまう。今度こそはつきりと目が覚めた。カップの中で揺れるのは濃い飴色。

「お気に召さなかったかな？」

いつの間にか、目の前の椅子をひき座っていた男が、面白げに首を傾げる。相変わらず言っている事が理解できないが、凜子は改めてカップに口をつけ、液体を一気に嚥下した。ほうじ茶の匂いがするチョコレート味のお茶を。

「……なに？」

自分の言葉は果たして通じているのだろうか。不安になり凜子は男をじっとみつめる。

「気に入った？ ピエヌ茶だよ」

「ぴえぬ」

「そう、ピエヌ。君はそれが好きなのだろう？ 違う？」

見れば見るほど、彼女の知る男の面影を残している。泣き黒子なんてあったかなと、記憶を手繰り寄せ、やっぱり違々と首を振る。仕事柄、フィルムのチェックは日常茶飯事。モデルを使用した写真の場合、色合いから表情まで、事務所の許諾や編集部の意見の足並みが揃うまで、繰り返し行っていた。仮初の同居人と、目の前に居る男は別人だ。もしも目の前の男が彼ならば、もっと感動的な再会場面があっても良いだろう。

「表情がくるくる変わるね」
それに――

「僕をそんなに見つめる女性は居なかったな。今まで」

歌うように男は言う。

「さてと、エイゼルもおいで」

名を呼ばれるまで、完全に扉の外で空気となっていたエイゼルは、背筋を伝う嫌な汗を感じた。恐る恐る室内を覗き込んだ瞬間、黒い瞳がこれでもか、という位見開かれる。

かしやんと、陶器のカップを凜子が落とした。

「――、エイゼルっ!!」

怒気をはらんだ声が、室内に響く。

「駄目だよ子猫ちゃん」

立ち上がりかけた凜子の腕を、男が掴む。そしてそのまま引き寄せた。

自分を制する腕の強さに、凜子が目を白黒させているうちに、抱え込まれる。

「やれやれ子猫ちゃんはお機嫌斜めなのかな」

耳音に落とされる声音はどこまでも優しい。囁きとともに耳朵を噛まれ、今度こそぎよっとして身を竦ませた。

瞬間的に沸き起こった怒りも吹き飛ばされる。

「……………なに？」

「僕はデイエ……………そうだなデイル。が良いかな」

横抱きにされ、凜子の視界には言葉を紡ぐ男の唇しか見えない。距離が近すぎるのだ。

「僕の名前はデイル。判るかな？ リイン」

名前を呼ばれて、瞬きをする。

「デイル。そう呼んで？ リイン」

「でいる」

「そつだよ宜しくリイン。愛らしい子猫。ようこそ僕の箱庭へ」

流れるような音節の組み合わせが流れたのを最期に、凜子の意識がぷつりと遮断された。

＊＊

なんの記憶も無い空白の時間を過ごし、凜子が再び目覚めた時、やはりと言って良いのか、先ほどの白い空間に設置されてある寝台の上だった。胡乱げに頭をふるう。自分の意思で抗うことの出来ぬ睡眠というのは、まったくもって不愉快だ。こめかみをもんで身を起こす。空間はひっそりと静かで、人間が生活している気配が無い。調度品の少ない白い室内は、まるで病室を喚起させる。いつの間にか着替えさせられたのか、今朝着ていた服——借りた紺色の膝丈ワンプールスといつももの黒いコート黒いブーツ——ではなく、踝まであるすとした生成りの衣服を身に着けている。足は裸足だ。

暫くの間寝台に腰掛けて足をぶらぶらさせていたが、立ち上がり室内をぺたぺたと歩き始める。

壁から壁まで歩いてみたら凜子の歩幅で凡そ十三歩あった。十三歩×十三歩の正方形の空間。

片側の壁際に寝台。寝台から見て左手に窓。その手前に円卓。窓にかかるカーテンは生成りで金系の縁取りがされてある。寝台から見て右手に両開きの扉がひとつ。出入り口はそこだけだ。

恐ろしく広いという部屋では無さそうだが、家具らしきものが寝

台と円卓しか無いため、居心地が非常に悪い。せめて壁に絵画のひとつでも飾れば良いのにと一人ごちる。室内をうろろして、扉を開けてみようかと思いつくが、僅かな勇気が出なかった為、反対側の窓辺へ歩み寄る。

部屋は建物の二階にあるらしい。窓は難なく開いたが角部屋なのか左手には何も無く右手に同じ色の壁が続いている。正面の視界は木立に遮られて判然としない。合間から灯りが見え隠れするが、それが何の灯りなのか検討もつかなかった。空は茜色から藍色へと変化していく。

夜が、訪れようとしていた。

クアルツでエイゼルを見かけた。それを追う内に、群青の制服を着た青年等に囲まれ、まるで拉致されるよう石牢へ閉じ込められたかと思えば、眠り姫の覚醒を促すようなキスを受け、目覚めたらここにいた。シャルルの面影を持つ男が、エイゼルを呼び付け……。

面倒ごとに巻き込まれているような気がする。

仮にエイゼルが犯罪者だとして、デイルと名乗った男がその主ならば。

世界を飛び越えた犯罪劇に、凜子は額に手をあてる。

スケールが壮大すぎる。ありえない。

否、ありえないことはありえない。

不可思議体験は空想のものでなく、実体験として既に凜子に刻み込まれている。

ふらふらと窓から離れ、寝台に体を投げ出した。視界に移りこむ枕もシーツも白。枕を抱き寄せようとして、気がついた。はがれた爪が元に戻っている。ジェルネイルはついていなかったが、形のよい爪は以前のままだ。今更ながら、捻ったはずの足首がまったく痛くないことにも気がついた。誰かが怪我を治してくれたのだろうか。怪我というよりか再生。魔術のある世界なのだから、そういう事も可能なかもしれない。治療を施され、白い服を身に着け——これでは本当に、入院患者のようではないか。

目まぐるしく変わっていく環境に、頭の螺子が飛んでしまったのではないかと疑ってみる。

雪の街。リラの店。エイゼルの裏切り。ロサとニルと過ごしたあの日々も夢だったと云うのか。

けれど、一週間以上経過しても、夢は覚めない。ところどころにシャルルのキイワードを残して。盤上の駒はアウトポストさえ程遠い。

「シャルル……会いたいな……」

返事をするかのようなタイミングで扉がノックされた。

どきりと跳ねた心臓を押さえ、凜子は扉をみつめる。しかし扉は開かない。寝台の上で身を固くしたまま動けないで居ると、もう一度扉がノックされた。ややして遠慮がちに開かれる。入室してきたのは、先ほど給仕していた二人の青年だった。

寝台の隅に居る凜子に労わる様な視線をよこし、青年達は運んできたものを円卓に並べていく。チーズの盛り合わせ。野菜スティックと小豆色のディップ。果実の盛り合わせ。ナッツらしきもの。最期にグラスに注がれた琥珀色の泡立つ液体に、凜子の視線は釘付け

になった。

夕食を飛び越え、酒席が整えられる。

「なに……？」

どういう意味？

もてなされているのか？

それとも何かの罠？

「“サケ”と“ツマミ”をご用意いたしました」

おもわず身を起こしてしまった自分が少し情けない。

3・5（前書き）

若干の流血表現があります（大したことは無いですが）

小ぶりの花弁が可愛らしいアンジェは春の花の代表である。

妹姫から、退出を促すようにアンジェの花冠をぽいと手渡されたシェイルは、微妙な気持ちでそれを眺めた。練習用と称し作られたそれは、編み目が非常に粗く、暫くの間持ち歩いていただけで簡単に崩れてしまった。風に浚われた花弁の先を見遣り、溜息一つ落とすと、庭木の間に押し込める。

祝祭週間に行われる華宵祭で未婚の男女はアンジェの花冠を意中の者に送り、その気持ちに応える意思がある者は、花冠から一輪の花を抜き出して身を飾る。ここ数年で、市井から広がった奥ゆかしい求愛は、いまや王宮の奥深くにまで浸透している。妹姫が花冠を送る相手はいつたい誰なのだろう。先ほど彼女のサロンで話題に上っていた何人かの名前に、それだけはありえない——と、首を横に振りつつも、シェイルは外宮の西側へと足を向けた。

外敵の侵入を拒むように複雑に絡み合う回廊。幾つかの階段を上り下りすると、尖塔への入り口が並ぶ楕円の広場に出ることが出来る。天文院や図書館などが集められた、アゼリアスの頭脳の結晶である尖塔群凡てをひっくるめ、叡智の塔と呼ばれている。

そして学術庁下にある一介の天文院の長が、叡智の塔主と渾名されていることに、誰も疑問を持たないのは、魔術研究に関して秀でた彼に、この大陸においては並ぶ存在が居ないからかもしれない。事実、大掛かりな空間転送理論法は商業・軍事面において非常に有益な研究結果である。良きにしろ悪しきにしろ。

「やあ、シェイル」

「何をしているんだこんな所で」

叡智の塔主の執務室。

まるで自分がその主である、といわんばかりの顔で出迎えた異母弟にシェイルは首を捻る。

「何って、息抜き」

茶化すような口調に、シェイルは呆れた表情で、手近にあった椅子を引き寄せた。

「聖火はどうした」

「僕が始終張り付いている必要は無いじゃない」

「お前……大司祭だろう」

「そういう君だって將軍サマでしょう。ま、もうすぐ戻るよ宵の儀礼までにする事あるしね」

アンジェの花の香りを乗せた柔らかな風が白金の髪をふうわりと揺らす。

甘やかな笑みを乗せ、一日遅く生まれた異母弟はカップを口に運ぶ。

弟と二人きりの会話は続かない。室内に沈黙が降りる。成人するまで奥宮で育てられた兄弟達の仲は良好だったと言えよう。しかし異母兄の立太子に合わせ、異母弟は聖教会を終の棲家と定めた。自分分は父王や後継である異母兄の忠実なる臣である事を主張するため、軍部へ。兄弟達が顔を合わせるには諸手続きが必要となり、だんだんと距離が離れていった。

もちろん、謁見という形で週に数回異母兄とは言葉を交わしてい

るが、大司祭となった異母弟が公式に王宮へ姿を現すのは、月に一度。それもお互い、周囲を沢山の人間に囲まれ、直接会話する事など滅多に無い。それぞれの場で得た情報を交換するために選んだのは、叡智の塔主の執務室だったが、それも皇太孫誕生の頃から数を減らし、今では三人が揃うことなど滅多に無かった。ゆえに、たった数日を挟んで弟と私的な場で会うのは非常に珍しい。

ついとディエルの指先が自分に伸ばされるのを視界の端で捕らえる。

「もう貰ったの？ 気の早い娘がいるね」

その指先が摘んでいるのは薄桃色の花弁。

「ああ、さっきミアリエルの茶会に顔を出したから……」

「まさか妹と同世代の娘にするつもり？」

「そんな訳ないだろう」

「だろうね。——ねえシェイル」

花弁を弄んでいたディエルが、それを床に落とす。

「探し物は見つかった？」

話題の流れからは当然といえよう。シェイルは苦い顔をして口を開く。

「いや……」

「それにしても、シェイルにあんな顔をさせるなんてねえ」

確かにあの時の自分は、冷静さを欠いていた。

「どんな娘なのか、想像もつかないな」

冗談めかして片目を瞑るディエルの言に、言い訳がましく心の内で言葉を重ねる。

生じた感情も日を置いてしまえば、どうにか頭の片隅に追いやれる。彼の日常は、祝祭週間であることも手伝い、忙殺の一言につきる。だからこの部屋に足を運んでしまったのは、ちょっとした息抜きなのだ。そう、弟がここに居るのと同じ理由。

「さてと、僕はそろそろ戻ろうかな」

話を切り上げるようにディエルは立ち上がる。

去り際に「トゥーリヤは保管庫に居るみたいだよ」と、シェイルの肩を軽く叩く。

意味深な笑みが、その表情に含まれていたことに、思考の波間を漂っていた彼は、気がつかなかった。

＊＊

——ここに来てした事。

凜子は、無然とした表情で行儀悪く椅子に横座りをしていた。

起床し朝食を摂り放置され、昼食を摂り昼寝をし、夕方湯浴みをし夕食を摂り寝酒が用意される。なんともいえない監禁生活に突入し、早くも四日目である。

パンを千切っては窓の棧に並べていた彼女に、この閉鎖空間で顔を合わせている時間が一番長い二人の青年が、物言いたげな視線を

向けてくるが、凜子は気にもせず、その非生産的な行為を続ける。持っていたパンをすべて崩してしまうと、立ち上がり窓からだいぶん離れたところに椅子を持って移動し、並んでいるパンくずを眺める。鳥でもやってこないかと思っていたのだが、可愛らしい訪問者の訪れは一向に無い。

そう、自分は籠の鳥だ。

扉外の通路はどこまでもまっすぐに伸びているにも関わらず、歩けども歩けどもまるで魔法のように元の場所へ戻される。窓から身を乗り出して確認した建物の外観は、自分の居る部屋が角部屋であること。そして二階であることを示していた。それにも関わらず通路を歩いても階段らしき物にあたる事は無く、気がついたら寝台のある部屋の前に戻っている。

寝台のある隣の部屋は洗面所と浴室。この階には二部屋しかないのだろうか。いや、そんな筈はない。ならば、この青年達はいったいどこからこの部屋にやってくるのだ。運ばれてくる料理はいつでも温かい。虜囚である自分が室内から出る事を制限されたり、うるうる廊下を歩き回ることを制されることがないのは、此处が閉ざされた完璧な空間だからだと、無言の主張をしているように思えた。

遠くから澄んだ歌声が響いていた。天に向かって枝葉を伸ばす木立の合間に見える蒼。落ちる木漏れ日の光。

白の空間は夢のような檻。清潔で穏やかで憂いの色さえ曖昧にする監獄。

だが、その微温湯のような空気が、一瞬にして変わる。

白を塗りつぶしてしまう闇色。髪も瞳も身に纏う衣も漆黒の存在。胡乱な顔を窓外に向けていた凜子は、その色を視界の端に捕らえ弾かれた様に立ち上がった。

警戒の色を顕わにする凜子に向かって、黒衣の男は目礼する。

その異質の入室と同時に、二人の青年達が卓上を片付けていく。巨大な一枚板が室内へと運ばれてきた。黒衣の男が指示をし、それは床に置かれた。

ディエルが顔を覗かせ、エイゼルもまた居た堪れなそうな表情を浮かべ入室してくる。給仕の青年達が入れ替わりに出て行き、扉が閉ざされた。

三人の男と、唯一の女性である自分。
想像もしたくない展開が、凜子の脳裏を過ぎる。

それは唐突に始まった。

黒衣の男が、手を空に差し伸べ低い声で言葉を紡ぎ始める。それに倣うようディエルも左手を空に差し伸べる。二人の男によつて紡がれる調べは、単純に美しい。韻を踏み、時に二重の音程へと別れ詠唱が続く。まるで白昼夢を見ているような感覚に陥る。こちらを見ることも無く二人の男は言葉を紡ぐ。それに凜子の緊張もやや解れ、好奇心が勝った瞬間だった。異様な光景に、あぐりと口を開く。

黒衣の男が床に置かれた板に向かって左手を下ろすと同時に、その掌に裂傷が走る。

そして優美に手を差し伸べたディエルの掌にも同様の傷口が開き、鮮血が落とされた。

しかし紡がれる調べは、止むことが無い。

——おかしい！ この人たち絶対頭がおかしい！

この状況に立たされ、漸く、心の底から身の危険を感じた凜子は、

引ける腰に言うことを聞かせようと力をこめる。ずりずりと窓に向かつて、足を動かす。脱出口はただひとつ、窓だ。しかし籠の鳥は、自らその籠を出ることはかなわない。エイゼルが、凜子の腰を浚う。

「ぎゃあああ——」

担がれ、詠唱を続ける男達の間、血まみれの板の上に荷物のように置かれる。

「いやあああ！ 血っ！ 血っ！！」

後ろから自分を抱え込む力に抗おうと、もがくけれど、男の力には適わない。

恐慌状態に陥った凜子に、更なる追い討ちがかかる。

エイゼルに掴まれた手首に、裂傷が走った。

「——なっ……！」

痛みよりも、事実が凜子を打ちのめす。

無理やり切り裂かれた肌。

血塗れた床に転がる自分に対して、右側に白衣の男。左側に黒衣の男。背後にエイゼル。

「っ、ぎゃあああああああああああああああああああ」

だがしかし、凜子の耳に飛び込んできたのは、理解できる言葉だったのだ。

「ごめん！ 本当にごめんねリン！」

「ああ、これで会話ができるね」

「その娘の口を塞いで下さい。私は寝不足なんです。頭に響きます」

流れ込む言葉の奔流は、後頭部を殴りつけられたような痛みを伴う。

凜子は間抜け面で、滑らかに動く口をただ見ていた。

「隔離結界が保たれるのは、およそ半刻でしょう。ですからその間に交わされるすべての会話は記憶していただきたいのです。私はアゼリアス聖王国天文院長官。ラストウーリヤ・ハルス・ウル・シータと申します。世界における新観点、新発想を根幹となす魔術に関しては私の方が多少得手としておりますので、魔術院の彼等では無く私が此処に居るといふ事は、今、議論されるべき事ではありません。無論、貴女が、私では役不足と判断される場合、後日、三位以上の署名を持って再論議の申し立てを要求する事が可能です。またこれらの言葉は立会人であるアゼリアス聖王国聖王庁大司祭猊下によって保障されます。さて、貴女の名前はリインで、宜しいでしょうか？ 異界の方」

圧迫面接もかくやという状況に、凜子の口はあいたまま塞がらない。一息に告げられた言にディエルは、ここ数日におけるラストウーリヤの心労に思いを遣りながらも、苦笑を禁じえない。

「聞こえていますか？ 言葉が通じていないという訳では無いと思うのですが」

ぺたりと座り込んだままの体制で固まっていた凜子は、訝しげに顔を覗き込まれ、漸く僅かに体を揺らす。

長身の男が腰を落として、視線が近くなった。細められている瞳に侮蔑の色は無いが、友好的な色も無い。凜子は逡巡した後「あの

う」と遠慮がちな声を出した。先生、質問です。といった具合に右手を挙げる。どの点が判らないのかを自身で理解してから質問に來なさい。と反対に怒られそうな気分にもなるが、目の前の男が吐いた台詞から、せめて自分にとって意味のある単語を拾い上げる。

「えーっと、私は……リインと呼ばれて？ 名乗っているけど、本名は高宮・凜子。高宮が家名って事になるのかな。凜子が名前で、こっちの人たちは発音し難いみたいだからリインって事になった……みたいで」

日本語をもってして、彼等に語りかけるのは、実に奇妙である。本当に自分の言葉が通じているのだろうか。内心で首を捻りながらも凜子は、のろのろと思いついた事から声に乗せていく。

「本当に私の言っていることが、そっちに理解して貰えているのか、実感ないんだけど……今、貴方の話した言葉は、確かに日本語に私には聞こえてる。これって、魔法だか魔術とかが使われたって事？ ああ、血をどばーっとか……」

そこまで言って、凜子は視線を落とした。身に着けている衣服に、幾つも血痕が飛んでいる。座り込んでいる板の上にも。両腕の傷は塞がっていてそういえば、全く痛みを感じていないが、如何せん見た目が悪い。血で汚れているのはこの場において、自分だけなのである。

「正直……なんだか……気持ち、」

悪い。と続けようとして、凜子は言葉を飲み込む。ラストウーリヤが剣呑そうに目を光らせたような気がする。

「気持ちが……気分が、悪いみたい。そう！ 体調不良！ 女性は血の匂いに慣れてるっていうけど、流石に他人様の血液振りかけられると……血に酔いました先生」

顔を俯かせていたディエルが、小さく肩を揺らす。

ラストウィリヤはいよいよ不機嫌を顔に張り付かせる。

エイゼルは気配を殺したまま身動きしない。

「あのね、先生っていうか。先生ぽいなーって。えーっとシャルのお友達で上司な、らすとーりやさんが貴方？」

「……………なるほど。まず、そこからですね……………」

ついに、ディエルが堪えきれないといった様子で噴出した。

どこからも隔絶された空間を作り上げるのが隔離結界である。

そしてその場は、予め、ある程度の定義付けをする事が出来る。

以前、凜子が体験した場合は、シエイルにとって“誰にも知られぬ誰も知らぬ”場。そして結界を閉じた彼を世話する他者が存在している事。その他者とは自分達と同類、若しくは近い体内構造を持ち、音をもつて意思疎通が可能な存在である事。閉じられた場合は、他者の理に準ず。理に準じた時間は二昼夜の間結界を保持する。

かつて黒き賢者が作り上げた扉には、そう定義された紋様術式が刻み込まれていた。

シエイルは、魔術こそはないが、似たような社会構造の歴史を持つ世界の存在である凜子に配慮し「彼を世話する他者は、必ず自分よりも劣位にある」と定義されている部分を「衣食住の確保。身の

安全の保障」と告げた。

同様の場をディエルも経験している。

今、凜子が座り込んでいる一枚板は、かつてディエルが開いた扉である。

一時的な物だが、彼女と会話を成立させる為に、ラストウーリヤがその一部分を書き換えた。「あれなら三つとも保管庫で埃を被っていますよ」と、何食わぬ顔で言っていたが、十四年と云う長き年月を、黒き賢者は無駄にしなかつたらしい。密やかに研究と解析を続けていたのでなければ、たかだか数日で、隔離結界を定義する術式を書き換える芸当など出来やしない。刻まれている紋様は簡潔ではあるが、非常に精微だった。

隔離結界内の理を他者に委ねるのではなく、他者と共有する。

これによって、意思疎通が可能な上、存在する他者の時間に委ねた結果の流れる時間差は、解消される。

点の集合体が創り上げた世界は膨大であるという。膨大な数の異なる理があるのだ。

それらは自然に交じり合うことは無く、それぞれの理において始まり終わる。

だがしかし、この非常識な存在は、閉ざされた彼の箱庭に生きづき今もなお荒らしている。興味を覚えない訳が無い。理解したいとまでは思わないが、面白い。

「つまり……ここは魔術による隔離結界というものの中で、一時間……半刻しかそれは持たない。それが過ぎたららくーに自動翻訳されて意思疎通が測れないって事……」

膝を抱え、凜子は窓の向こうを見る。いつか見た黒い靄が流れて

いる。

淡々と語っていたラストウーリヤは小さく頷き、先を続ける。

「私達は、貴女の身に起こったこの世界への干渉について、その要因となるべく物を調査すべきと判断しております。また、異なる理を持つ存在が異なる理に於ける界に与える影響についての予測。その間貴女の協力と助力を要請致します。世界における異端である貴女が果たすべき責務と私は考えておりますが、天災ともいえる事象である事を考慮して……」

「しかもシャル知らないのか……」

「私の話、聞いていますか？」

「うーん。聞いてるような、聞いていないような」

「……………」

そう肩をすくめた凜子に、むっとした表情を浮かべるラストウーリヤを見て、ディエルは声を殺して笑う。自分達兄弟以外で、黒き賢者を黙らせる存在というのは、なかなか珍しい。

「ね、リイン。シャルってリインの大切な人？」

会話の行方を見守っていたディエルが、唐突に口を挟む。

ラストウーリヤは余計な事を言うな、と眉を寄せる。

「いいじゃない少し位話聞いても。だって、この世界に来ちゃったリインはトゥーリヤと知り合いだっていうその男を探してたんでしよう？」

「大切っていうか……、ここがシャルの言ってた世界なんだーっと思ってたら、シャルに聞けばどうにかなるかなって。らすとーりやさんは凄いい魔術師だって言ってたし。帰り方判るかもしれないっ
て思っ
て」

「じゃあその凄い魔術師であるトゥーリヤが目の前に居るなら無事解決なんじゃない？」

「解決……なのかな……」

「うん、だって、君はきつと帰れるよ。元の世界に」

「え、本当！？」

「トゥーリヤは言葉を捏ね繰り回す癖があるけどね」

「猥下」

「君がちよつと協力してくれれば、帰れる方法もあるよって言いたかったみたいだよ。ね。トゥーリヤ」

そこで、隔絶された世界は、唐突に開かれた。

滞留していた時間が流れ始める。

リアス神を讃える賛美歌が、遠く。

謳うように、ディエルは凜子に語りかける。

「そして帰る時になれば、きっと会えるよ。君の言うシャールに」

しかし、凜子の耳に届く言葉はもはや彼女の知る言葉ではない。

一瞬だけきよとした表情を浮かべた凜子だが、曖昧な顔で首を傾げる。

「それでは、本日の査問はここまでとす。なお、エイゼル・アンレイを天文院長官ラストゥーリヤ・ハルス・ウル・シータの名において、天文院長官付き管理官と任命し、娘の監視役を命ず」

すでに彫像と化していたエイゼルは突然任命された、中央執政官の役名を聞こうとも、やはり固まっ たまま動かない。

ラストゥーリヤはこめかみを指で押さえ、踵を返す。

リアス聖教会大神殿の敷地内の右奥。

大司祭の居住空間として整えられた建物は、やはり結界で閉ざされている。

さらに、異界の娘が住まうあの部屋の周辺には、許可された者しか出入り出来ない結界が張り巡らされている。凜子自身は入ることは出来ても出ることが出来ないという定義付けが術式に施され、彼女は二重結界の檻の中に閉じ込められているのだ。

背後からの足音にラストウーリヤは嫌味をこめた視線を持って、出迎える。

「貴方は……どうなさりたいんですか。あの娘を」

「そういう君も、どうしたいの？」

飄々と、ディエルは応える。

「ま、研究馬鹿の君が少しでも長く手元においておきたいって考える気持ちは、判らないでもないよ。あれはなるほど、異端だ」

軽く肩を叩き通り過ぎて行くディエルの背中に、愚痴のひとつでも零したかったが、ラストウーリヤは小さな溜息を一つ落とすだけに留まった。

「結局さ、ボディラングージだけでコミュニケーションを成立させるのって、難しいよね。最低限の欲求の表現とかだったらどうにか通じるけど『何かを飲みたい』の『何か』を事細かく説明する為には言語って大切なんだよ。そりゃー私はお酒ならなんでも好きだけど、お風呂上りの一杯はしゅわしゅわーぷはあっ！ って視覚と味覚にくわえて感覚で楽しみたいんだー。って、わっかんないかなあ、エイゼル。いやこの状況でそんな注文つけるの贅沢？ 贅沢だよなー。うんうん判ってる。判ってるんだけど、ぐあー！。ストレス溜まる」

くだを巻いているのは、凜子である。

アルコール度数の高いライカ酒は、通常、一度表面に火を点けてアルコール分を少し飛ばしてから飲む。それも小指ほどの高さしかない盃に一杯の量をちびちびと時間をかけて飲む。エイゼル自身、酒には強い方であるが、風呂上り、血流の良い状態で一気に胃に流し込んだら、卒倒してしまうような気がする。

身を清め、部屋へと戻ってきた凜子は窓際に設えられた酒席にエイゼルが着いていることに、片眉を跳ね上げたが特に何も言わず、そのまま歩み寄ると小ぶりの盃を手にする。二層になっている液体は、下部分が琥珀色、上部分は乳白色。遠くから細目で見ればビールに見えなくも無い。ほとんど一口で飲んでしまい、その味に非常にがっかりした顔をした凜子が、そのままよろよろ席に着くと、エイゼルが慌てたように何かを言う。凜子は力なく首を横に振り、返事代わりに盃を差し出す。

「ください」

「え、え？」

「のみますよ、わたしは、ください。これ」

という会話を数度繰り返し、冒頭に戻る。

流石の凜子も、ライカ酒を七杯程飲んで、多少酔っ払ったらしい。

開け放たれた窓から、室内へと流れ込む風は、火照った肌に心地よい。盃を卓にこつりとあてて置く。夜に支配された世界は、窓向こうを闇色に染め上げているが、隔離結界の中にいた時に見た暗い色とは、まったく異なっている。暫くの間指先で杯を突付いて凜子が、自信無さそうに、溜息を吐いた。

「私、帰れるんだよね……ここでお世話になっていたら……さっきの話ってそういう事でしょ」

エイゼルは答えない。凜子は視線を青錆の髪に遣り、やや乱された卓上に遣り、また窓向こうに遣る。

「なーんか、いろんな人の好意受けちゃったな。リラさんとか口サさんとかニルとか。まあエイゼルも少しは」

名前を呼ばれ、エイゼルは目を瞋る。しかし凜子はどこか遠いところを見るような表情で、窓向こうから視線を外さない。

「デイルもあのらすとーりやさんも、悪党一味とかじゃなくて、いい人なんだよね、たぶん」

この世界で、誰も理解されることのない言語による独白。そこに誰かがいても、本音を言ってしまうのは、居心地が悪い。大の大人が酔っ払ってぶつぶつ呟いている姿は、格好がつかないだろう。凜

子は苦笑をもらし「おやすみ」とこちらの言葉で告げ、席を立つ。何か言いたげな視線が追ってくるが、そのまま寝台に潜り込む。上掛けを頭の上まで引つ張り上げてしまった娘に、エイゼルは一瞬だけ躊躇したのち、娘の頭辺りにぽんと手を置き、部屋を後にした。

＊＊

王都ガールラントにある大聖堂では、朝の儀礼、宵の儀礼に創生神への祈りが捧げられる。アゼリアス聖教会の総本山にあたるこの大聖堂では一年を通して、その儀礼が一日足りとも欠ける日は無い。春告、夏告、秋告、冬告と一年の終わりと始まりを告げる特別な儀礼は、時の聖王を迎えて行われる大きな行事で、平生ならば、肅々とした雰囲気の中か佇んでいる大聖堂に、僅かな喧騒を齎す。

リアス聖教会は、基本的に一日中その門戸を開いている。街中に在る教会のみならず、大聖堂もまた然り。だが、王宮の北西に位置する大聖堂は、王都からもやや距離があり、人の訪れは特別な儀礼を除くと、聖地を巡礼する者達を数に加えてもさほど多くは無い。ゼリアス山の山肌にしがみ付くような位置にある大聖堂への道は険しい階段を何百も登らなければならず、騎獣の類も、転送魔術も使用不可とされているからだ。変化を嫌う者達にとっては、安住の終の棲家ともいえよう。

石段の両側に設置された灯火は等間隔に配され、夜の道を照らす。それらの灯火が一斉に点火され、山の頂に向かって伸びる曲線が浮かび上がる瞬間は、特別に美しいと言うが、ミアリエルは見たこと

が無かった。何故ならば、新しい季節の訪れを告げる大祭時くらいしか、まだ内宮より外に出たことが無い。祝祭週間の始まりの点火式を見る為には奥宮ではなく、せめて外門まで行かなければならない。兄王子達の昔語りのように、市井の者に身を賣して王都を忍び歩きたいと、常々思っているのだが、未だ嘗て一度として、その企みが成功した試しが無かった。

だから例え、祝祭週間で賑わう王都を横に、紗で覆い隠された輿に担がれ、大聖堂への階段を登っているという、なんとも微妙な状況でも、心が躍らないわけがない。背後を振り返ると、だんだんと小さくなる家並みに頬を紅潮させる。つい紗をよけて顔を出すと、歓声をもって迎えられた。春告げの誉れは、大司祭の采配の下、聖王によって神への御礼がなされる。儀礼への参加は強制されるものでも、制限されるものでもなく、大聖堂へ向かう石段には民衆の姿も多い。

「ミアリエル様、そのように身を乗り出しておりますと転げ落ちますよ」

護衛騎士に窘められ、しぶしぶと姿勢を正す。

「そんなに運動神経悪くないわ。こんな輿に担がれなくなつて、この石段も駆け上がる自信あるもの」

「無謀な試みを企てないか見張っていてくれ。と右將軍様から言い付かっておりますゆえ」

「まあ、近衛はいつから聖王騎士団の配下になったのかしら」

「近衛騎士団も聖王騎士団も、おなじく聖王を戴いております」

「……こじゅつと」

「何か？」

さらりと笑みで返され、ミアリエルは黙り込んだ。誰も彼もが、自分を子供扱いする。奥深く守られているのではなく、閉じ込められているような気分だ。あれをするなこれをするな。姫君らしくない。優秀な兄王子達と比べると、確かに自分はおまけのようなものだろう。前正妃の後に正妃となった女の子供。たいした身分でもなく、しかも未亡人だった母。口さがない者が、母を妖女と隠れて呼んでいるのも知っている。実の息子を捨て、自らの欲に走った女。そんな女の娘だから、表に出さず秘匿する。自らをそう貶めて、ミアリエルは首を横に振った。

そうではない。恐らく、自分はこのうえなく愛され、大切にされている。すくなくとも血の繋がりのある家族達からは。父王とも母妃とも兄王子達とも、そう頻繁に会うことは叶わないが、彼女の知る貴族の子女のように、ミアリエルは乳母の手によって育てられたわけではない。母妃が自らの手で自分を育てた。父王に抱かれ眠り、兄王子達に両手を引かれ歩くようになった。

彼らと顔を会わす機会が減ったのはいつからだろうか。考え込むよう、ミアリエルは頬に手をあてる。生まれたときから、一番上の兄は皇太子で、二番目の兄は聖王騎士、三番目の兄は聖王庁の聖官だった。奥宮に住まう皇太子と内宮に住まうシェイルは兎も角として、聖官であるディエルに会うためには大聖堂に行かなければならないはずだ。聖官達は見習いから大司祭まで、大聖堂内で蟄居している。けれど、奥宮の庭園で笑いあった記憶にディエルの姿がある。

「リズが生まれて……ラエル兄様達は北殿から西殿へ移られたのよね……シェル兄様が内宮に移られたのがその後で、ディル兄様が大司祭になられたのも……」

同じ年。

輿が揺れる。ミアリエルは慌てて吊り紐を両手で掴む。冗談ではなく輿から転がり落ちてしまいそうだった。到着を告げる護衛騎士の声。大聖堂の前広場に到着したようだった。アンジェの花の香り。期待と興奮の入り混じった、けれどもささやかな喧騒。創生神を讃える歌。ここから大聖堂の入り口へと続く階段は、たとえ王族でも歩いて登らなければならない。

雲散してしまった思考にミアリエルは翡翠の瞳を瞬かせる。それから瞳を閉じ、再び開く。紗からゆっくりと姿を現した彼女は、毅然と顔を上げ口元には笑みを湛えた。視界の端にシエイルの姿が見える。奥宮の庭園ならば、飛びついている。だが、今はそうすべきではない。シエイルに手を取られ、彼女は静々と大聖堂へと足を進め始めた。神から春の訪れが告げられる夜が始まる。

だが、もう一人の籠の鳥は、その夜の意味など知る由も無く、夢の中をたゆたっていた。

3・7（後書き）

な、長らくの放置プレイ

大変申し訳ございませんでしたー！！（土下座）

言い訳は後でさせてください……

<http://mixxx.blog129.fc2.com/>

祭壇の前で、威風堂々たる面持ちの男が膝を落とした。

その横で、白を重ねた司祭服を身に纏っていた青年が聖句を唱えはじめる。

高い位置に並ぶ聖火の揺らめき。

ちらりと背後を振り返ると、興奮を隠せない沢山の瞳がこちらを見ている。自分を見ているわけではない、祭壇の王と大司祭の一挙手一投足を皆が、見守っているのだ。

小脇をつつかれ、ミアリエルはあわてて正面を見すえる。一段高い場所に位置している祭壇前では、父王が大司祭である兄と並んで頭を垂れている。朗々と続く祈りの文言は長く、眠気を誘う。本来ならば寝所に入っている刻限であるが、華宵本祭の宵宮は始まったばかりだ。もぞりと体を動かすと、自分をつついた手が、背中に回される。長時間立ちっぱなしという事もあり、足が痛い。ミアリエルは背中をささえるシェイルの手に、有り難く体重を預けることにした。

これ以上は我慢が出来ない。こっそり靴を脱いでしまおうかと逡巡し始めた頃、祈りの言葉が余韻を残し締め括られた。

民を代表しリアス神に頭を垂れていた王が静かに立ち上がる。隣に控えていた大司祭が続ぎ、王へ五色で彩られた器を差し出す。王の手によって供物台へと設えられた器に、左右から歩み出てきた聖官たちによって、穀物や果実の種が、ひとつずつ落とされていく。

春を告げる祝いは、豊穰の祈りでもある。

芽吹き始めた新しい生命が、無事に根付きますよう。

蔽かなる鐘が鳴る。大聖堂の鐘の音を合図に、小神殿の澄んだ鐘の音が響く。王宮の鐘楼が風を揺らす。街中にある教会の鐘が続く。そして、国中の至る所に設置されている、穀物で結い上げられた松明が、聖火から分けられた火種で点火され、炎が夜空を焦がす。

興奮に沸き立つ歓声。

今年も、春が告げられたのだ。

*

ミアリエルは欠伸を噛み殺す。もう少し起きていたい。お祭騒ぎとなつていであろつ夜の街を今年こそは見てみたい。昨年までは王宮へ戻る頃には、輿の中で眠つてしまつていた。だから、今年こそは。

明日、華宵本祭の最終日、王宮で行われる大舞踏会に、ミアリエルは主催者側の一人として正式に出ることになつていた。賓客ではなく、客を持て成す社交の場へ。それはつまり、成人に向けた歩を進むということだ。兄王子達に言わせれば「まだ早い」の一言だろうが、自分のサロンで行われる茶会とは規模が違ふ公的な場で、ゲストを出迎えるのだ。

気合を入れ直すよう、清涼感のある少し苦い茶を飲み干す。

大聖堂のさらに奥にある広間に、やんごとなき身分の者とそれに仕える人間が集つていた。にも関わらず、場はかなり砕けた雰囲気だ。それもその筈、この場にいるのは王族と彼らに仕える者のみ。奥宮の一室であるかのような気安い空気である。ミアリエルがお付の女官にお茶のおかわりを注文すると、「そのくらいにしておきなさ

いませ」と窘められた。

「御不浄が近くなつてしましますよ」

はつきりとした言に、ミアリエルはお腹に手を当てる。言われてみるとちよつと……

「行つておきたいかも……？」

大聖堂から王宮まで戻るのには、かなりの時間がかかる。下手すると日付を越してしまうかもしれない。

女官は苦笑しつつミアリエルの手を取る。

「一人で行けるわよ」

「そういう訳にはいきませぬ」

立ち上がり、中央の方をちらりと見遣ると、歓談している輪から笑い声があがった。ミアリエルは自分が笑われた訳でもないのに、なんとなく気まずい思いをしながら広間を後にする。

滑らかに続く床石に踵を落とすたび、音が響き回廊に沈み消える。広間からさらに奥まつた場所にある中庭を横切り、小さな建物へ向かう。空は漆黒ではなく、国中を照らしている松明からの炎に、わずかばかり染められているような色をしていた。街の浮かれた空気が、静かな聖域にまで届いているような感覚。

無事用を足して、手水鉢で手を清めると、女官が柔らかい布を手渡してくれる。

庭の木立向こうにあるであろう街が見えないだろうかと、ついつい背伸びをしてしまう。

少しばかり歩いたことによつて、眠気が吹き飛んだようだ。夜風にのる花の香りに、ミアリエルはうつとりと目を細める。

春なのだ。

夜の散歩——しかも奥宮ではない場所を歩いている。

広間へと戻る道すがら「エマウは誰かに花冠を渡すの？」なんとなく高揚する心のまま、ふと思い浮かんだ事を口にする、女官は声を詰まらせたようだ。

「なぜですか？」

「へえー、居るんだそういう人？　だあれ？　やっぱり騎士さま？」

「居りません」

きっぱりとした口調とは裏腹に、目元が僅かに赤い。

「それとも文官系かしら。エマウの水色の瞳にはねえ——」

思案するように唇に人差し指を当てる。視界の端で何かが動いた気がした。目を凝らすと、青錆色の髪が木陰に見える。

「そうね、あんな髪色だったらとっても似合うかも」

「何を仰ってるんですか！」

示した方向へ行こうとする、ミアリエルをエマウが制する。

「折角だから名前をお聞きしましょうよ。って……あの方……」

小首を傾げる姿は、無垢にも見える。

しかしその中身がだいぶ変わった思考をしているのを、彼女の身近に居る者達は知っている。

「……聖官じゃないわ。帯剣していたもの」

「今宵は護衛の方も多くこちらにお越しですからね」

「でも、それなら騎士さまの格好をしているのではなくて？　とってもとっても怪しいわ」

この奥には、聖官達が蟄居している庫院がある筈だ。

いつだったか、兄に見せてもらったその場所の配置を思い出しながら、ミアリエルはいくつかの疑問符を思い浮かべる。

それから悪巧みを思いついたような表情を隠すように、唇をきゅっと引き結んだ。

「やっぱりお名前をお聞きしてこなくちゃ」

今にも駆け出しそうなミアリエルに、女官は、とんでもないと首を横に振る。

「戻って護衛騎士の方々に知らせましょう」

「だめよ！ そんな大騒ぎをしちゃ。蜂は藪からつついて出すものよ。私は真相を知りたいの」

胡散臭い人間が出入りしていると、女子供の手に負える問題ではない。

しかし主の言は、なんとなく支離滅裂である。

続けて、耳打ちされるように告げられた言葉に、エマウは目を白黒させた。

「愛人かもしれないの」

——青い鳥を、白き聖者と黒き賢者が飼いならしているんですって。

濃い緑の影にひらり、と若苗色のドレスが揺れる。

樹立がかさり、とかそけき音を立てた。

少女は息を潜めて先を見つめる。

青錆色をした髪 of 男は確かな足取りで奥へ奥へと歩を進める。

「……間違いないわ」

こくりと喉を鳴らした主に、エマウも不安げに言葉を漏らす。

「ミアリエル様……皆さまが心配されますからもう戻りましょう」

先ほどから何度も告げているのだが、主は頑として譲らない。

愛人云々の話は大変興味深いのだが、この場において好奇心を優先させるのは女官としての矜持が許さない。どうにか主を説得しようと先ほどから試みているものの、王女は翡翠色の瞳をきらきらさせ熱っぽく語ったかと思うと、瞳を潤ませながら迷子の犬のように見上げてきたり……と、つまり、あの手この手を使っては精神的にエマウを攻撃する。

エマウは聖域のこんな奥にまで来たことはない。

年に五度ほどある大祭時に、主の供として大聖堂を訪れたくらいで、足を踏み入れた場などせいぜい大聖堂の奥にある控えの広間と中庭の隅にある御不浄くらいである。

庫院の建物は山肌を背に静かに建っていた。

入口は両開きの扉が一つ。その横には夜を照らす松明と、聖官の姿も見える。

こんな静かな場所で先ほど主が言っていた「蜂の巣をつついて」真相究明に挑もうものなら、大騒ぎになるに決まっている。

リアス教会はいかなるものにも門戸が開かれているが、大聖堂の聖官は男性が殆どだという。ドレス姿のミアリエルや女官姿のエマウが庫院の周りをうろつろしているのが見つかったら、それこそ誰かを忍んできたと思われるしまう。何やら頭痛までしてきたが、それでも彼女はおのが主を最後まで止めようと努力していた。と、彼女の名誉の為に言っておこう。

青錆色をした髪の方は、誰にも咎めだてされずに、建物の奥へと入っていった。

「エマウ見て。鳥が歩いてるのよ。青い鳥。あなた見たことある？」
脳内で幾つもの言い訳を並べ立てていたエマウは、主の言葉に「今更」と思う。さながら隠語のように「青い鳥」と呼ばわれた青錆色の髪をした男を追ってきたのだ。

「あの人の事じゃないわ。そこ」

つ、と指で示された先を見やると、庭樹の影を青味がかつた鳥が片翼を広げたまま、よちよちと進んでいる。

「鳥……ですわね……」

「鴨とかじゃないのよ。しかも今は夜よ！ 鳥って夜目が効くの？ それとも飛ばうと思ったけど良く見えなかったから歩くことにしたのかしら」

言いながら今度は鳥を追うように茂みの方へ向かい始める主の背を見て、エマウは慌てて我に返る。

「ミアリエル様っ！」

「ほら……私たちにこっちに来てって言っているみたいじゃない？」

クウ、と青い鳥は小さな声で鳴く。

ミアリエルがまたふらりと一歩そちらへ寄ると、鳥はまるで頷くかのような仕草を見せ、よちよちと歩き始める。

「呼んでいるのよ。なにか困った事があるんだわ、きっと」

少女の好奇心は次から次へと移る。

主人の供でご不浄に行つた筈の自分が、いつまでたつても帰つてこないことに、そろそろ誰かが気がついてもおかしくない頃だ。内心で溜息を吐き、彼女は樹立の影をいく主の背を見失わないように追いかけた。

一羽の青い鳥を追いかけて進んだ先には、もう一羽の青い鳥が片翼を広げたまま佇んでいた。合流した二羽が揃つて歩き始める。そしてまたもう一羽。そしてさらに。増え続ける“歩く鳥”はいったい今何羽いるのだろう。歩く鳥の一团をミアリエルと女官は追う。やがて少しだけ開けた場所に出る。樹立の中でも一際太い幹をした樹を囲むように、歩く鳥たちはその歩みを止めた。

「樹……何かあるの？」

ミアリエルはそつと樹の幹に手をあて、見上げる。何かを期待するように、ある鳥がまたクウと鳴く。またある鳥は広げた片翼を奮わせる。

見れば、樹の上方にある枝にも鳥が留まっている。一羽だけではない、ミアリエルとエマウの両手を合わせた以上の数。

「あなたたちの、寝る場所？」

鳥達はミアリエルの声になんの反応も示さない。

「ちがうの？ うーん困つたわね。エマウあなた鳥語はわかる？」

そんな魔術があるのだろうか。期待するようにこちらを伺っている鳥達の目に、エマウはなんとなく居心地が悪い気がして「わかりません」と言いながら後ずさる。

「そうよね……」しばし思案していたミアリエルだったが、何かを思いついたように目の前にある樹の肌へ両手をあてる。静かに注がれる真力。かさかさと葉擦れの音をさせ、枝が腕をおろす。人が腰掛けるのに手ごろな幅を持っているそれに、ミアリエルはきれいな微笑を零すと、エマウの腕を引き、躊躇無くそれに跨った。鳥達が続く。

次の瞬間ぐいんと枝が持ち上がり、ミアリエルはあわてて体を安定させるようしがみ付いた。背後にいるエマウは声にならない叫び声をあげたようだ。お目付け役を出し抜けた事に、いくばくかの爽快さを味わう。これは彼女にとって、いつもの遊びだった。

「姫……さま……、私、高い場所が……」

「そんなに高くないわよ、だってほらせいぜい二階程度の高さよ」

ミアリエルの正面に窓がある。

庫院の一室だろう。

一羽の鳥が、ミアリエルの膝に飛び乗り、ドレスの布地を啄ばんだかと思うと窓の方へ体を向ける。

室内の照明は落とされている。が、開けはなれた窓枠には、パン屑らしきものが並べられてある。

またもう一羽の鳥が、つんつんとミアリエルを突付く。

「お前達あれが欲しかったの？」

ミアリエルは声をあげて笑い出したかった。鳥達に誘われるとい

うのも初めての経験だったし、彼等の目的（と言ってもいいのかは不明だが）がパン屑を欲することだなんて。あまりにも馬鹿げている、予想外だが、自分の冒険譚らしいといえばらしい。

「少し待ってね」

枝から窓まではミアリエルの体分離れている。

「樹さん手伝ってくれるかしら」

優しい力を幹へと伝えようと、腕を伸ばすよう枝がしなる。

そして、あと窓まであと僅かという場所で伸びた枝がぴたりと止まる。

嬉々とした様子で枝をちょんちょん渡った鳥が、何かに邪魔され、ぼたりと地上へ落ちた。

「……………結界ね」

ミアリエルは、流れる力に目を凝らす。

奥宮を保護しているものに似ているようだった。

——許諾無き者は入る事叶わず。

試しに、髪飾りを投げつけてみると、見えない壁に弾かれ落ちる。鳥達がクウクウ急かすように騒ぎ始め、ミアリエルは困ったように眉を下げる。瞬間、背後でエマウが息を飲んだ。

「ミアリエル、様っ」

女官の指差す先、開け放たれた窓の向こう。

闇色の中、闇色を纏った一人の女が、ぽかんとした表情でこちらを見ている。

奇妙な沈黙が降りる。

「こんばんは良い夜ですわね」

ミアリエルの声に、室内に居た女はぱちぱちと瞬きを繰り返した。

「……こんばんは……だれ?……」

「聖官の方? 女性がいらっしゃるなんて珍しいですわね……ええと、お願いがあるんです。その、パン屑をいただけないかしら? この子達のために」

「ぱん……?」

「ええ、パン屑」

枝先の鳥がばさりと両翼を広げる。

女は一瞬驚いたように鳥を凝視し、それでもどこか納得のいったような表情で小さく頷くと、パン屑を寄せ集め、片手をミアリエルに向け差し出し、ぴたりと動きを止める。女の手を指してぴよんと飛び上がった鳥が、また、ぼたりと地上へ落ちた。

女は困惑したようにじつとこちらを見つめ返す。

ミアリエルは眉を寄せる。

再度腕を伸ばそうとした女の動きは、すべて見えぬ壁に遮られる。

「できません」

幼子のような発音で女が言った。

「なんてこと……」

ぐるぐると思考を巡らせていたミアリエルがぼつりと呟いた。

——許諾無き者は入る事叶わず。
そして——許可無き者の出る事を禁ず。

奥宮内のミアリエルが生活する範囲を守護する結界と、同様の物がこの庫院に施されているのだ。
誰かを護る。否、閉じ込める為の結界。

——籠の鳥。

途端に向かつ腹が立つ。

「先ほどの質問にお答えします。わたくしはミアリエル。あなたの同志ですわっ！」

大聖堂の控え広間で談笑していたディエルは、弾かれたように立ち上がった。

己が織り上げた術への干渉。

「いまのは」

自然を満たす力が乱れた。

「ええ」

小さく頷いたディエルは「ああ、でも」と押し戻すようにシェイルの肩に手を置き、続ける。

「シェイルはどうぞここに居てください。ミアリエルが私の結界に力をぶつけたようです。——たぶん問題ありません。ええ全く」

「おい、どこが問題ないんだ」

「——ちよつと様子を見えます。あの娘は力の制御が下手ですからね。何かの拍子にうっかり力を解放させてしまったんでしょう。

仕方の無い娘です」

珍しく気まずそうな表情を浮かべ、ディエルがそそくさと部屋を出て行く。肩を押さえつける力の思いがけない強さに、内心首を捻る。

「……五人ほど付いて来い。残りは分かれて中と外の警護にあたれ」
暴発に近い形で爆発した力の残滓からは、ディエルが言ったとおり危険な物は感じられない。が、万が一という事もある。

なにをやらかしたのだ。とひとりごち、シェイルは大司祭を追う。

そして庫院に駆けつけたシェイルは、呆れ果てた惨状に思わず溜息を吐いた。

植物に蹂躪しつくされ半壊となっている建物。

不自然なほど伸びきった庫院周りの木立——一部は建物一階の壁

に突き刺さり、屋根まで抜けていた。

時を少し遡る。

珍しく酔っ払って寝入ってしまった凜子は、不意に喉の渴きを覚え目を覚ました。頭の奥がじんわりと痛む。

室内は暗く、だが照明の点け方を知らなかった彼女は手探りで水差しを求め、窓辺に寄った。確か卓の上に目当ての物はある筈。ぼんやりとした記憶を辿りながら、薄闇に手を伸ばしかけた時、押し殺したような声を聞いた気がして顔をあげた。

可愛らしい少女が闇夜に浮かんでいる。

まだ酔いが残っているのかと目を凝らすと、少女は浮かんでいるのではなく、樹の枝にまたがっているのだった。その後ろにももう一人、自分よりかは若そうな女性が必死な形相で枝にしがみ付いている。そして彼女達をとりまくたくさんの鳥。

淡茶の柔らかな巻き髪に翡翠色の瞳。若苗色のドレスは捲くれ上がり、しっかりと樹の太い枝に巻きついている。そんな体制で少女はにっこりと微笑んだ。

短いやりとりの中で理解できたのは、この少女はどうやら鳥にパン屑を与えたくて、樹に登ったという事。なぜ、どうして、という疑問が駆け巡るが、凜子は意思疎通を楽にはかれるほど、こちらの言葉を知らない。少女の願いに応えるべく、棧に並べたパン屑を渡そうとしたのだが、見えない壁にぶち当たりどうしてもそれを渡す

ことが出来なかった。

そして――少女が何事かを叫んだ。

呆然とする凜子の目の前で、少女の登っていた樹がめきめきと音を立てながら体を膨らませていく。こちらに向かつて伸びてくる枝は見えない壁に遮られ、不自然な方向に曲がっていく。あつという間に視界は緑と茶色で隠され、どしんという衝撃と共に凜子はすっころんだ。派手に何かが壊れる音が、暗闇に響く。

「リイン！ 大丈夫っ！」

飛び込んできたエイゼルに抱き起こされる。

凄い力でかくかくと体を揺すられ、凜子は口元を手で覆った。

「ぎもぢわる……あんまり揺すらないで……」

「真力にあてられたかつ！」

「頭に響く……大声やめて……」

日本語で苦しそうにうめく凜子に、エイゼルは一層必死の形相になりぺたぺたと額や頬に手を当てる。無理やりに立ち上がらされ、凜子の体は重力をうまく捕らえきれずに、ぐらりと傾く。

冷静な状況でいられる訳が無い。起き抜けで、喉もまだ潤せないまま、樹上の少女と対峙していたかと思ったら、樹の枝が膨らみ、何かの衝撃で転び、エイゼルにかくかく揺さぶられる。夢の続きなのか、はたまた現実に起きている出来事なのか。こちらに来てから訳のわからない事だらけだ。挙句の果て、エイゼルに荷物のように担ぎ上げられ、ぎゃあぎゃあ喚いた。

「自分が何をしたか理解しているんですか？」

ミリエルは、猫の子の様に首根っこを掴まれぶら下げられる。

「甘やかしすぎましたかねえ」

「わ、わたくし何も悪いことしていないわ。庫院を損壊させた事は認めますっ！ でも！」

「でも。じゃありません。自覚が足りなさ過ぎる」

貴女は王族。民の見本でしょう。

大司祭は笑みを湛えるが、瞳の奥は笑っていない。

ぼろっと、大粒の涙が零れ落ち、ミリエルの頬を濡らす。

「お兄様——大司祭様がつ、あんな……ふしだら！」

「何ですいきなり」

騎士を引き連れ姿を現したシエルを視界の端に捕らえ、ディエルは苦虫を潰したような表情を浮かべ、ミリエルをぽいっとそちらに投げる。

「この悪戯娘を広間へ。報告は後にしましょう。これでは今夜寝る場所が無くなってしまう」

「お前達は片付けを手伝え」

部下に指示を出すシエルに、ディエルが腕を振る。

「大丈夫です。人手は足りていますし、聖域の問題は聖域で片します」

「そういうわけにはいかん。これを引き起こしたのはミリエルなんだろう。何故こんな騒ぎを」

呆れ果てた声の調子に、反省しつつも、ミリエルは言い訳を紡ぐ。

「だって……助けたかったんですもの。閉じ込められてるの……」

「——人聞きが悪いね。大切な客人を預かっているだけだよ。さ、もう広間にお帰り。お仕置きは明日だ」

「お、お仕置きなんて受けないわよ！ 嫌がらせとしか言い様が無

い守護結界から」

「ミリイ！」

ディエルが鋭い声を飛ばす。

ミアリエルが身を竦ませる。

喉をひくつかせ、しがみ付いてくるミアリエルを抱き上げ、シェイルは天を仰いだ。

刹那、木霊するヒステリックな女の叫び声。

「揺すらないでって言うてるでしょ！ 下ろせー！ー！！！」

庫院の一階の殆どが樹に侵食されていた。二階通路の中央辺りまで腕を伸ばしていた枝はそのまま見えない壁に沿って天井へ突き抜けている。通路の中央でエイゼルは凜子を抱き上げたまま立ちすくんでいた。今、二重結界が圧倒的な力でねじ切られた。その方向を見るのが恐ろしい位の、威圧感。

かつ、と足音が響く。かつ、かつ。

抱えあげられてばたばたしていた凜子を浚う誰かの腕。

大切そうに、抱き込まれる。

精緻な刺繍がされた、藍色をした儀礼服が目映る。

視界の端で揺れる色はいつか見たような。

「リン」

低めの掠れた声を、知っている。

「リン」

その声を、知っている。

だから、名前を呼ぼうとして顔をあげ、

「え……」

思わず身を引いた。

宵宮明けて。

寝不足気味な顔をしている者が多い外宮を、すいすい歩いている黒き賢者もまた、その足取りと反比例するよう、顔に疲労を張り付かせていた。

聖域で起こった大騒動の後始末に奔走され、半刻も横になっていない。

執務室をあけると、案の定、どんよりとした空気に包まれており、ラストウーリヤの疲労は一段と増した。いつも華やいだ印象を無駄に振りまいている大司祭は、珍しくも生真面目な顔つきで腕を組み、窓辺でこちらに背を向けている右將軍は深い懊悩を背負っているようにも見える。先日、自分の下僕的立ち位置へ任命した管理官だけは、相変わらず隅っこの方で居た堪れなそうに立っていた。

「お待ちせいたしました」

彼が席に着くと同時に、溜息がシェイルから落とされた。

「報告を」

「……まず、ミアリエル様による庫院への破壊行為ですが、事故として処理されることになりました。中庭を散歩していたミアリエル様が“傷ついた鳥”を発見し治療を施そうとしたけれど、術の調整に失敗し力を暴走させた、と――」

シェイルが体を反転させ視線だけで続きを促す。

ラストウーリヤは手元の書類を捲る。

「よって教会から執政庁へ、建物修繕費などの請求はなされません。あくまでも事故なので」

「軍からの報告書もそれに習おう。……ミアリエルは？」

「ふてくされ——大変悲しんで、反省しておられますよ。大司祭猊下への誠意に答えるべく、今も休み無く筆を動かされております」
「なるほど。甘いな」

「大事にすると……“迷い鳥”に対する処置が面倒になりますし——」

凜子は室内を暫くの間うろつろとし、結局寝台へ腰をおろした。昨晚から、殆ど眠れていない。横になってみたものの神経が昂っているのか、眠りに付くことが出来なかった。

輿らしき物に押し込まれ、この部屋へ移されたのは明け方近くだ。それ以来誰とも顔を合わせていない。体内時計で恐らく昼過ぎ。高い位置に太陽があり、照明がなくとも室内は十分に明るい。寝台の直ぐ横にある小ぶりな机に、皿に盛り付けられた果実と水差し、籠に丸パンが置かれてある。腹が空いたら勝手に食べろという事なのだろうが、なんとなく胸がいっぱいだった。

ぼんやりと外を眺める。視界はわりと開けていて、眼下に見える濠の後ろに乳白色の壁が聳えている。壁の向こうの家並は、ずっと先まで続いていた。左に視線を転じると横に広い壮麗な建物。——まるで城のようだ。

ただし、凜子のいる部屋は実用重視といった感じで、装飾らしい装飾は無い。家具も寝台と机に椅子が一脚。それから机の横にある、上へ押し上げるタイプの衣装箱が一つ。室内の探検はすぐに終って

しまう。

——あれは、シャルだった。

たぶん……。と付け加えてしまうのは、実はいま自分の記憶に自信が無くなったからだ。あんな声をしていた……。と思う。あんな顔をしていた……。と思う。

けれど

「若々しさが足りないっていうか……。ねえ？」

誰に問うわけでもないのに、語尾がややあがる。

「いやおじさんって言いたいんじゃない、明らかに十八歳では無いよねえ？」

——もっと上。自分よりももう少し上。

こちらに来てから理解を超えた出来事に遭遇しすぎている。

凜子は少しの間うんうん唸って、諦めた。

コツン、と遠慮がちに扉が叩かれる。

また少しだけうとうととしていたようだ。

もう一度ノックの音が響き「リン、いい？」とエイゼルの声が届いた。

「どーぞー」

顔を覗かせたエイゼルは、なにやら言いながら室内へ入ってくる。凜子はだらりと寝そべったままだ。

「お腹空いてない？」

どうやら差し入れらしく、エイゼルが抱えている籠からはいい匂いが漂ってくる。椅子を引き寄せ座った彼は、机の上に置かれてあるものに手が付けられていないのを見ると、困ったように凜子に「具合悪い?」と問う。

「ぐわーい?」

「大丈夫?」

「だいじょうぶ」

「こっちは着替えね。着替え」

もうひとつの包みがチェストの上に置かれる。

「半刻後迎えに来るから、軽く食べて着替えておいて」

去り際にばんと頭に手を乗せられ、凜子は途方に暮れた。

「食べて。って言っていたよね……。あと着替え?」

早口で言われても殆ど理解できない。

籠の中を覗いて、ピロシキに似た揚げパンを一口だけ齧って、もうひとつの包みを解く。見覚えのあるものが出てきて勢い良く手に取る。いつも持ち歩いていた化粧ポーチだ。その下に月白色をした柔らかな布地。広げてみると、胸の下を絞るタイプの衣装だった。そして工芸品のような刺繍が施された布靴。

食べるのもそこそこに、早速着替える。可愛いものは大好きだ。ちゃんとした下着を身に着けていないのが残念だが、レースリボンを絞ると胸の辺りに大目のドレープが取られ、あまり気にならないひさしぶりにきちんとした格好をすると、気合が入るような気がする。ポーチから取り出したコンパクトを覗き込み、何日も基礎化粧で手入れしていなかった事を思い出す。しかし以前に比べれば規則正しい生活をした所為か、肌の調子はむしろ良い方に思える。

再び迎えにきたエイゼルもまた、いつもよりきつちりとした格好をしていた。

通じているのか？ と内心で思いつつも、凜子はエイゼルの褒め称える。似たような事を恐らくエイゼルも言っているのだろう。演技がかった様子で、左腕をこちらに向かつて差し出すので、凜子もつんと胸を逸らしながらそこに右手を添えた。

途端、二人は顔を見合わせ噴出す。なぜか双方ともに笑いのツボが刺激されたようだった。肩を揺らしながら、連れ立って歩き始める。こんな格好をしてどこに行くのだろうか。と、興味深げに視界を探っていた凜子だったが、ある意味で予想を裏切られ、肩をぐりと落とす。部屋を出て最初にエイゼルが案内してくれたのはお手洗いで、次に案内してくれたのは浴室だった。

「ここは外宮の学術庁が集まっている塔群」

壁に沿って建物をぐるりと回っているらしい階段を上がりながらエイゼルが説明する。凜子には九割以上理解できていない。窓から見えるのは、先ほどの部屋から見えた景色と反対側の光景らしい。楕円形の広場に整然と並べられた石畳が、モザイク模様を造りあげているのが見える。その周りをぐるりと囲むように背の高さが違う塔が立ち並び、広場に向かって入り口を開けていた。

ゆったりとした足取りで、七階ほど階段をあがった場所が、目的地だったらしい。

踊り場の先に両開きの扉がある。

誰何を問う声の後、漆黒を纏う人が姿を現す。
大きな執務机を中央に、両側に書架が並び室内の様相は、最初の

街で訪れた教会の一室に似ていた。

「その娘を中央に」

凜子は机の前に置かれてあるものを捕らえ、反射的に嫌な顔をした。

紋様の彫りこまれた扉が、床に置かれてある。

きちんとした格好をしたのだから、何か特別な事が行われるのかと予測していたのが、また例の妙な儀式が行われるらしい。雰囲気的に自分に言っているんだろうなと、凜子が自ら進み出て扉の上に立つと、それで良いといった顔で賢者が頷く。

「やあ遅くなった」

いつ現れたのか。

ディエルに左腕を取られる。

そうしてもう一人に、右腕を。

ちくりとした痛みに顔を顰め、腕に目を遣ると、また手首辺りが裂かれ赤色を滲ませる。前回のようになじりいかなかったただけマシかもしれない。傷口は忽ちのうちに塞がり、服を汚すことも無かった。

エイゼルが持つてきた丸椅子に腰掛けると、男達の視線との距離が更に開いた。正面に賢者、その左にディエル、そして右に……先ほどから無言を貫いているシェイルである。やはり面接か何かを思い出させるこの状況に、凜子はなんとなく居心地悪そうにもぞりとする。

.....

.....

.....

.....

隔離結界とやらが出来上がった状態だと思われるのに、なぜか誰も言葉を発さない。

ならば、と口を開くと、思いの外、大きな声が室内に落ちた。

「えっ、うわ……」

シェイルがびくりと体を揺らす。

くすくす笑いのディエルは、賢者と似たように難しい顔のままだ。

問われた当人は「ああ」と呻くように答えた。

「これ私の記憶があれだったら何とも言えないんだけど……勝手に」

私の家に押しかけて来た拳句、片付けるとか腹が減ったとか俺様は育ちが良いから床では寝れんとか言ったシャルだね」

「——な、にを……、……そんな事は厚かましい言い方はしていない！」

ディエルが視線を伏せる。

賢者がふいつと目を逸らす。

「露出狂だとかアル中だとか飼い犬にしたいと言ったよね？」

「勝手に話を作るな！ 飼い犬に似ていると言ったんだ！」

「えー……じゃあさ、キスしてきた拳句深い意味は無いとかいって突き放したよね」

がた、とエイゼルが背中を書棚にぶつける。

「……していない」

凜子が憂いを浮かばせる。

「そっか、気のせいかな」

「——接吻はしたが突き放していない」

無然とした表情を浮かべる男に、記憶の色が重なる。

手を伸ばせば届く距離にあるのに、とても遠い。

「シャルってさあ、今……何歳？」

「三十二だが、お前は——四十になるのか」

えええ！ と驚愕の声を思わずあげたエイゼルを凜子は一瞥して、首を横に振った。

「んなわけないよ！ まだ二十六！」

「——どういう……」

「そういう事。……やっぱりね……」

頭を抱え、凜子は唸る。

彼女にとってたかだか数ヶ月前の出来事が、シェイルにとって十四年前の出来事だという事実。昨日の邂逅で半分以上予測はしていたものの、言葉として宣言されるとかなり重い。凜子がこちらに来て一週間以上が経過した。向こうではどれくらいの時間が流れたのだろうか。仕事は二週間以上の無断欠勤で間違はなく解雇されてしまふ。願わくば、自分の世界で時がそれほど流れてしまわないうちに、帰りたい。

今や、彼女の胸中を占有しているのは、記憶にある同居人に対する懐かしさだけではなかった。

半分以上空気と化していたラストウィリヤが、我に返ったように続きを引き受ける。

凜子を還す為の術式構成の基礎解析が終りそうな事。を都合よく言語が翻訳されている状態であるにも関わらず、難解な言葉で説明され、凜子の理解は少しだけ遅れた。自分はあの世界に帰りたいのだ、と強く意識した直後に保障された送還の言葉。複雑な表情を浮かべ凜子は視線を落とす。安堵と寂寥が緋い交ぜになって、感情の折り合いをつけるのが難しい。なぜだか、泣きたくなる。

途中まで笑いを堪えていたディエルは、先ほどまで珍しく感情をむき出しにしていた兄を観察していた。そんな彼は今、むっつりとした表情でラストウィリヤと凜子の淡々としたやり取りを眺めている。

「ファルシオンの乙女の話、覚えているかいシェイル？」

「……なんだいきなり」

「天に住む青年が、地上に住む乙女に恋をした。青年は乙女を奪い

天の国に連れ帰る。しかし乙女は毎日嘆き悲しみ、その涙は青年の命を削った。己を苛む耐え難い痛みと苦しみから、恋する乙女を青年は手放し、乙女は地上へと戻る。さて、天で千の月日が流れた或る日――」

「――やめろ」

「只の物語じゃない」

異なる時を生きる二人の、憎悪と喪失と忘却の悲劇。

「……………」

「いずれにしろ憎まれるのなら、僕なら手放さないなあ」

隔離結界の効果が切れると、凜子を奪うようにしてシェイルは退室した。

ぐいぐい腕を引かれ、凜子は時々高い位置にあるシェイルの横顔を避難がましく見るが、ひたすら無言で足を進まされる。楕円をした広場を通り抜け、また別の入り口へ入る。長い回廊を渡り、奥へ奥へ。途中、華やかな衣装に身を包まれた人々が、流れる音楽に身を委ねている空間の前でシェイルは躊躇したように足を止めた。

結局、凜子はその大広間の手前で、シェイルと似たような格好をしている青年に預けられた。そんなには待つていない。通りすぎる人を観察しているうちに、程なくしてシェイルは戻ってきた。それから、また奥へ。談笑と喧騒がだいぶ遠ざかった所で、とある部屋に引っ張り込まれた。ここまで二人の間の会話は完璧になかった。もちろん互いの語学力に関する問題もあるが。

四隅に設えられたトーチから燃え上がる炎が揺れる。

暖炉に火は入っていなかった。

飴色の家具。

藍色のカーテン。

記憶の中にある色重ね。

寝間への扉に紋様は無い。

恐る恐る凜子はその扉を開く。

薄明かりに浮かぶ、室内の様子は、見た事のない場所だった。

隣にあるのは、彼女の知る部屋ではない。彼女の部屋ではなかった。

がっかりしたような顔をする凜子に、シェイルは自嘲気味に笑う。彼女に伝えたかった何かが、シェイル自身にも判らなかった。

「リイン」

髪を軽く引つ張る。巻きつけては解きまた巻きつけては解く。

「黒だな。元もとの色は黒いと言っていたか」

「くろ」

「髪色が黒いな」

「いろ、黒い。髪」

んー、と眉を寄せ、凜子は呪文のように単語を唱え始める。

シャルに辿りつくまでに覚えたこの世界の言葉。

「シャル、ベレー、ガーラント、クアルツ、ズアッヘン、チエザレ、ライカ……」

「後半、ぜんぶ酒じゃないか……」

呆れた声に、凜子は笑う。

あの時も確かこんな感じだった。

とりとめもない話をして、それぞれが作業に集中して、会話が止

まるときもあつた。シェイルは凜子の髪を掬い上げ、名残惜しそうに放す。

彼女の時間はあの日から殆ど動いていない。

反して、長い時間をかけて重みを増した己の夢。

あのとき共有した感覚が、彼にとって掛け替えの無い宝になったのに対し、彼女は違うのだろう。きっと。

長い夢から強制的に排除され、彼は感情を持て余す。

凜子を送りがてらの庭園では、睦み事を交わす密かな囁きがそこかしこにあつた。

呆れたような顔をしている彼女を急がせ夜の回廊へ出ると、用済みとなったのか、踏み拉かれた花冠が花びらを散らしていた。

華宵の夜は、終る。

薄桃色の花を弄び、少しだけ考えた後、彼女は切り離れた花びらを一枚だけ手帳挟んだ。

ようやく手元に帰ってきた荷物を広げる。

チョコレートのお包みは中身が無かった。気落ちする心を追いやる。欲を言えば、甘いものが食べたいと思っていたのだ。衣食住を面倒見てもらっているうえに、ささやかな娯楽。酒まで出てくるのだから「ちよつと甘いもの食べたいんだけど」なんて要求はかなり図々しいだろう。

ロサ老人の家では、半地下になっている貯蔵庫で食料を保存していた。絞ったベレーの乳は、金属製の筒にいれ保管する。まるで石自体がスイッチであるかのように、上部にある窪みに石を嵌めこむと、筒が冷えるといった具合だ。簡易の冷蔵庫的なものももしかしたらあるのかもしれない。もう少し小さい液体保存用の筒があれば持ち歩けるのに。

魔術は、凜子の想像以上に生活に浸透しているようだ。調理台に設置されてあった熱を維持するための魔術。浴槽に張られた湯温を保つための魔術。壁に設えてある照明の支え部分にも、鉱輝石を嵌め込む為の窪みがある。夜、室内を照らす灯りは柔らかで、蛍光灯ほどの明るさはないが、心落ち着く。

あらかじめ検分を済ませ、横になりながら手帳のページを捲った。懐かしくも遠い日常の欠片が散りばめられてある。何か記そう、と思いついたペンをとったのだが、いったい何から書き始めればいいのか思いつかなかった。結局、自分が世界の境界を跨いでしまった日にぐ

るぐると印を付ける。

夢は何も、見なかった。

「で、あの後二人で消えて何していたの？ 夜会に一瞬顔を出したのは君一人だけだったらしいけど」

「……………」

「数人の主賓に挨拶をして、とつとと辞したショーゲン様は、仕事に戻るのかと思いきや、若い娘を連れまわしていたって噂」

むつつりと黙り込むシェイルに、ディエルがくすくす笑う。

内宮の個人庭園で寛いだ様子で語らう兄弟の様子は絵になる。女官達は、茶の用意をしながら囁きあった。これが祝祭週間の事ならば、勇気を振り絞って、アンジエの花冠を渡していたのに。憧れを伝えるくらいは許されていたかも知れない。しかし華宵の祭は終わり、既に忙しない日常が回り始めている。

「別に何もしていない。それより……………なんでお前はここに居る」

「それ、酷いな。ここは僕の生まれ育った場所でもあるんだよ。今日はミリイの写本の様子を見に来たんだ」

庫院破壊に関してはただの事故として処理された為、ディエルが妹姫に個人的に与えた罰は、聖典を書き写すこと。全五巻に及ぶ長つたらしい聖典を凡て書き写すのは、筆が早い人間でも一月はかか

る。

「大司祭自ら？」

「そう」

「奥宮は向こうだが」

「その手前に兄の部屋があるんだから、立ち寄ってもおかしくないじゃないか。しかも二日酔いで寝込んでいるなんて、見舞わない理由が無い」

痛いところをつかれ、シェイルは再び黙り込むと、女官が絶妙な間合いで茶を運んできた。弟がカップを口に運ぶのを横目に、立ち上がる。

「飲まないの？」

「いらん」

振り返りもせず、東屋を後にする姿にディエルは軽く肩を竦めた。

騎士団の本部は外宮の東側にある。ちょうど学術庁がおかれてある塔群の真反対に位置している。と言っても似たような塔がある訳ではなく、外宮の二階部分と渡り廊下で繋がっているさらに外側にある建物だ。執務室で補佐官から簡単な報告を受けた後、鍛錬所に向かった。

この春に新しく配属された若い候補生達は、姿を現した將軍に、慌てた様子で礼をとる。

「そのまま続けろ」

鷹揚に手を振るい、再開された打ち合いを眺める。

無駄な動きも目立つが、総じて云うならば今年は当たり年かもしれない。

模擬刀がたてる鈍い音が蒼穹に沁み消える。

アゼリアスは安寧の国だ。ここ何年も国を挙げての大きな争いは無い。それでも西国境を成す山脈を越え、大陸の覇者を目指すイスラルは、小規模ながら侵略を試みている。万が一、ローマーヌが落ちたら次はトゥリローゼ。砂漠地帯を抱えるエジンドラレスまで足を伸ばすのは、冬が過ぎた今暫くは困難だと思える。夏の砂漠のみちゆきは、容赦なく体力を奪うだろう。

しかしエジンドラレスが有する砂漠の国境線に比べ、冬將軍に支配されていた険しい山脈が形作るアゼリアスの国境線は、春から夏、そして秋の初め頃まで、その様相を幾分か和らげる。雪が融け、固められた大地は、歩くのが困難であるものの、越えるのは不可能ではない。まして騎馬ならば。西国境にある砦の様子もそろそろ確りと見ておかねばならないだろう。

候補生の打ちこみが払われ、模擬刀が地を転がった。

足元に届いたそれを、シェイルは爪先で跳ね上げ、右手におさめる。

「もうしわけ、ありません！」

頬を高潮させた、候補生の一人が駆け寄る。

背はシェイルとおつつかつたが、体の線はまだまだ細い。

「腕だけで押そうとするな。重心を低くし、体ごと力を入れるよう意識しろ」

「はいっ！」

「俺も少し体を動かすか——遠慮なく来い。誰からでもいいぞ」

感嘆に目を瞬かせた候補生達に、シェイルは忽ちのうちに囲まれた。

蒼穹にゆつたりと雲が流れている。

午前中、ラストウーリヤの執務室に呼び出されていた凜子は、昼食を済ませた午後、腹ごなしを兼ね、エイゼルと連れ立って外宮を歩いていた。

過ぎる景色は目新しい。回廊から見下ろす庭園の彩りは、昨晚シエイルと歩いた場所にも似ているような気がする。しかし陽の光に浮かぶ花々は色鮮やかで、昨夜の秘め事が満ちた場所とは反して、健康的な印象の方が強い。右手に見える堅牢な城門は開放されており、人の出入りが多く活気に溢れている。シエイルが身に着けていた制服に似た格好の青年達が、城門を護っているのが、彼女達の居る建物の二階部分から良く見える。エイゼルが着込んでいる物と揃いの服は、官吏服か何かなのだろうか。どこか役所と似た雰囲気漂うこの一角でよく見かける。

「折角だから、街の様子も見せてあげたいんだけどね」

城下町へと伸びる道に、好奇心をおさえきれない様子の凜子に、エイゼルはそうひとりごちるが、許可が下りるかどうかは不明である。彼女の存在は外宮において、異質だった。この場所を訪れる者の殆どには、明確な目的がある。それが彼女には無い。ただ、帰る日を待っているだけ。思えば、エイゼルが初めて凜子に会ったときから、彼女は彼女の世界へ帰る為の方法を探していたのだ。いくつかの単語を頼りに。

この世界ではないどこかに在るべき存在。

隣で微笑んでいる姿かたちは、自分と変わらないように見える。感情が有り、思考し、血の通う人間。——彼女の世界はここでは無いのだと云う。

ある日突然、なんの理由も無く、似ていて比なる場所へ転がり落ちてしまったら……自分ならどうなるのだろうか。基盤も、識る理も、何もかも奪われる。全く想像が付かない。だがしかし、手に届く距離に居る、凜子はそれを体験しているのだ。今尚、現在進行形で。

先ほどの会合でも、帰りたいとはつきり言っていた。やらなければいけない事があるから。家族が居るから。皆が心配する。だから出来るだけ早く帰りたいのだ。と——。叡智の塔主指揮の元、彼女を送還する為の術式は順調に解析され、構築されつつある。稀有な色持ちのこの娘は、いつか帰るのだろう。しかし、彼女と関わってしまった今、それもまたエイゼルには想像が出来ないのだった。

そこまで考え、ふと一人の人物が脳裏に浮かぶ。過去の時間で、かなり特殊な関係性を築いたであろう、聖王騎士団右將軍。凜子に特別な感情を抱いているであろう事は、彼を良く知らないエイゼルの目から見ても明らかだ。

恥ずかしながら、術式の解析や構築をかなり不得手とするエイゼルには、完璧に理解する事が出来なかったが、凜子を送還する為に將軍閣下は必要不可欠な存在らしい。彼が若かりし頃に使用した隔離結界を基礎とし、異なる界を繋ぐ。触媒はシェイルと云うこちらの世界の存在と凜子と云う外の世界の存在。当事者たる彼は、当然その事を理解している。

——特別な感情を抱いてる相手を自らの手で帰す。

「おー！ ああいうの見るのはじめて！ 映画みたい！」

聞きなれない、けれども決して不快ではない、異世界の言葉が、
エイゼルの思考に割り込んだ。

足早に回廊の端に寄った凜子は、身を乗り出すように石造りの手
摺に手をかける。

剣戟の音が、風に乗って回廊に届く。

鍛錬なのだろうか——二人一組となつて、騎士達が剣を打ち合っ
ている様子が、彼らの居る場所からもよく見えた。

「感心感心、順調に飼い犬生活やっているみたいだなあ」

唐突な声。

途端に及び腰になったエイゼルを横に、凜子は太い声の主を見上げる。

がっちりとした体つきに、驚くほど長身の男だ。

恵まれた体躯に長剣を佩いた姿は、騎士というよりか戦士と言った方がしっくりくる。

茶色の目が面白そうにエイゼルと凜子を行き来した。

「な、なにされているんですか……」

「仕事」

別に俺が中央に顔出してもおかしくねえだろ。と、クアルツ支部の長をつとめる男は、飄々と続ける。

「で……ふうん？ 休憩中に女連れか？」

好奇心を隠すこともせず凜子を注視するレイモンに、エイゼルの足は自然と一歩前に出た。

「おいおい、紹介しろよ」

「えーっと……彼女は……リインと言いまして……ちょっと言葉が……」

自分の名が二人の会話に出たことに気がついた凜子は首をやや傾げ、それから気がついたように頭を下げる。

「なまえは、リインです」

辿々しい発音に何か思うところがあつたらしく、巨軀の男はぱりぱりと頬を掻く。

「おおーそうか。俺はレイモンだ。よろしくな？」

まるで幼子に接するように凜子の右腕をとりぶんぶん振った後、そのままの勢いで頭を撫でた。

巨大な手のひらに頭を掻き混ぜられた凜子は、ぽかんとした表情を返す。

そんな娘の様子にレイモンは一瞬だけ憐憫の色を瞳に浮かばせ、消した。

「あの……なにか、勘違いされているようですけど……彼女は異国からの客人です」

「そうなのか……？　なんだ俺はてっきり……っか共通語が通じない国ってどこだよ？　向こうの大陸か？」

「遠いところ、らしいです？」

「なんで疑問系なんだ」

「いや、俺も詳しいことよくわからないです」

「まあいいか。じゃ王宮は当然初めてだろ。嬢ちゃん騎獣見たくないか？　きじゅーうー」

「きじゅー？」

「こうやって乗るやつ」

ご丁寧に、パカパカと口に出しながら手振りを加える様子に、凜子は微笑む。

強面の男が繰り出すその動作は、なんとも可愛らしくて愛嬌がある。

「え、駄目ですよ！　俺が案内出来るの外宮のみなんですって！」

「別に遠乗り行くて訳じゃねえよ。ちつと厩舎に用事あるんでな。うちの騎獣なんて機密でもなんでもないだろ。結構いいの揃えているんだぜ。お国に帰って自慢してもらおうじゃねえの」

エイゼルに何かを話しかけ、不承不承といった様子で返される言葉に、レイモンが愉快そうに笑う。どういう関係なのかはよくわか

らない。ただ、レイモンの声音には親愛がこめられている気がする。自分は随分と無口になったものだ。と凜子は心の中で思う。隔離結界の中に居る時以外、言葉は通じない。正確に言くと、努力をすれば通じるのだが、その必要が今は無かった。二人の会話を音楽に、歩を進め石段をおりる。

柔らかな大地の感触。芽吹いたばかりの緑の匂い。

騎士達の鍛錬の様子が、回廊の上からよりもよく見える。

掛け声。金属音。優しい風。

絵に描いたような、穏やかな王宮の午後の光景が広がっている。

陽光を受け、煌めく黄金色に目をひかれる。

その下にある青灰の瞳は、こちらを射抜くようにして向けられていた。

手を振りかけていた凜子は、動きを止める。

模擬刀を預けたシェイルが、大股で鍛錬所を横切ってくる。

「何をしているんだ」

奇妙な組み合わせの三人に平等に視線を配ったシェイルはレイモンに問うた。

「外宮の転送門が調子悪いらしく、騎獣を借りに来ました。夕刻までにはクアルツに戻らないといけないんで。クアルツからこっちへの転送門は問題無いから、騎獣は本日中にお戻しますよ」

上司への礼をとりながら、レイモンは淀みなく答える。

「後ろの二人は」

「あーなんかお客さんらしいぞ。この坊主は賢者んとこのだし、別に怪しくねえだろ？」

たちまち瓦解した部下の仮面をシェイルが非難する事は無い。が、思案するように顎に手をやる。

「たまたまそこで行き合って、折角だからうちの騎獣を披露しよう

「思ってたな」

「あの……彼女の許可証はあります。ただ、外宮においてなので……問題があるようでしたら……」

お世辞にも友好的とは言えないシェイルの態度に、凜子は戸惑ったものの、視線に力を込めた。

あの週末と今。昨日から今日。何が違うと言われれば、何もかもが違うが、そういった目で見られる理由が特に思いつかなかった。伝えたい事を伝えられないもどかしさ。

言葉にしなくても伝わる事はある。だがしかし、言葉にしないと伝わらない事もあるのも事実。

「いや……許可する。????良く見張っておけ」

エイゼルは、付け加えられた言葉の意味をはかりかねながら、是と頷いたのだった。

足早に立ち去ったシェイルの背を送り、レイモンはしみじみと言う。

「うちの將軍様はまた今日もえらく機嫌悪そうだな。おまえ何かやらしたのか」

「え、俺ですか？ お話した事さえ片手で数えられる程度ですって」

「じゃ、嬢ちゃんか？ でも異国人だって言うしなあ、接点……」
空を仰いだレイモンは急に何かを思い出したように両手を打つ。
そして人の悪そうな笑みを張り付かせると、囁いた。

「その娘、猊下が探していた娘だろ。異国風の顔立ち。二つの色持ち。乳白色の肌。お前がうちに保護しにきた娘」

「えつと……あー……」

「あん時、碌に顔も確認しなかったが、嬢ちゃんはその条件に当てはまるな。猊下のコレか？」

「いや、それは無いです！」

「ふうん？ まー王族の近くに在る正体不明の娘に將軍殿が注意をしても特別妙な話ではないが。嬢ちゃん？ リイン」

名を呼ばれて素直にこちらを向いた娘に、にかつと笑いかけると、微笑が返ってくる。

「そこ窪んでるから転ぶぞ」

言われた端から足元をとられ体制を崩した凜子は、太い腕に支えられた。

「わー！」

「間諜っぽくねえな。隙があり過ぎ、注意すべきところに注意がいていない」『すんげー驚いた。なんでここに穴ぼこが』 って感情もだだ漏れ」

「彼女は紛う事なき一般人ですから！」

「みたいだな。お、ここだぞ。こいつらがうちの騎獣」

柵の向こうをレイモンが指し示す。

木製の屋根に覆われ、全面には壁面の無い建造物。干し草と藁、それから動物の体臭。

それらは凜子に、ロサ老人のところにあつたベレーの厩舎を思い出させる。それよりもかなり巨大で堅牢な造りをしているが。

柵の向こう側はかなり奥行きがあり、屋根の影が落ちていた。その暗がりには優美に体を丸めている獣が居る。

レイモンが懷から取り出した鈴のような物を鳴らすと、茶褐色の毛皮に埋められていた頭が擡げられた。

ゆつくりと身を起こした獣が前足を揃え身体を伸ばす。ネコ科の肉食獣に似ている気がする。けれど、その大きさは凜子の記憶の中にある虎よりもライオンよりもずっと大きい。

尻尾を揺らしながらこちらへとやってくる姿は王者の貴祿がある。陽の下に立った獣の瞳孔が縦長にすばまった。

「こいつはジエイド種」

「じえ、いど？」

「近くで見ると大きいですね」

「そこまで持久力はないが、なんせ脚が速いからな。クアルツまでなら大丈夫だろ」

レイモンの言葉に、獣が不満げに鼻を鳴らす。

「ヴェゼー種は出払っちゃっているんですか？」

「お前好きなの？ ああいうの」

「格好いいじゃないですか。飛行種は珍しいし市場でもほとんど見られない。閣下は先ほどあんな事言ってましたけど、軍の厩舎なんてなかなか来る機会ないですね」

「これからは嫌でも見れるようになるんじゃないか。なんというても中央官吏だからなあエイゼル」

「やめてくださいって……」

留め金が外され、柵が開かれる。

進みでた獣が地に伏せる。

興味津々な顔つきで獣を見守っている凜子の身体を、レイモンはひよいと抱え上げた。

声を出す間もなく、凜子は騎乗の人となる。獣が立ち上がり視界が一気に高くなった。レイモンを少しだけ見下ろす高さだ。そのまま動き始める獣に、凜子は慌てるが、レイモンは人の良さそうな笑みを浮かべているだけだ。緊張しながらも、身体を支えるために獣の首もとあたりに手を添える。触れる毛並みは驚くほど柔らかい。しなやかな筋肉が上下する動きが伝わってくる。厩舎前の広場と鳴っている場所をぐるりと一周し、獣は再び腰を落とした。思いがけない体験に、感嘆の溜め息が出た。

厩舎前でレイモンと別れて戻ると、賢者の執務室にはディエルが待ち構えていた。

なんだか今日はいろいろある日だなあと、思いながら、凜子は給仕されたお茶を飲む。隔離結界外でも、どうにか物事を理解させようと伝える方法を探そうと努力してくれるエイゼルは、この部屋に入れないらしい。ディエルに連れてこられたのは、叡智の塔からだいぶ奥まった場所に在るこじんまりとした建物だった。三方に大きな窓がとられ、春の日差しが惜しみなく室内へと降り注ぐ。向かい合って座しているのは、いかにも深窓の令嬢です。といった格好をした少女だ。あの夜、闇の中から姿を現した。

思えば、この少女が切っ掛けを作ってくれたお陰で、今の自分は、閉じ込められる事も無く歩けているのだ。不自由、けれども自由。

「ありがとう」

何をとは伝えきれないが、そう頭を下げると、少女は翡翠の瞳を大きくさせ、それから花のように表情を綻ばせた。

「どうぞミリイと呼んでください!」

ミリイーそれが少女の名前なのか。

「ありがとうミリイ」

途端に、堰を切ったように少女が薔薇色の唇で音を紡ぎ始める。まるで小鳥の囀りのようだ。

余りの早口に、ひとつも理解出来る単語が無かったが。

ディエルは我関せずという顔で、しまいには部屋からも出て行つてしまい、空間に二人だけになってしまった。沈黙を埋めるため、菓子を口に運んでは「おいしい」お茶を飲んでは「おいしい」を繰り返していた凜子は、腹が満たされ過ぎ、迫りくる睡魔を気合いで追いやる。結局、互いに困惑したように顔を見合わせ、笑い声を落とす。会話の無い茶会はそろそろ終わりの時間を迎えそうだった。

「アンジェですわ。別に女性に渡したって問題ありませんわよね。良い匂い！」

去り際に渡された花束を、グラスを花瓶代わりにして生ける。室内にささやかに広がる香り。

昨晚、シェイルがくれた一輪の花と同じ香りだ。

きっとこの世界にも、誰かに送る花の意味があるのだろう。けれど、きっとそれを知る必要は無い。言葉を覚える必要が無いように。

あと何日、ここに居るのは判らないけれど、それほど長く留まらない気がした。

礼状を送りたいのだ。という娘に、ラストウーリヤは紙とペンを用意した。

「私こつちの言葉書けないから、トゥーリヤさん代筆して下さい」
用意された物を押し戻す凜子に、エイゼルは顔を引きつらせる。

「俺が代筆する！ から」

「勝手に文章付け足さないでね」

と、凜子は真顔でいい、リラとロサ老人、ニル宛のお礼を組み立てはじめた。『エイゼルに騙され、見知らぬ場所に飛ばされた』というくだりは、当のエイゼルによって『転送門の事故により』と意訳されたが、凜子は気づかないだろう。

執務室の雰囲気は随分変わった。凜子に加わる前までは、どうしても密談の匂いの方が濃かった。自分の机の横で、額をつき合わせるように紙を覗き込んでいる凜子とエイゼルは、気楽そうに会話している。集会所ではないのだが。ラストウーリヤは内心で溜息を落としつつ、何も言わない。

「そついや、手紙ってどうやって送るの？」

凜子の問いにエイゼルは「俺が持つていくけど？」と答える。

「そつじゃなくて、一般的に。手紙とか贈り物とか、遠い所に住んでいる人にはどうやって送るの？」

「ああ、だいたい荷運び専用の隊商があるから」

「ふーん。窓口とかあるんだ？」

「大きな街ならあるよ。ロサさんの所とかは村からも離れているから無いけど。そういう人達は近くの街まで受け取りに行く」

「なるほどね」

ほどなくして、エイゼルが書き上げた書簡を、凜子は満足そうに眺めた。

日に二度、ラストウーリヤが自身の執務室自体に隔離結界を展開するようになって、既に十日を越す。術はだいぶ娘にも、ラストウーリヤにも馴染むようになった。ついには、多忙なディエル自身に足を運んでもらわなくとも、彼の真力を極限にまでこめた鉱輝石を代用することで、ディエル個人を定義してある紋様術が発動するよう、調整できるようになった。隔離結界の新たな展開方法を見出せたのだから、異界の存在である彼女に関する調査が特別進展しなかったのを差し引いても、有意義な時間であったとも言えようか。

彼女の有する真力が変容することもなく、また世界を満たしている自然の力場に顕著な影響を及ぼすような兆候は見られない。ひと月にも満たない調査をもつてして結果と云うには早すぎるのだが、そろそろ帰してやつても良い頃合いだろう。彼女の為にも、自分達の為にも。??そして再構築した術式の展開結果を知る為にも。

非常に興味深い存在だった娘だが、新たな知識を得るには彼女の存在だけでは到底足りぬと云う事を、自らを知の探求者と自負しているラストウーリヤは十分に理解していた。このような事を娘に伝えたら、間違いなく気分を害するであろう。だから余計な事は言うべきではない。非情極まりない感覚かもしれないが、それがラストウーリヤの本質であって、いまさら変える事は不可能に思えるのだが??別れの準備を着々と進める娘の横顔を見て、チクリと胸が痛んだ。

水面に落とした石ころによって広がった波紋は、やがて消える。それくらいささやかなものである。

波紋は、自分を含め、彼女に関わった存在を示す。

しかしそれらはまたすぐに、在るべき日常を取り戻すだろう。

界を越えた迷子は、今晚帰される。

シエイルが定義づけされた紋様術の刻まれた、あの扉——幾つかの定義を書き換え、厳しい制約が書き加えられた——を利用して。

凜子の為にささやかな晚餐が開かれていた。

夜になって再度訪れた黒き賢者の執務室の中央には長テーブルが置かれ、簡単な酒席が整えられていた。

「これは匂いが残りますね」

「明日一日窓を開放してればいいんじゃない」

ついでに、引き籠もっていないでたまにはトゥーリヤも外出しなよ。とディエルが笑みを浮かばせる。

「三人とも、ありがとうございました。いろいろお世話になって」
殊勝な態度の凜子に、ディエルが片眉をあげた。

「僕は寂しいなあ。もう少しこっち居ればいいのに。大切に大切に閉じ込めて愛でてあげるよ」

「それちよつと怖いから遠慮しとく」

「冷たいなあ」

「この歳になって、生活基盤を一から作り直すのって大変そうじゃない。染み込んだ価値観もまったく違うしさ」

ぽんぽんと言葉が返ってくる凜子に、ディエルは心底残念そうな表情を浮かべた。

こつというのが一人居たら、自分の世界はもつと面白くなるだろうに。

「でもね、会えて良かったと思う。今でも夢みたーいって感じるんだけど、世界は一つだけじゃないんだねえ。それ知っただけでも、人生の幅広がりそう」

だから、本当にありがとう。

凜子は親愛と感謝を込め、一人ずつに握手を求める。

僅かに顔を顰めているラストウィリヤは、軽く凜子の手を握る。

ディエルは受け取った手に、音を立ててキスをした。

エイゼルは泣き笑いのような表情で、握手した後に、凜子の頭をかき混ぜた。

凜子がシェイルと顔を合わせたのは、あと少しで深夜を越えてしまっただった。

実に六日振りの事だ。

半分以上は想像なのだが、シェイルはこの王宮においてもかなり多忙な職についているのだろうと凜子は思う。

シェイルの兄弟であるらしいディエルは、自身の職について、教会に勤める神官みたいなものだと言っていたが、凜子と彼は殆ど毎日のように顔を合わせていたし、神官という職種はあまり忙しくないのかもしれない。それに比べ、シェイルと隔離結界内で言葉を交わしたのはたった一度だけ。鍛錬所らしき場所出会ったシェイル

には、あまり良い顔をされなかったのを思い出す。冷静に自分の立場に置き換えて考えてみると、職場に何の連絡も無く知人が訪ねて来たら、やはりあまり良い顔をしない気がする。

あの懐かしい部屋に迎え入れられ、続きの間への扉に刻まれた見事な紋様を目にし、凜子はそつと胸を押さえた。私物が運び込まれ、ラストウーリヤとシエイルが幾つか言葉を交わしている。遅れて入室したディエルが「ミリイから渡してくれと頼まれたものだよ」と書簡を凜子に差し出す。受け取ったそれを少しだけ考えて鞆の中に入れた。あの少女とは、結局二回しか顔を合わせなかった。交換日記のように、エイゼル代筆のもと何度か手紙をやり取りしたけれども、どれも他愛ない話ばかりで、最後の手紙を送ったのは今日の午後の事だった。その返事が今届けられるという事は、彼女もまた何かを知っているのかもしれない。

とても遠い所にある母国に帰る、長い長い旅路に出る――と云う言葉に隠された齟齬に。

ディエルと親しくしているミアリエルとディエルの関係も、凜子はまたよく知らされていない。いつだったかディエルに尋ねた際、曖昧に濁された返事が返って来たため、そこも凜子が踏み込んで良い領域ではないのだろう。改めてここに来てからの日々を振り返ってみると、自分は最初から最後まで異邦人のまま変わらなかった。この世界に紛れ込んでしまったとても小さな欠片。でも、それで良いのだ。ここに在るべきなのは彼らであって、自分ではない。そして自分が在るべき場所もまた此処では無い。恐らくもう二度と会う事も無い人たち。見る事の無い色彩。風の音も、花の香りも。すべて。少しだけ寂しいな、と思う。けれど、記憶は永遠に色褪せる事無く、美しいのだ。きっと。

回廊と居室とを繋いでいる扉が閉ざされた。
だがしかし、向こう側には人の気配がある。

それに反比例するよう、室内を支配するのは重たい沈黙。

扉に背を預けながら、凜子はもう一つの扉に向き合い立つ男の横顔を見つめる。

高い鼻筋に影が落ち、表情が隠されてしまっている。

「シャル」

久方ぶりに音にするその名が、酷く懐かしく感じられた。

彫像のごとく固まっていた男は、凜子の声に大きく息を吐いた。
知らずのうちに、呼吸を止めていたらしい。

「帰るか」

ぼつりと独語し、残りの言葉を飲み込んだ。

別れの時には、まだ少しだけ早い。

紋様を指でなぞり、ひとつ笑いを落とすと躊躇する事無く真力を注ぎ込む。目に見えぬ力が螺旋を描き、弾けた。空間は音も無くあらゆるものから遮断され、孤立した。いっそあつけないほどに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6552j/>

2Kの君

2011年11月17日19時15分発行